

教会学校教案誌

2007.10.11.12月号

日本キリスト改革派教会
中部中会日曜学校委員会

No.27

2007年10～12月カリキュラム (第27号)

—救済史に基づく二年サイクルカリキュラムの一年目—

月日 教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句	対 応 表
	単 元 の 目 標			
10月7日	日復活の主イエスとペトロ	ヨハネ21:15-19	ヨハネ15:5a	
	ペトロを立ち上がらせる主イエスの慰めの力を知り、この主に従おう			
10月14日	主イエスの昇天	使徒1:6-11		50 69
	わたしたちの救いのために天に上げられた主イエスの御姿を仰ぎ見よう			
10月21日	聖霊の降臨	使徒2:1-13		51 70
	上げられたキリストの霊が注がれて、神の国が進展する。聖霊を祈り求めよう			
10月28日 宗教改革記念	ペトロの説教	使徒2:14-42		51 70
	聖霊によって福音を力強く語るペトロ。聖霊を受けて、福音に仕えよう			
11月4日	美しい門でのいやし	使徒3:1-10		53
	聖霊を注がれ、キリストの名によって生かされる者の幸いを知ろう			
11月11日	アナニアとサフィラ	使徒5:1-11		54
	聖霊をあざむくことの恐ろしさに目を留める。真実に神と教会に仕えよう			
11月18日	ステファノの殉教	使徒7:54-60		(55)
	神のみわざを人間のわざでとどめることはできない。神の御力を仰ごう			
11月25日	サウロの回心	使徒9:1-19a		52, 57 74
	神に逆らう者をも福音の器に造りかえる神の御力を知ろう			
12月2日 アドベント	待降節・義の太陽	マラキ3:19-24		78
	義の太陽として来られる救い主を待ち望もう			
12月9日 アドベント	待降節・マリアへの告知	ルカ1:26-38		1
	神の御言葉の力に自らをゆだねたマリア。マリアの信仰の姿に学ぼう			
12月16日 アドベント	待降節・マリアの賛歌	ルカ1:39-56		
	小さな者、へりくだる者を高めてくださる救い主である神をほめたたえよう			
12月23日 クリスマス	降誕祭・主イエスの誕生	ルカ2:1-20		2
	まことの救い主イエスがお生まれになった。神のみわざを喜び祝おう			
12月30日 年末	ペトロに示された幻	使徒10:9-33		58 72
	先入観を打ち破り、人間の壁を突き破って進められる神のみわざを知ろう			

※「対応表」欄の上段は、『教会学校教師指導書（旧約編・新約編）』（日本基督改革派教会大会教育委員会発行）の該当する単元を示しています。「対応表」欄の下段は、『神の救いの歴史』（日本基督改革派教会教育委員会発行、1999年）の該当する単元を示しています。

も く じ

2007年10・11・12月カリキュラム	
まえがき	木下裕也 4
巻頭説教	久保浩文 5
日曜学校・教会学校訪問	
札幌伝道所教会学校の紹介	貫洞賢次 8
特別寄稿	
西部中会合同夏期学校の教案	吉田 謙 12
クリスマス工作	辻 泰男 18
自由募金のお願い	20
聖書研究・説教展開例・分級展開例	21
10月 7日	22
10月14日	29
10月21日	36
10月28日	43
11月 4日	50
11月11日	57
11月18日	64
11月25日	71
12月 2日	78
12月 9日	85
12月16日	92
12月23日	99
12月30日	106
成人科	113
いのちのパン（こども聖書日課）	119
2008年1・2・3月カリキュラム	133
2007年度年間カリキュラム	134
執筆者よりひとこと・あとがき	136

まえがき

木下裕也（中部中会教育委員会委員長）

いつも『教会学校教案誌』のためご加祷くださり、またご支援くださいますことを感謝いたします。二年サイクルの聖書物語（救済史）のカリキュラムを、なお今号と次号の二回分続けます。教案誌編集部では、毎回の編集会議のうちにそれぞれの主日の聖書箇所と主題を確定しています。救済史のプログラムならば、できるかぎり福音書から選ぶこと、それから以前に取り上げた箇所となるべく重複しないようにすることなどを心がけていますが、この仕事がなかなかたいへんです。五人の教師たちが祈りつつ知恵を出し合うのですが、ときにひとつの箇所を選ぶのにかなりの時間をついやします。教案誌の編集において、言うまでもなくこれがいちばん大切な仕事です。お覚えくださいますなら、また毎号の聖書箇所や主題の選定についてもご意見をお寄せくださいますなら感謝です。

聖書を読むこととはどういうことなのかをめぐって、D・ボンヘッファーは印象深いことを語っています（『共に生きる生活』）。以下はその要約です——

「わたしたちはわたしたちの生涯の歴史の中に自分の救いを見出すのではなく、イエス・キリストの歴史の中に、すなわちイエス・キリストの十字架と復活のみわざの中にこそ救いを見出す。わたしたちの救いはわたしたちの中にはなく、『われわれ自身の外側に』、すなわち聖書の中にある。それゆえ、わたしたちは自分を忘

れ、自分の生活を捨てて聖書へとおもむき、聖書の中に身を置かねばならない。わたしたちはイスラエルの民とともに紅海を渡り、荒れ野を越え、ヨルダン川を渡って約束の地に入る。イスラエルとともに疑いと不信仰におちいり、罰と悔い改めとを通して、ふたたび神の助けと真実とを経験する。それらすべては夢ではなく、聖なる現実である。そのようにしてわたしたちは自分自身の実存から引き出されて、地上における神の聖なる歴史のただ中に移し入れられる」。

神がこのわたしの生活にどのようなことをしてくださるのかということが、往々にしてわたしたちの関心になりがちなのではないでしょうか。けれども、聖書を読むということはボンヘッファーが上で語るような、まさしく逆転ともいふべきことが起こるということではないかと思えます。そこでこそ神はわたしたちとともにいてくださいます。そして神は、この神聖の現実の中に子どももおとなもひとしく招き入れてくださるのです。

子どもたちとともに紅海を渡り、約束の地を望み、十字架のもとに立ち、復活の主を仰ぐことができたなら、どんなに幸いなことかと思えます。子どもたちとともに聖書を生きること。これにまさる幸いはないと思うのです。

（名古屋教会牧師、教案誌編集委員）

「余りある恵み」

—ヨハネによる福音書6章1～15節による説教—

久保浩文（高知教会牧師）

その後、イエスはガリラヤ湖、すなわちティベリアス湖の向こう岸に渡られた。大勢の群衆が後を追った。イエスが病人たちになさったしるしを見たからである。イエスは山に登り、弟子たちと一緒にそこにお座りになった。ユダヤ人の祭りである過越祭が近づいていた。イエスは目を上げ、大勢の群衆が御自分の方へ来るのを見て、フィリポに、「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか」と言われたが、こう言ったのはフィリポを試みるためであって、御自分では何をしようとしているか知っておられたのである。フィリポは、「めいめいが少しずつ食べるためにも、二百デナリオン分のパンでは足りないでしょう」と答えた。弟子の一人で、シモン・ペトロの兄弟アンデレが、イエスに言った。「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます。けれども、こんなに大勢の人では、何の役にも立たないでしょう。」イエスは、「人々を座らせなさい」と言われた。そこには草がたくさん生えていた。男たちはそこに座ったが、その数はおおよそ五千人であった。さて、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えてから、座っている人々に分け与えられた。また、魚も同じようにして、欲しいだけ分け与えられた。人々が満腹したとき、イエスは弟子たちに、「少しも無駄にならないように、残ったパンの屑を集めなさい」と言われた。集めると、人々が五つの大麦パンを食べて、なお残ったパンの屑で、十二の籠がいっぱいになった。そこで、人々はイエスのなさったしるしを見て、「まさにこの人こそ、世に来られる預言者である」と言った。イエスは、人々が来て、自分を王にするために連れて行こうとしているのを知り、ひとりでもた山に退かれた。

（ヨハネによる福音書6章1～15節）

この箇所は、五千人の養いの奇跡と呼ばれる出来事です。これは、イエス・キリストの復活の出来事を除いて、四福音書に共通に記されている唯一のものです。ヨハネ福音書では「第四のしるし」として記されています。

この奇跡は、イエスがガリラヤ湖すなわちティベリアス湖（紀元22年頃、ヘロデ・アンティパスが湖の西岸に立てた、皇帝の名にちなんでつけた町の名前からつけられた名前）の向こう岸に渡られたときの出来事です。おそらく、ベトサイダではないかと言われています。

イエスがこの地に来られた目的は、イエス

ご自身が人を避けて祈るため（マルコ6：31）、また弟子たちにも休息を与えるためでした。しかし、イエスの後を追う群衆のために、それはかないませんでした。イエスの人気はうなぎ上りで、イエスの行かれる所どこでも、黒山の人だかりでした。その人気の原因は、「イエスが病人たちになさったしるしを見たからである」（2節）とヨハネは記しています。群衆の関心は福音を聞くことよりもむしろ病人が癒されたことを見聞きしてのことでした。イエスの遣わされた目的は、福音宣教を通して民衆を神の方に向けしめる、神に立ち返らせることにありま

した。しかし人々は、福音よりも、それに付随している癒しの業に心を奪われていました。「しるし」を通して示しておられる真理よりも、実利の方に目を向けていたのです。

イエスは目を上げ、大勢の群衆がご自分の方へ押し寄せてくるのをご覧になりました。時は逾越祭が近づいている頃で、3月から4月にかけてです。日もだいぶ傾き始めた頃でしょう。イエスは弟子の一人であるフィリポに言われました。「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか。」これは、いつもイエスがとられる弟子の教育方法です。一つの難問を投げかけて、相手の信仰を引き出されるのです。イエスはこの時も、ご自分がどうすればよいかわからなくて尋ねられたのではなく、「フィリポを試みるためであって、御自分では何をしようとしているか知っておられたのである。」(6:6)

ところがこの弟子は、残念ながらイエスの期待しておられた信仰は持ち合わせてはいませんでした。この時の群衆は、成人男子だけでおよそ五千人でした。それに女性、子供の数を入れると相当な数でした。フィリポは「めいめいが少しずつ食べるためにも、二百デナリオン分のパンでは足りないでしょう」と答えました。フィリポは経済的な才覚があったとみえて、五千人分のパン代をたちどころに計算しました。一デナリオンは、当時の一日の労働賃金です。これだけの人数分のパンを買い求めるには、莫大な資金が必要です。たとえそれだけの資金があったとしても、これだけの人が飢えを十分満たすには、ほど遠いのです。弟子たちにはそのような大金はなく、また、それだけのパンを売る店もありません。これだけ大勢の人々に食物を与えることは不可能なことです。フィリポに代わって、フィリポと同郷のシモン・ペトロの兄弟のアンデレが言いました。「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます。けれども、こんなに大勢の人では何の役にも立たない

でしょう。」この一言が、彼の不信仰を如実に表わしています。フィリポもアンデレも、今、自分の目に映っている現実を直視しているという点はよいのですが、彼らの側ですでに厳しい現実を分析し、かつ彼らの側で人間の常識で不可能という答えをすでに出してしまっているのです。

イエスを中心にして人が集まるとき、そこに一つの群れ、「教会」ができあがります。私たちも、この時の弟子たちの例にもれず、教会内のさまざまな問題をイエスのもとに持ってくる以前に、私たちの側ですでに結論を出してしまっている、ということがないでしょうか。最初から「どうせ駄目であろう。」と半ば、あきらめに陥っていることが多いのではないのでしょうか。この時の弟子たちは、二人とも不信仰というよりも、信仰そのものがないと言っても過言ではありません。彼らに欠けていたのは、パンではありません。信仰という霊的なものが欠けていたのです。いつの時代でも、イエスは、「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである」(マタイ18:20)との約束どおり、たとえ少数人数であっても、そこに集う人に真の信仰がみられるならば、キリストはそこに臨在される、つまり、「教会」は存在するのです。逆に今、いくら大勢の人が集う群れであっても、そこに真の信仰がみられなければ、それは「教会」とは言い難いのです。およそ2000年のキリスト教会の歴史の中で、教会が生まれ、なくなる、ということを繰り返してきていますが、その根本原因は何でしょうか。物質的・財政的な不足によってでしょうか。そうではなく、そこに集う群れの不信仰です。全能なる神、無から有を生み出すことのおできになる真の生ける神に対する信仰が失われたからです。イエスも、祈りを教える中で「人の子が来るとき、果たして地上に信仰を見いだすだろうか」(ルカ18:8)と問うておられます。

弟子たちの不信仰をよそに、アンデレが連れ

てきた一人の名も無い少年は、イエスの期待するものを持ち合わせていました。彼がもっていた「大麦のパン」は、質素な、貧しい人の食べるものです。魚も、調理された、おかずとしての魚です。おそらく、この少年が自分の弁当として親から持たされたものであり、それが彼の持ち物のすべてでした。イエスが食物を求めておられると聞き、この子は思い切って自分の弁当を差し出しました。それが何かの役に立てば、自分は食べなくてもよいと思って、全部を差し出したのです。子供用の聖書物語の紙芝居の中では、この少年のほかに友人が一人いて、この子が自分の弁当を差し出そうとすると、友人が「ぼくたちだけで後で食べよう」というのですが、彼はどうしても自分の弁当をイエス様にあげたいと言って名乗り出る、という風に描かれています。実際、友人がいたかどうかは別として、この時の少年の気持ちをよくあらわしたのではないかと思います。これこそ、イエスの一番求めておられた、いわば大人たちには見られなかった信仰です。少年は、大人たちのように信仰よりもまず目先の現実を考えることをしないで、「イエスさまに差し上げたい」イエスの求めに何とか答えたい、という損得抜き行動をしたのです。イエスご自身も「子供のようには神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない」(ルカ18:17)と言われました。ヨブ記32章7~9節にも「日数がものを言い、年数が知恵を授けると思っていた。しかし、人の中には霊があり、悟りを与えるのは全能者の息吹なのだ。日を重ねれば賢くなるというのではなく、老人になればふさわしい分別ができるのでもない」とあります。

さて、子供が持っているような、わずかで粗末な食べ物か、このとき何の役に立つでしょうか。しかし、イエスは喜んでそれを受け取られました。男だけで五千人なのに、五つのパンと二匹の魚をイエスは少ない、役に立たないとはおっしゃらなかったのです。少ないと思ったのは弟

子たちの方でした。どんなにささやかな小さな信仰であっても、それが真実なものであるならば、神の力と栄光は顕わされます。しかし、信仰がないところには、神の力はあらわれないのです。私たちにもとめられるのは、辛子種一粒ほどの信仰です。イエスにささげられたパンと魚は、感謝の祈りがささげられた後で群衆に分け与えられました。パンも魚も、人々は「欲しいだけ」(望むだけ)得て、十分に満腹になるまで食べることができました。しかも、すべての人が飽きるほど食べて、なおも余りができました。イエスの下さる恵みに、捨てるべきものはありません。十分に受けてまだ余りあるのです。

この奇跡は、一人の少年の信仰の行為として差し出された一人分の弁当からはじまりました。神は全能ですから、無から全てのものを生み出すことのできる御方です。しかし、神はあえて何か業をなさるとき、人間の信仰を問われます。そして私たちのたとい小さな信仰であっても、それに基いて神に何かがささげられるならば、(それは必ずしも物質的なものとは限りません。奉仕の業も、祈りも、霊的なささげものも、献金でも、)それが一度、イエスの手許に届けられるならば、私たちの思いをはるかに超えたものを神は私たちに返して下さるのです。不足すればそのために祈ることです。私たちがわずかであっても、そのために献げることです。私たちは、何も持たないようで、実は主にあって多くの人を富ませるものを持っているのです(コリント二8:12-15、9:6-12)。私の献げたものが他の不足を補えば、他の人のささげものが他の不足を満たすのです。主の手は短くないのです。むしろ、私たちの信仰が短いのです。

「主はモーセに言われた。『主の手が短いというのか。わたしの言葉どおりになるかならないか、今あなたに見せよう。』」(民数記11:23)

「主の手が短くて救えないのではない。主の耳が鈍くて聞こえないのでもない。」(イザヤ書59:1)

札幌伝道所教会学校の紹介

貫洞賢次（札幌伝道所宣教教師）

1. はじめに

札幌伝道所には、現在のところ教師会がありません。牧師が唯一の教師として教育を担当しつつ、伝道所委員会で話し合いながら運営しています。その意味では、教会学校を生み出す途上にあると言った方がよいと思います。今回は、そのような教会学校の姿を紹介したいと思います。

2. 教会学校と共同礼拝

教会学校と共同礼拝を連携させるよう、心がけています。教会学校は、毎週10時～10時30分までです。現在は、共同礼拝で告白するハイデルベルク信仰問答の箇所を解説しています。参加者は、小学5年～高校3年まで（小5・1名、中1・1名、高1・2名、高3・1名）です。

共同礼拝では、「子供のための説教」を行っています。正直なところ、これが子供たちの教育として最も重要な役割を果たしています。10分ほどの内容です。小学校3年生ぐらいまでの子供がいる場合には、説教の箇所を印象付けるような絵を2～3枚用意して用いるようにしています。そして、共同礼拝の中ではありますが、子供との問答を心がけています。その子供に向かって語っているのだという印象を本人に持たせるためです。しかし、子供向けにやさしく話はしますが、子供向けの内容に限定しないようにしています。主に旧約聖書を用いて、あとに続く礼拝説教の主題に関わる内容となるように努めています。3年生以下の子供がいなくなったら、絵の使用は打ち切ってきました。この頃から、子供たちが「子供のための説教」で自分たちへのメッセージは終わったと考えず、礼拝説教を積極的に少しずつ聞けるようになること

を期待してのことです。

現状の中で、何とかしようと努めている中で、今のところ、このような形に落ち着いています。

3. 「子供のための説教」から「礼拝説教」へ

「子供のための説教」から「礼拝説教」へと続く実際の様子について、紹介します。（2007年1月1日の説教から）

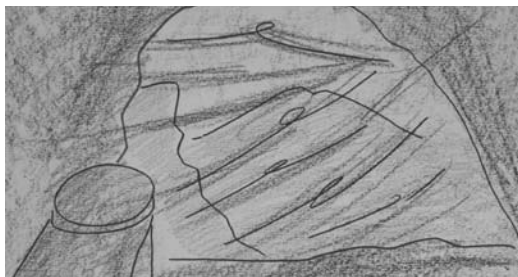
①子供のための説教（礼拝説教への導入を考えつつ、列王記上19：12-19）

預言者エリヤはこう言った。

「わたしひとりだけが残る……」

この判断は確かにやむをえないものである。しかし、それは自分の思いである。

主はエリヤを主の契約を思い起こさせる山シオンに導かれた。そこで、彼は驚くべき主の力の数々を見た。岩を砕く非常に激しい風を見た。



地震を見た。



火を見た。



最後に静かにささやく主の声を聞いた。自分の思いを捨てて聞いた。



エリヤは自分を捨てて聞いた時、力を得て、自分の来た道を引き返して行った。まだ見ぬ七千人の友がいることを信じて、主の僕として、その働きに立ち返った。

②礼拝説教（子供のための説教の主題を受け取りつつ、マタイ 28：16-20）

自分を捨てて聞かなければ、この御言葉に示されている驚くべき約束を聞きそこない、力を受けて、従うことはできない。

「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」（マタイ 16：24）

「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。……わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいる。」（マタイ 28：16-20）

4. 子供礼拝

年に三度、共同礼拝を子供礼拝として守っています。礼拝の諸奉仕を子供に割り振って、礼拝を守ります。いつもは、「子供のための説教」で途切れてしまう子供たちの集中力を、礼拝全

体に拡大する上で役に立っているように思います。

5. 祈り

教会教育の中で、祈りを重んじています。といっても、子供自身が祈ることではなく、彼らが祈られることについてです。週報の祈祷課題に毎週、子供たちの名前を順番に挙げて、その週の祈りの課題としています。教会の方々に忠実に祈られているということを知ってほしいと願っています。このような仕方での祈りは、子供たちが成長して青年となっても、また進学や就職などで北海道を離れても、継続しています。

6. 受験生食事会

高校受験、大学受験の後に、子供たちと牧師で食事会をすることにしています。これがどの程度、効を奏しているかは未知数ですが、少なくとも子供たちが悩んで努力していることについて、教会もまた関心をもって祈っていることを伝える役に立っているかもしれません。

7. 敢えて長所を探せば……

はじめに書いたとおり、教会学校そのものの実態が本当に弱いので、充実した教会学校ではありません。しかし、敢えて取り柄を探せば、子供たちの成長を教会全体で見守っているということです。あるいは、これは取り柄というよりも、教会の規模が小さいですから、当然のことなのかもしれません。共同礼拝で応答する子供たちの声を聞いては、教会員皆で励ましを受け続けてきました。子供たちが素直に御言葉を受け入れる姿からは、常に教えられます。

8. 課題

①教師

教会学校教師を得るということは、たいへんな恵みであることを覚えます。教会学校教師を

与えられることを、教会全体の祈りの課題にしていきたいと思っています。

②伝道

伝道が課題です。土曜日の定期的な活用を考えていますが、まだ実現していません。最近、奉仕を申し出てこられた方がおり、祈り始めたところです。

9. さいごに

もっと存在感のある教会学校の営みをしたいと祈り願いつつ、原点である礼拝に力を入れて進んでいます。礼拝において子供たちや中高生

たちの教育まで行おうというのは、大いに足りない点があるかもしれませんが、それが札幌伝道所の現状です。いずれ、主が礼拝を通して人を養い、教会学校教師を与えて、もっと実態のある教会学校を営ませてくださると信じています。

存在感の薄い教会学校なので、紹介に価しなかったかもしれません。しかし、同じような状況の中で歩んでおられる教会、伝道所のことを思って、敢えて貧しい教会学校の姿を紹介させていただきました。



教会学校風景



礼拝風景（子供のための説教部分）



子供礼拝（年三回）

週報

「ecclesia Reformata semper reformanda」
(一絶えず改革し続ける教会—改革派教会)



日本キリスト改革派 札幌教会

〒065-0023 札幌市東区北23条東18丁目5-24 TEL: 011-784-9373
(地下鉄東豊線 元町駅 3番出口を左、最初の信号左 直進)
ホームページ <http://gnome24.com/sapporo/>
メール sapporokyokai@me.0038.net

牧師 貫洞 賢次

牧師館
〒065-0022 札幌市東区北22条東19丁目3-15バスター元町401
TEL:011-785-8177 (携帯:090-8901-8120)

○今週の祈りの課題

- *礼拝のために (奏楽奉仕)
- *教会の交わりのために (新発田房枝姉)
- *若い兄弟姉妹のために (西田歌穂姉・高3)
- *地域・身近な人々への伝道のために (教会学校)
- *東北中会諸教会のために (北中山伝道所・坂本紀夫牧師)
- *7月15日(日) 伝道礼拝・7月16日(月) 教会一日修養会のために

■「ハレルヤ」(詩編150編 ①)

「ハレルヤ。聖所で神を賛美せよ。」(1節)

「聖所」とはどこでしょうか。神を礼拝する場所、神の御前です。預言者イザヤは、その場所で自分の滅びを意識しました。「災いだ。わたしは滅ぼされる。・・・わたしの目は、王なる万軍の主を仰ぎ見た。」(イザヤ6:5) 詩編の信仰者は、その場所ですらに逆らう者の行く末を見分けました。「ついに、わたしは神の聖所を訪れ、彼らの行く末を見分けた。」(詩編73:17) まさしく、聖所とは、神の栄光が何の妨げもなく明らかにされる所です。

「大空の聲で神を賛美せよ。」(1節)

「大空の聲」とはどこでしょうか。「大空」もまた、神の栄光を何の妨げもなくあらわしています。古い聖歌の方が、その意味をよく伝えています。「その力のあらわれる大空で、主をほめたたえよ。」(口語訳) 詩編の信仰者は、他の節ですらに逆らう者の行く末を見分けました。「天は神の栄光を物語り、大空は御手の業を示す。」(詩編19:2) しかし、不信仰な世は、罪によって複雑になっています。理屈によって閉ざされていて、神の栄光をそのままに賛美することができません。(ロヘド7:29) その妨げを離れて、「聖所で神を賛美せよ。大空の聲で神を賛美せよ。」

賛美の呼びかけは、一人一人に与えられています。それゆえ、周りの人々がどうであれ、一人一人が応答しなければなりません。しかし、神を賛美する者たちは、孤独に賛美するわけではありません。主を賛美する人々と共に、その交わりの中で賛美するのです。主の御前で自分を知り人を知り、主の栄光に直面して否応なくへりくだり、互いに相手を自分よりも優れた者として認めながら、主を賛美するのです。キリストを仰いで賛美する人々は、具体的な一人一人の信仰者たちを自分よりも優れた者とするように進まざるをえません。(フィリピ2:1-11) 「聖所で」「大空の聲で」主を賛美する交わりは、いかに自由で喜ばしいことでしょうか。

主の2007年7月8日(日)

○本日の集会

- *午前10時00分 教会学校
 - *午前10時30分 祈りの会 (礼拝奉仕者 礼拝室)
 - *午前10時45分 朝の礼拝 (受付 工藤千枝子姉)
- 司式 貫洞賢次牧師 奏楽 吉田美樹子姉

前 奏

招きの言葉

讃美歌 68

開会の祈り

主の祈り (讃美歌564)

信仰告白 (ハイデルベルク信仰問答)

讃美歌 134

来会者紹介

献金・感謝

松浦敬子姉

讃美歌 206

瞑想

教会の祈り

聖書 詩編51編15-21節 (旧約885P)

ルカによる福音書5章27-32節 (新約111P)

説教 「罪人を招く方」

吉田隆牧師

祈り

讃美歌 517

報告

讃美歌 546

祝福

吉田隆牧師

後 奏

午後6時 タの礼拝

聖書 出エジプト記33章18-23節

説教 「主の栄光」

讃美歌 71、83

○礼拝後 問安、祈りの会 (伝道・トラクト配布について)

午後1時15分 臨時教会委員会

○今週の集会

- 7月11日(水) 午前10時30分 祈禱会
- 7月11日(水) 午後7時30分 祈禱会
- 7月12日(木) 午前10時30分 聖書を学ぶ会

○来週(7月15日) 朝の礼拝 (伝道礼拝)

- 聖書 マタイによる福音書18章21-35節
- 説教 「神のゆるし、人のゆるし」
- 讃美歌 24、71、136、505、546
- 礼拝奉仕 奏楽 吉田美樹子姉 献金 藤田裕子姉
- 受付 新発田恵美子姉

○来週(7月15日) タの礼拝

- 聖書 出エジプト記34章1-17節
- 説教 「今日命じること」
- 讃美歌 70、344

○報告

*本日は、大会と中会から問安のために吉田隆牧師(中会伝道委員会・仙台教会)と佐藤正八長老(大会国内伝道委員会・東京教会)がお越しくださいました。遠路の問安に心から励ましを覚えつつ感謝いたします。朝礼拝の説教は、吉田牧師がしてくださいませ。また、午後には問安使をお迎えして臨時教会委員会を開きます。

*7月15日(日)は、伝道礼拝です。聖書:マタイによる福音書18章21-35節。説教「神のゆるし、人のゆるし」。案内ハガキを用意いたしましたので、ご利用ください。

*教会一日修養会にご参加ください。

7月16日(月) 午前10時30分~午後2時30分
主題講演「現在の教会の危機」(講師:ブルース・デビッドソン兄)
参加申込み:新発田恵美子姉まで。参加費:500円(昼食代)。

10:30~10:45 開会礼拝 10:45~12:15 講演

12:15~13:15 昼食 13:15~13:50 全体会

14:00~14:30 閉会祈禱会

*夏期特別献金をおさげください。(予算35万円)

○朝の礼拝欠席連絡 浅海保良 西田恵理子姉

西部中会合同夏期学校の教案

吉田 謙 (西部中会教育委員会委員長)

西部中会合同夏期学校では、毎年、統一テーマを決め、それに基づいて、全てのプログラムを進めていくようにしています。下記の教案は2007年度の分級教案です(統一テーマ「十戒」)。各学年によってかなりの理解の差がありますので、これをそのまま分級に用いることは出来ません。あくまでも準備の手助けとして、参考程度に用いていただくために作成されたものです。

2007年 西部中会合同夏期学校

「十戒」(キリストに従う)

①マタイによる福音書 22:34-40 (最も重要な掟) 出エジプト記 20:1-2 (十戒の序言)

ポイント: 十戒は神様に従って生きる神の民の道しるべであり、その中心は神様と人への愛であること。また、十戒を守ることによって救われるのではなく、十戒は神様の救いに感謝しつつ神様に従って歩むための基準であることを教える。

お話のヒント (ヒントですので束縛されずに適宜ご準備下さい)

・神は人間に善を行うように命じておられ(道徳律法)、人の心に良心を与えてくださった。しかし罪を犯し墮落した人間の良心は歪んだものになってしまった。そこで神は人が従うべき道徳律法を聖書に示してくださった。十戒はその要約といえよう。儀式律法、司法律法は一時代的なものだったが、道徳律法は今も守るべき神の民の戒めである。

・イスラエルの民は、神によって遣わされた

モーセを通してエジプトの奴隷状態から救われ、約束のカナンの地に導かれる途中、シナイ山で神と契約を結び神の民となった。この契約で神はイスラエルの民を守り愛されることを約束され、イスラエルの民は神に従うことを約束した。そしてこのとき神はイスラエルの民に、従うべき掟(十戒)をお与えになった。つまり、神の救いが先にあり、その救いにあずかった民が感謝しつつ神に従う、その道を示すものが十戒なのであって、この戒めを守る者が救われる、ということではない。新約時代に生きる私達は主イエス・キリストの福音を信じて、罪と死の奴隷状態から救われた者として、感謝しつつこの十戒を道しるべとしながら、キリストに従って生きるのである。

・この十戒をさらに要約すると、「神を愛し、人を愛する」ということに要約できる。十戒の二枚の板の一枚目(第一～四戒)は神を愛すること、二枚目(第五～十戒)は人を愛することにかかわる。主イエスも、律法の中で最も重要な教えについて質問されたとき、この二つの戒めに律法を要約された。私たちはとても律法が要求するような高い愛に生きることが出来ないが、全ての罪を赦された者として、この二つの愛という点から自分自身の生活を整えてゆくときに、正しい方向に成長してゆくことが出来るのである。

子供達への語りかけの例

* 神様は私達人間を神様に似たものとして、神様に従って正しく生きるために造っていただきました。でも、罪を犯してしまった人間は、何が神様に喜ばれる正しいことなのか、何が神様

を悲しませる悪いことなのかが、よく分からなくなっていました。そこで神様は、神様に従って正しく生きるための道しるべを与えてくださいました。それが十戒なのです。

*イスラエルの民がエジプトの奴隷になって苦しんでいたとき、神様は彼らの「助けてください！」という叫びに答えてくださって、モーセを通して彼らをエジプトから救い出してくださいました。そしてその途中、シナイ山という山でモーセを通してイスラエルの民に語りかけてくださいました。そして「私はあなた達の神としてあなた達を愛して守るので、あなた達は私の民として、わたしに従いなさい。」とおっしゃいました。そして、神様に従って歩むための十の戒めを与えてくださったのです。それが十戒です。私達は誰かの奴隷ではありませんが、神様を悲しませるような悪いことをついしたり、言ったりしてしまいます。そしてその罰として、いつか死ななければなりません。そういう意味で、人間は罪と死の奴隷なのです。そしてそんなわたしたちを救うために、イエス様がこの世に来て下さって、私達の身代わりとなって十字架の上で死んでくださいました。そして罪と死の力に勝ってくださって、蘇ってくださいました。ですから、イエス様を信じた人はもう奴隷ではないのです。イエス様によって悪魔の力から救い出されたものです。私達はそのことを感謝して、イエス様に従って、イエス様に喜ばれる子供になりたいと思います。そのための道しるべが、十戒なのです。イエス様を信じるということ、イエス様に従うということは、ひとつのことなのです。

*神様はたった一人の子供であるイエス様をわたしたちのためにくださるほど、わたしたちのことを「大好きだよ」っておっしゃってくださいます。そしてイエス様も、私達のために身代わりになって十字架の上で死んでくださったほどに、わたしたちのことを「大好きだよ」って、おっしゃってくださいます。だからわたしたち

もそんな神様のこと、イエス様のことを大好きになって、神様が命を与えてくださって大切にしてくださいる私達の身の回りの人々ことも大切にしたいと思います。この2つのことが、十戒のまとめです。

②出エジプト記 20：3～11（十戒の前半：神を愛すること）

ポイント：生ける唯一真の神を正しく知って、この神を愛し、正しく礼拝して生きるということは、決して堅苦しい束縛ではなく、本当の自由と平安を得ることが出来る、本当の幸いに至る道であることを伝える。

お話のヒント（ヒントですので束縛されずに適宜ご準備下さい）

・第一戒：神の形に似た者として創造された人間は、もともと神を思い仰ぐ心を与えられていたが、そのまなざしは墮落によって曇り、ゆがんだものとなってしまった。そのため人は様々な偶像の神々を生み出した。しかし真の神は唯一の存在であり、この世界の秩序もそのことを証している。唯一真の神を信じるときにこの世界を正しく理解でき、また私達の人生も秩序・統一あるものとなるのである。偶像の神々だけではなく、財産、仕事、地位や名誉、人間関係など様々なものにとらわれ、それを人生のよりどころとするときにそれらは偶像となり、人はそれらの支配に縛られて生きることになる。生ける唯一真の神のみを神として信じて生きるとき、それら全ての偶像の偽りの支配から自由にされ解放されて、統一ある人生を送ることが出来るのである。

・第二戒：神は霊であられ、目には見えないお方でいらっしゃるが、人間がご自身のことを知り、信じる事が出来るように、御言葉を持って語り、ご自身を示してくださいました。従って人間は神の言葉である聖書の御言葉に従って神様に礼拝することによって、正しく神を知り、信

じることが出来るのである。しかし人間は、神を目に見える形に表して神との交わりの手がかりを得たいという願いがあり、様々な像や絵画が礼拝の手段、対象として作られた。しかし神様はそのような偶像による礼拝を禁じておられる。天地万物を造られた生ける真の神を、見える被造物にかたどることは、神様に対する大変な侮辱である。

・第三戒：「名は体をあらわす」と言われるとおり、聖書の世界でも名前は単なる記号ではなく、その名を持つものの存在、本質をあらわす。従って神の名をみだりに唱えることは、神を冒瀆することである。たとえば、まじないのように神の名を唱えることで神の力をコントロールできると考えたり、「神に誓って」というような言葉で偽証をごまかそうとしたり、神の名を不謹慎な冗談に用いることなどがそれにあたる。私達のご自身の名を知らせることでご自身を示し、交わりを深めようとしてくださる神様のお心に感謝しつつ、敬虔な思いを持って神の名を大切に扱うべきである。

・第四戒：第四戒は週の七日目を安息日とし、聖なる日として世俗の用事を慎み、一日を神に捧げるように命じている。それは神様の天地創造の御業に由来するが、キリスト教会では、土曜日ではなく、キリストの復活を記念して、週の初めの日曜日に礼拝を捧げている。私達の真の安息は、私達の救い主なるイエス・キリストと共にあることにある。私達はイエス・キリストによって救われた喜びをもってこの日を日常の生活から取り分け、日曜礼拝に集うのである。

子供達への語りかけの例

＊第一戒：世の中には神様と呼ばれているものが色々ありますが、この世界を造ってくださった本当の神様はただお一人だけなのです。もしも沢山の神様がばらばらに造った世界だったら、もっとめっちゃくちゃな世界になると思わない？ でも、宇宙もこの地球も、その中の自然

も、とてもうまく出来ていて、規則正しく動いています。それは、ただ一人の神様がこの世界を造って下さって、今も守り導いてくださっているからです。そしてもしもいろんな神様がいたら、あっちの神様にも頭を下げて、こっちの神様にも御礼をして……と大変です。悪いことがあったら、「どこかで知らない神様が怒っているのかな」なんて不安になったりします。でも、ただお一人の本当の神様を知っている人はそうではありません。嬉しいときは神様に感謝して、悲しいときも神様が守ってくださることを信じて、心配しないで生きることができます。ただお一人の神様を信じて従うということは、きゅうくつなことじゃなくて、逆にいろんな心配事から自由にされることなのです。

＊第二戒：みんなはもしも誰かが「あなたの顔を描いてあげましょう。」と言って絵を描いてくれて、それを見たらそこにゴキブリが描いてあったら怒るでしょう。神様を絵や彫刻で表して礼拝しようとするのは、それ以上に神様に対して失礼なことなのです。私達はそのような自分勝手な方法ではなくて、神様が聖書の御言葉を通して教えてくださっている仕方、特にイエス様を中心に、神様を礼拝したいと思います。それが、教会でしている礼拝なのです。

＊第三戒：みんなの名前はみんなのお父さんやお母さんが一生懸命考えてつけてくださいました。みんなの名前はただの番号や記号ではなくて、みんな自身を表しています。そして神様のお名前も同じです。聖書にはいくつかの神様のお名前が書かれていますが、それらは神様ご自身とその素晴らしさを表しているのです。特に私達が一番良く知っている神様のお名前は、イエス・キリストでしょう。そのお名前には私達の救い主ということがあらわされています。またイエス様は別のお名前でインマヌエルとも呼ばれています。私達と一緒にいて下さる神様という意味です。私達はこのことを知って、心から礼拝をするときに、心をこめてそのお名前を

呼びます。

＊第四戒：私達は休まず走り続けたら倒れてしまいます。マラソン選手も途中で水を飲んでやるよね。私達は働いたり学校の勉強をすることも大切ですが、休むことも大切なのです。でも、休むってどういうことでしょうか？遊びに行っても、おいしいものを食べても、じつは本当に休んだことにはならないんですね。私達の心の渇きと空腹を本当に満たしてくださるのはイエス様なのです。イエス様が招いてくださる食卓に着くときに、私達は本当に心から休むことが出来ます。それが礼拝です。私達はそのために、イエス様がよみがえられた週の初めの日曜日を、特別な日として取り分けているのです。

③出エジプト記 20：13～17（十戒の後半：人を愛すること）

ポイント：神の形に似せて造られた人間の命の尊厳と秩序、また神に喜ばれる良いことを行うために造られ、生かされている私達であることを伝える。

お話のヒント（ヒントですので束縛されずに適宜ご準備下さい）

・第五戒：イスラエルでは両親は信仰を子供達に伝える点で宗教的権威でもあった。従って第五戒は人を通して伝えられる神の御心に服従することも命じており、十戒の前半（神に関する戒め；一～四戒）と後半（人に関する戒め；五～十戒）をつなぐ戒めともいえる。

・人は皆平等であるが、神様から与えられている様々な関係がある。親子の関係が代表するように、重んじるべき上下関係もある。それらは神様が人間の社会を維持するために与えてくださった関係であり、人はそのために立てられた権威者に従わなければならない。ただし、それは権威者達が意識的にしろ、無意識的にしろ、神様の御心を行っている限りであって、彼らが神に逆らう仕方と与えられた権威を用いようと

した場合、それに従わないという仕方で神様に従うということもあり得る。

・第六戒：人を殺してはならない、ということはこの国でもどんな社会でも常識とされていることであるが、「なぜか？」と問われると、神様抜きに明確な答えは得られない。神様が人をご自身の形（自由な人格ある存在）に似た者として特別に造ってくださったがゆえに、人の命はかけがえがないのであり、ここにこそ人間の命の尊厳の根拠がある。だから、人の命も自分の命も大切にしなければならないし、殺人（自殺も）は神の形の破壊であるがゆえに、重罪である。

・さらに第六戒は、ただ殺人を禁じるだけではなく、大切な命を危機にさらすようなこと、たとえば人の憎しみや殺意、病気、健康を損なうような生活、飢えや戦争や悪い環境などをなくする努力を求めるものであり、さらに積極的には互いの存在を喜び、愛し合うことを求めているのである。

・第七戒：神はアダムを造られた後、彼の助けてとしてアダムからエバを造られ、「こうして男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる」と聖書には書かれている。つまり結婚の関係は親子のきずなよりも深く、神聖なものなのである。姦淫はこの夫婦の一体性、創造の恵みを破壊する行為として禁じられている。従って、ただ浮気をしなければよいということではなく、真実な夫婦関係を築くことが求められ、未婚の者もそのことを目指して、つつしみを持って成長することが求められている。

・第八戒：神様は富の所有を禁じておられない。むしろ盗みを禁じることで人の所有権を守ってくださる。富は神様からの恵みであり、人は正当な手段でそれを受け取り、喜ぶことが赦されている。盗むことは、「神の恵みとしての富」という信仰を捨てて、神の定めてくださった道筋を無視して自分の利益を求めようとする罪なのである。従って、盗んではならないとい

う戒めは、「神の恵みとしての富」ということを覚えることであり、ただ単に盗まないだけでなく、与えられたものを積極的に分かち合うことも求められているのである。

・第九戒：古代では科学的な調査が出来なかったため、裁判では証言が特に重んじられた。従って偽りの証言は社会の土台を揺るがすような悪事として禁じられた。それは自分勝手な利益のために真実を曲げたり、他人を中傷しないということにもつながる。言葉は時に人を深く傷つけ、また時には人を慰め癒す。真実な愛に根ざす言葉を語りたい。

・第十戒：十戒のほとんどが行動や言葉に表れる事柄についての戒めであったのに対して、第十戒は、心のあり方を問題としていることにおいて独特である。神様は言葉や行動だけではなく、心のそこから清くなることを私達に求めておられるのである。

・私達は自分に与えられていないものを人が与えられている様子を見て、ねたんだり、むさぼりの心を抱きやすいものであるが、神様が一人子をも与えてくださる大きな愛の中で自分の必要を満たして下さっていることを覚えるときに、自分の境遇に満足し、隣人を受け入れ喜び思いが与えられてゆく。その中で、むさぼりの思いから解放されてゆくのである。

子供達への語りかけの例

*第五戒：神様はお父さんやお母さんを通して、正しいこと悪いことの区別など、神様に喜ばれることは何か、悲しまれることは何かを教えてくださいます。ですから、神様の子供達はお父さんやお母さんの言うことをちゃんと聞くのです。神様を知らないお父さん、お母さんでも、私達に正しいことと悪いことを教えてくださいまして、必要なものを与えてくださって、守り導いてくださいますから、知らず知らずのうちにも神様に従っているのです。だから私達は、お父さんやお母さんを尊敬して、ちゃんと言う

ことを聞かなければなりません。そして、お父さんやお母さんだけではなくて、教会の牧師さんや、学校の先生や、お医者さんや、おまわりさんや、政治をする人など、私達の上に立って導いてくださる人たちにも、同じ気持ちを持つべきなのです。でも、もしも人の上に立つ人が間違っていて、神様の御心と違う間違ったことを命令したときには、したがってはいけません。私達はどんなときも、神様に従うのです。

*第六戒：ある生徒は「命の大切さ」を教える道徳の時間に、「人間は牛や豚を殺して食べているんだから、自分達だって強い宇宙人がやってきたら、えさにされても文句は言えない。」といました。みんなはどう思いますか？人間も他の動物も、神様に造られたものです。でも、神様は人間を神様に似せて、お話をしたり、愛し合ったりできる、そして神様に従って生きることができる特別な尊い命を持つものとして造って下さいました。だから、人間は特別に尊いのです。わたしたちはそんな尊い命を（私の命も、他人の命も）大切にしなければならないのです。本当に人殺しをする人はめったにいません。でも、人の悪口を言ったり、憎んだりすることは、大切な人の命を傷つけることです。私達は自分の命も、お友達の命も大事にする思いやりを持ちたいと思います。

*第七戒：神様はアダムさんを造って下さったあとに、アダムさんを助けるためにエバさんを造って下さって、二人が結婚することを祝福して下さいました。そのように一人の男の人が一人の女の人と結婚をして助け合って、神様を中心とした新しいおうちを造って行く、ということ、神様は喜んで下さって祝福して下さいますのです。私達は大きくなるにつれて、男の子は女の子のことが、女の子は男の子のことが気になってきます。それは神様がちゃんと祝福された結婚のために私達を成長させて下さって、準備して下さいます証拠です。そのことを感謝して、そういう思いを大切にした

いと思います。そして大きくなればなるほど、大好きな人を本当に大切にするというのを、聖書から学んでいきたいと思います。

*第八戒：神様は私達に必要なものをご存知で、私達に与えてくださいます。神様が私達に必要なものを与えてくださるときに、二通りの方法があります。ひとつは、プレゼントとしてもらうことです。私達子供は、食べるものも、着るものも、勉強に必要な文房具も、ぜんぶおうちの人が買ってくださいます。もうひとつの方法は、自分で働いて手に入れるという方法です。みんなのおうちの人は、真面目に働いてお給料をいただいて、みんなの必要なものを買ってくださいますね。この二つの方法を通して神様は私達に、必要なものを与えてくださるのです。それ以外の方法で何かを自分のものにするのは、盗むことなのです。盗むということは、恵みを与えてくださる神様のお心に逆らうことなんです。私達は神様が必要なものを与えてくださることを感謝して、与えられたものを自分だけではなく他の人のためにも用いることの出来る人になりたいと思います。

*第九戒：みんなはひとつうそをついたために、そのうそをごまかすためにまたうそをついてしまった、ということはありますか？「うそも方便」などと言う人もいますが、うそからよいことが生まれることはまずありません。とくに人についてのうその話（悪口、意地悪な噂話）は、人を深く傷つけることになります。私達の口はうそや悪口ではなくて、神様を賛美するために与えられました。正しい言葉、思いやりから出た言葉、美しい言葉を語れる人になりたいですね。

*第十戒：みんなは、「ほんとは赤いのが欲しかったのに、もらったのは青いのがあった。」と悲しくなったり悔しがったりしたことがあります

せんか？そういうことは、もしかするとこれからもあるかもしれません。「あの子は運動も出来てかしこいのに、ぼくは……」「あの子は明るくてかわいいのに、わたしは……」なんて思って、がっかりしたり、悲しんだりしてしまうことがあるかもしれません。でもね、みんながみんなであることは、偶然ではありません。神様がみんなを、世界でたった一人のみんなとして造って下さいました。そして、イエス様の命と引き換えにしてくださるほど、みんなのことを大切に思い、愛してくださっています。その神様が、君に青いのを下さったのは、君に青く輝いて欲しいからなんだ！「赤いのが欲しかったのに…」とつぶやいているうちはなにもはじまらない。でも、「神様、僕に青いのを下さってありがとうございます！」と感謝するとき、君は君らしく輝き始める！そして、赤く輝いているお友達のこと、大切に思えるようになってくるのです。

※編集部より

西部中会教育委員会のご厚意により、西部中会合同夏期学校の教案を提供していただきました。ありがとうございました。



クリスマス工作

辻 泰男 (千里摂理教会)

◇フラワービーズを使ったツリー

(1本を11, 12, 13センチに切る)

材 料

1本を1/2 に切る)

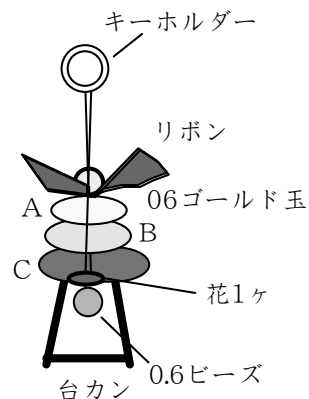
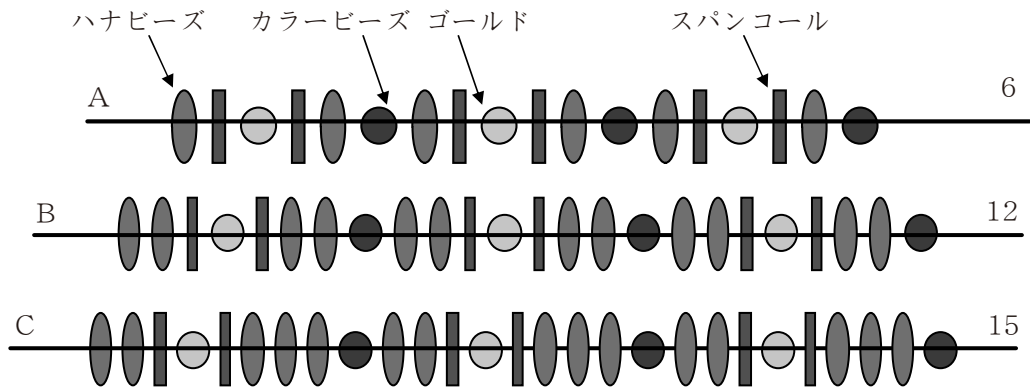
(集めるのが手間ですが 手芸店にあります)

- | | | |
|----|------------|----------|
| 1 | 花ビーズ | 35個 |
| 2 | 0.4ゴールド玉 | 9個 |
| 3 | カラービーズ | 9個 |
| 4 | スパンコール | 18個 |
| 5 | 下台カン | 1個 |
| 6 | 上 0.6ゴールド玉 | 1個 |
| 7 | 0.6ビーズ | 1個 |
| 8 | キーホルダー | 1個 |
| 9 | リボン | 約15センチ |
| 10 | ワイヤー#28 | 36センチ 2本 |

作り方

1. ABC各々ビーズを通して輪にして ワイヤーでしっかり締める
2. 0.6ビーズに1/2ワイヤーを通し二つ折り
3. 台カンの下からC、B、A A、花1ヶ、ゴールド玉を通し
4. キーホルダーに取り付け
5. リボンを飾り出来上がり

製作時間 約30分



◇フラワービーズを使ったホルダー

材 料

花びら型のビーズ（クリスタルフラワービーズ）：4～5色、28～30個

手芸用針金：直径0.6mmΦ、長さ16センチぐらい、1本

キーホルダー：小型20mm、金色、1個

鈴：10mm、金色、1個

作り方

1. ビーズの色を選び2色ずつ好みの色で14～15組並べる。然し初めと終わりは色を変える。
2. 針金の1方の端を1センチ程Lに曲げる。反対の端からビーズを並べた順に針金に通す。
3. 最後にキーホルダーと鈴を通して針金を振って結ぶ。余分の針金はニッパーで切取って仕上げる。
4. 注意 針金を振るとき心持ち余裕を持たせて鈴が動くようにした方が良いクリスタルフラワービーズのサイズは大小有るが、直径12mm位が使いやすい。

鈴は直径10mm、キーホルダーはリング部の直径20mm位。



材料費

クリスタルフラワービーズ：12mm、1色200個入り、¥204

鈴：10mm、8個入り、¥100

キーホルダー：20mm、10個入り、¥180

針金：0.6mm、長さ30センチ、20本、¥60ぐらい

価格は店によって違うので参考にしてください。 製作時間 15～20分

◇まつかさをを使ったツリー

材 料

松笠、フィルムのケース、紙粘土、カラーズプレー緑（少し乾燥が遅いですが水性の方が安全）、リボン、松笠に付ける小さなビーズ、のり、串カツのくし

1. 公園や山で拾ってきた松笠にカラーズプレーで色を付ける。
2. 底からキリで穴を開けて竹のくしを刺す下部は5センチぐらい出す。
3. フィルムのケースなど筒型のケースを使って鉢にする底を2センチ残して5個ぐらい切込みを入れてひだを付ける。
4. 紙粘土をケースに詰めてくしを差し込む
5. 乾いて堅くなったら松笠の表面に適当に糊塗りつける
6. 綺麗なビーズを選んで糊の上に振りかけ乾燥したらリボンを付けて出来上がり。
7. クリスマスツリーにも応用できるよ。

出来上がり



フィルムのケース

着色した松笠 小さなビーズたくさん



固まった紙粘土

『教会学校教案誌』発行のための 自由募金のお願い

教会のかしらなる主イエス・キリストの御名をあげます。

中部中会日曜学校委員会（2007年4月中部中会第一回定期会で教育委員会から改組）は、日本キリスト改革派教会をはじめとする改革・長老主義諸教会の教会学校・日曜学校教育に資することを目的として、『教会学校教案誌』を発行しています。2001年4月に始まり、すでに満6年となり、第27号まで発行して参りました。中部中会では7割ほどの教会により採用され、改革派教会全体でもおよそ60教会で採用されています。大会教育委員会もご支持を表明してくださっています。皆様のご支援に心からの感謝を申し上げます。

『教案誌』の発行は中部中会の事業として行われておりますが、中部中会日曜学校委員会では、あわせて皆様からの自由募金によってご支援いただきたいと願っています（2007年4月中部中会第一回定期会にて自由募金願いを可決承認）。子どもたちの信仰教育のために、ぜひ皆様からのお祈りと募金のご支援をいただきたく、よろしく願い申し上げます。教案誌を購入していただきやすくするために、教案誌の頒布価格を印刷・製本単価ぎりぎりにおさえています。『教案誌』をご購入くださることも発行のための支援となりますので、ご購入いただくことによってもご支援くださいますよう、お願いいたします。

目標金額	30万円
送金先	郵便振替 伊藤治郎
	00890-2-148183

※通信欄に「教案誌のための自由募金」と明記してください。

聖書研究・説教展開例・分級展開例

テキスト ヨハネによる福音書 21章15～19節

(1) 神の救いのみわざの歴史において、キリストの十字架の死に続くのは、キリストの復活である。表題の聖書箇所からは少々離れることになるが、この単元でまず第一に学ぶべきことは、主イエス・キリストの復活の事実である。

主イエス・キリストは、十字架につけられて三日目の朝、すなわち、日曜日の朝のこと、よみがえられた。ヨハネ福音書はそのことを告知知らせ、墓が空っぽであったことを伝えている（ヨハネ20：1-10）。女性たちがまず墓を訪ね、石が取り除かれていることに気づいた。次いで、ペトロをはじめとする弟子たちが駆けつけて、墓が空っぽであることを確認した。この空の墓の出来事は、主イエス・キリストが罪と死の力に対して勝利し、復活されたことの証しにほかならない。

(2) 続いてヨハネ福音書は、主イエス・キリストが婦人に現れ、また弟子たちに現れたことを告げている。復活のキリストは、墓の外に立って泣いているマグダラのマリアに現れて励まし、続いて弟子たちにも現れて、ご自身を示された（ヨハネ20：11-29）。ご自身の十字架の傷跡を見せ、ご自身の復活を信じることへと弟子たちをうながしておられる。「あなたがたに平和があるように」とおっしゃって、ご自身の恵みの御業に基づく神との平和を与えてくださっていることが印象的である。

(3) ヨハネ福音書は、20章31節でひとまず閉じられており、21章は、のちにヨハネ自身によって付け加えられたものと考えられている。

「ティベリアス湖」とはガリラヤ湖のことである。弟子たちは、しばらくのエルサレム滞在ののち、それぞれの住まいのある町に戻っていた。復活のキリストが現れてくださったとはいえ、以前のような、たえず主イエスのおそばにいて従う生活ではなくなっていたからである。弟子たちは、キリストの復活の不思議を思い巡らしながらも、人生について思案し、途方に暮れるということでもあった。もともと漁師であったペトロたちは、

ガリラヤ湖畔に戻り、何かほかにすることがあるわけでもなく、ひとまず、以前していた漁をもう一度しようということであったのであろう。

思い起こすのは、ペトロが主イエスに対して「あなたのためなら命を捨てます」（ヨハネ13：37）と誓いながら、三度、主イエスを知らないと言って否認したことである（ヨハネ18：15-18、25-27）。ペトロのうちには、自らの無力、むなしさを思う気持ちがいっぱいであったであろう。主イエスに対して申し訳なく、打ちのめされていたであろう。そのペトロを、主イエスは、とりわけいてねいに慰め、力づけてくださったのである。

(4) このときは不漁であった。そのとき、復活のキリストが現れ、指示に従って網を打つと、魚があまりにも多くて、網を引き上げることができないほどであった。これは、かつての出来事（ルカ5：1-11）を思い起こさせるのに十分であった。弟子たちは、こうして、復活のキリストに出会い、食事を共にする幸いを与えられた。パンと魚を分かち与える姿は、五千人の給食（ヨハネ6：1-15）を思い起こさせる出来事であったであろう。

食事ののちに、主イエスはペトロに問いかけられた。「わたしを愛しているか」。そのように三度問いかけ、ペトロに三度、「あなたを愛していることは、あなたがご存じです」と答えさせた。三度否認したことを打ち消させるかのごとくである。また、かつての傲慢な答え方（ヨハネ13：37）ではない、打ち砕かれたペトロの答え方、「あなたがご存じのとおりです」との言葉は印象的である。この対話を通して、主イエスはペトロの罪を赦し、その心の傷をいやしてくださったのである。そして、ペトロは、「わたしの羊を飼いなさい」と命じられて、再び主イエス・キリストに仕える者として立たせられた。キリストを否認した者が、主によって用いられる。打ち砕かれた者が召し出され、立たせられる。ここに、真実にキリストに仕える姿があるのである。この出来事は、「ペトロの再召命」と呼ばれている。（望月 信）

10月7日 「復活の主イエスとペトロ」 説教展開例

テキスト ヨハネによる福音書 21章15～19節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問24, 33

〔単元のねらい〕

単元の教理的主題は、「キリストの復活」を扱います。また、救いの歴史を扱う大きな流れからも「復活物語＝事実」を告げることが主題となります。カテキズムは、問24で扱います。つまり、復活祭のメッセージを告げることが主題となることは言うまでもありません。しかし同時に、テキスト固有の福音と慰めを語ることが重要であることも、同様です。それは、また問33の課題です。ここでは、復活の主イエスを三度も否定したペトロをなんとかして立ち直らせよう、慰めようとの主イエスの燃える愛が証されています。そして、その愛に飛び込んで行くことができたペトロ自身の幸い、喜びも証されています。信仰とは、そして救いとは、畢竟、この神との真実な関係、愛し、愛される関係、心が通い合う関係のことで。そうであれば、子どもたちに神との親しい関係のなかに、飛び込むようにと招き、その喜びを深めることが今日の礼拝式、分級の狙いになるでしょう。

「愛し、愛される喜び」

今、読んだ聖書のお話は、十字架につけられたイエスさまが、お墓の中からお甦りになられたところのものです。イエスさまは、十字架につけられた日から数えて三日目、つまり日曜日の朝早く、復活されました。

さて、お弟子さんたちは、十字架にはりつけられて死んでしまわれたイエスさまのことをどんな気持ちで考えていたのでしょうか。深い悲しみのなかに沈んでいました。それだけではありません。お弟子さんたちは、イエスさまが兵士たちに捕まえられてしまったとき、イエスさまをお守りすることもできずに逃げ出してしまったのです。ですから、みんな、深い悲しみや悔しさのなかにぼろぼろになって、落ち込んでいたのです。「本当に、自分たちはどうしようもない弟子だ、本当に、ダメな人間だ。イエスさまも死んでしまった。もう、昔の生活に戻って、弟子であったことを隠して、ひっそり暮らそう。」そんな諦めきった気持ちでいたと思うのです。

なかでも、ペトロという人は、特別でした。声をかけることもできないほどに、悲しみを目を真っ赤にはらしているのです。ペトロさんは、イエスさまのことが大好きでした。イエスさまに向

かって、「あなたさまのために命を捨てます。」と誓ったことがあるのです。ところが、イエスさまが予告されたとおり、ペトロさんは、「自分は、イエスさまの弟子ではない。イエスさまなんて知らない。」と裏切ったのです。イエスさまは、もちろん、お弟子さんたちが十字架の前に散り散りになってしまうことをご存知でした。裏切られることもなにもかもご存知でした。

復活されたイエスさまが、先ずなされたこと、それは、お弟子さんに会いに行くことでした。それは、何のためなのでしょう。皆さんだったら、どうでしょうか。もしも、誰かに裏切られ、嘘をつかれたとします。それが、分かったとき、その人に会いたくなるのでしょうか。もし、会うとすれば、僕たち私たちの口からは、いったい、どんな言葉が出てくるのでしょうか。

復活されたイエスさまは、お弟子さんたちを責めるために、懲らしめるために会いに行かれるものではありません。正反対です。イエスさまは、お弟子さんたちを、特に、ペトロさんを慰めるために、急がれるのです。

そして、弟子たちに会って、こう仰せになられ

ました。「平和があるように」これは、「大丈夫、あなたがたを叱りに来ているではありません。あなたがたを懲らしめに来たではありません。神さまの平和が今、あなたがたにあります。」そのように、神さまの赦しと祝福、つまり神さまの愛を告げるためなのです。

イエスさまにお会いしたお弟子さんたちは、どんなに喜んだことでしょう。イエスさまは死んで終わってしまったのではないのです。今、目の前に愛するイエスさまが生きておられるのです。しかも、イエスさまは自分たちを赦して、変わらない愛で愛して下さることをお知らせくださったのです。飛び上がって喜んだと思います。

ところが、それでもなお、お弟子さんたちのなかでもペトロさんは、どこか心が堅いのです。心に皺が寄っています。心にこだわりがあります。心が、晴れ晴れとしないのです。どうしてでしょうか。それは、イエスさまにあんなにひどいことをしたからです。ですから、ペトロさんは、いくらなんでも、もう昔のようにイエスさまのお弟子さんにはなれないはずだと考えてしまいました。ペトロさんは、もともと漁師でしたから、漁師に戻ることを決心したのです。ふるさとの湖の岸边に戻って行くのです。

しかし、イエスさまは放っておかれません。追いかけて来られます。そればかりか、イエスさまは、一晩中、漁をしたのに一匹もとれずに疲れ果てているお弟子さんたちに、魚をいっぱいに取りさせてくださったのです。さらに、ペコペコに御腹をすかしている弟子たちのために、炭火をおこして、とれたばかりの新鮮なお魚を焼いて、もてなしてくださったのです。このときの焼き魚は、どんなにおいしかったでしょう。一生忘れられない朝ごはんになったことでしょうね。そして、心も喜びでいっぱいになったことでしょう。

食事が済んで、イエスさまは、ペトロさんにお尋ねになられました。「ヨハネの子、シモン」ペトロはあだ名、シモンは本名です。優しく名前を呼んで、「この人たち以上にわたしを愛しているか。」しかも、一度だけではありません。三回も、同じ質問をされたのです。ペトロは、三回、同じように答えました。「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたをご存知です。」すると、イエスさまは、三回仰せになられました。「わたしの小羊を飼いなさい。」と。

イエスさまは、とことんまで、ペトロさんを愛しておられます。愛しているかと質問できるのは、イエスさまが本当に、愛しておられるからなのです。その御愛を受けて、ペトロも、「はい」と答えます。そこには、イエスさまの愛とペトロさんの愛がお互いに響きあっていますね。通じています。心と心が通いあっていますね。そして、それは、イエス様の方から、通い始める愛なのです。イエスさまが愛して下さることに「はい、わたしはイエスさまに愛されています。だから、わたしも愛しています」と答えられるのです。

皆には、心から、そして命をかけて愛してくれる人がいますか。お友達と兄弟同士、お父さんやお母さんと心と心がびたっと通っていますか。そうであつたら本当にうれしいですね。しかし、もしも、自分には、そんな人がいないと思うお友達が、もしいたとしても、イエスさまのことを忘れないでください。復活されたイエスさまは、あなたのことをどれほど愛しておられることでしょう。あなたのために、十字架にかかってくださり、お甦りになられたのです。そしてあなたのところにも今、追いかけてきて「わたしはあなたを愛しているよ。あなたはどうか？」とお尋ねになつておられます。さあ、僕たち私たちは、「はい、愛しています」と返事をしましょう。そうするとイエスさまと心がピピッと通いあうのです。（相馬伸郎）

〔今週の暗唱聖句〕 イザヤ書 55章11節

そのように、わたしの口から出るわたしの言葉も

むなしくは、わたしのもとに戻らない。

それはわたしの望むことを成し遂げ

わたしが与えた使命を必ず果たす。

〈ねらい〉

わたしたちの心の中には自分の力では治すことの出来ない罪（悪い心）があります。その罪はある時は家族や友人を裏切ったり、ねたんでみたり、訳もなく反抗してみたりといろいろな形で現れます。イエス様はそのようなわたしたちの心の中の罪をよくご存じです。そして一人一人に合わせて罪を自覚させ、救いへと導いてくださいます。今回はこのイエス様の愛について学びます。

〈展開例〉

人を裏切ったり、逆に人に裏切られたりしたことはありませんか？ その時にあなたはどんな思いがしたでしょうか。決して楽しい思いではなかったと思います。

イエス様が一番愛しておられたお弟子のペトロさんも、イエス様が十字架につけられるために裁判にかけられているときに「あの人のことは知らない」と言ってイエス様を裏切ってしまいました。その時のペトロさんの気持ちは私たちがおともだちを裏切った時の気持ちより、もっともつらいつらい悲しい思いだったのではないのでしょうか。

イエス様がおよみがえりになったと言うイースターの朝の嬉しいニュースを聞いてもペトロさんは心から喜ぶことが出来ませんでした。それは自分がおかしてしまったあの悲しい罪がペトロさんの心の中に住み着いてしまって、いつもいつもペトロさんを責め立てていたからです。このままではペトロさんは仲間のお弟子さんからだけでなく、イエス様からも逃げ出してしまわなければならないとなってしまいます。ペトロさんは生まれ故郷のガリラヤに帰って元の漁師に戻ろうと決心し、その通りにしました。

イエス様は、ペトロさんのこの心の中の苦しみを良くご存じでした。そしてこの愛する弟子の後を追ってガリラヤ湖まで来てくださったのです。漁をしていたペトロさんは岸辺に立っておられるイエス様を見た時に、イエス様がどれほど自分を愛してくださっているかを理解することができました。そして「イエスさま」と叫んであわてて舟

から湖に飛び込み、イエス様の元に泳ぎつきました。そのときペトロさんの心の中であって、いつもいつもペトロさんを責め立てていました、あの罪の思いはいつのまにか無くなっていました。

一緒に食事をした後でイエス様はペトロさんに「私を愛しますか」と三回もお尋ねになりました。ペトロさんは「あなたが私を愛して下さいるように、私もイエス様を愛しております」と素直な気持ちでお答えすることができました。それはイエス様がペトロさんの心の苦しみを理解して、許してくださっていることが分かったからでした。

イエス様は私たち一人一人を愛してくださっています。それは私たちの心の中の悪い思いも全てご存じのうえで、「それでも私はあなたを愛しているのです、私の元に帰ってきなさい」と言っただけです。私たちも素直な気持ちで「イエス様、私もあなたを愛しております」とお答えしたいと思います。

〈お祈り〉

神様、私たちの心の中には人を憎んだり羨んだり裏切ったりする悪い心があります。それは自分の力では直すことができません。イエス様はそのような私たちをペトロさんを愛されたように愛してください。私たちも素直な気持ちになって「イエス様、私もあなたを愛します」と言えることができるようにしてください。イエスさまのお名前によっておささげします。アーメン。

〈さんびしよう〉

「すんばらしき主イエスのあーいは、①ひーろく、②ふーかい、③オー、すんばらしき主イエスのあーいを、たたえてうたいましょう。③オー③オー。」

※ジェスチャー（手拍子をしながら）

①ひーろく（手を出来るだけいっぱい横に広げる）
②ふーかい（手を出来るだけいっぱい縦にのばす）
③オー（右手を上へ上げて元気よく“オー”と叫ぶ）
『友よ歌おう』（いのちのことは社・太平洋放送協会）より

〈ねらい〉

主イエス・キリストの復活という私たちの信仰の中核ともいえる事柄を、生き生きと伝えたい。そのためにも、信仰と生活が一つとなるように語りたい。

〈展開例〉

イエスさまの弟子のペトロさんは、イエスさまが十字架につけられる前に、大きな間違いをおかしてしまいました。それはどんなことでしたか？

そうですね。イエスさまのことを知らないと三回も言ってしまったことです。

イエスさまが十字架につけられる前、ペトロさんが裏切ることを予告したときに、他の弟子たちが裏切ったとしてもわたしだけはイエスさまについていきます、と胸を張って言いました。そのときにも、ペトロの弱さを知っておられたイエスさまは、「わたしはあなたのために、信仰が無くなるように祈った」（ルカによる福音書22章32節）とおっしゃってくださいました。

ペトロさんはイエスさまが十字架につけられて殺されてしまった後、自分の故郷のガリラヤ湖に戻って漁師としての仕事をしていました。そのときに、甦られたイエスさまが現れてくださり、もう一度、ペトロに出会ってくださいました。

ペトロさんにイエスさまは、「わたしを愛しているか？」と三回も尋ねられました。これはペトロさんが三回、イエスさまのことを知らないと言ったことに対するイエスさまの質問です。でも決して、ペトロを責めているのではなくて、ペトロさんを、もう一度、主の弟子として立ち上がらせるための言葉です。ペトロさんは、三回もイエスさまが尋ねられるので、三回目にはペトロさんはどのように答えましたか？ 17節を見ましょう。「主よ、あなたは何かもご存じです。

わたしがあなたを愛していることを、あなたはよく知っておられます」。

イエスさまを三度否定したペトロの不真実は、同じ三度の愛の告白で償われました。そして、イエスさまはペトロさんに、その愛を、「わたしの羊を飼いなさい」という使命を与えて確かなものにしてくださいました。イエス様がいつも望み願っておられることは、何があってもイエスさまについていくということです。

〈お祈り〉

天のお父さま、私たちがいつもイエスさまについていくことができるように、力を与えてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉

ヨハネによる福音書21章15～19節の個所を拡大コピーして、《イエスさまの言葉》と《ペトロさんの言葉》を、それぞれ色違いのペンで線を引いてみましょう。

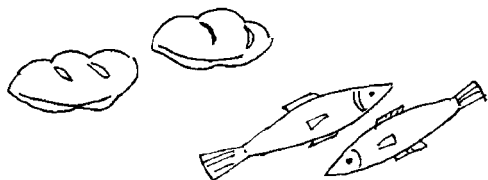
C.S. ルイス著『ナルニア国物語』の中の『魔女とライオン』の物語も面白いです。



この人たちにわたしを愛しているか

〈視聴覚教材〉

パンとさかなのイラスト、ティベリアス（ガリラヤ）湖の写真、



〈場面設定〉

季節は過越しの祭り（4月上旬頃）の直後で春です。広い湖の、きっとさわやかな朝。ティベリアス湖畔とは、どの町であったのでしょうか。ペトロの故郷ベトサイダ（ヨハネ1：44）かもしれません。ベトサイダはかつて五千人の養いの奇跡が起きたところでもあります（ルカ9：10）。主イエスが炭火をおこし、魚を焼いて待っておられます。パンも用意されています。再び主にお会いできた喜びの弟子達（ペトロ、トマス、ナタナエル、ヤコブ、ヨハネ、他の2人の弟子）。ティベリアス湖の写真を見せながら、この場面を想い浮かべましょう。

〈分級メッセージ〉

キリストを否んだ者が再び召されるという「ペトロの再召命」の記事は子供たちに何を語りかけているのでしょうか。それは、[単元のねらい]にあるように、「ペトロをなんとかして立ち直らせよう、慰めようとの主イエスの燃える愛。」ではないでしょうか。イエスさまが、裂いて弟子たちに配られたパンは、まさにその愛を象徴しています。

☆ポイント聖句：ヨハネ21：15 (16, 17) 「わたしの(小)羊を飼いなさい(の世話をしなさい)」

☆骨子：①「わたしの(小)羊」の意味②ペトロが召された仕事の内容③主イエスのゆるし

☆例：『わたしの羊を飼いなさい。』わたしの羊とは、イエスさまを信じて教会に集う人たちです。ペトロは三度もイエスさまのことを知らないと言った人です。イエスさまはそのようなペ

トロに、教会に集う人たちに、イエスさまのことを教え、魂を養うという大切なお仕事を任せられました。イエスさまはペトロを大きな愛でゆるされたのです。このイエスさまの大きな愛はみなさんにも注がれています。先生やみなさんも神さまの前に犯した罪がいっぱいあると思います。それにもかかわらず神様はいつでもやり直す機会をみなさんに与えてくださるのです。

〈展開の工夫〉

“バイブル探偵”（*上記場面設定やポイント聖句を、教師が全部用意する方法とは違い、分級のはじめに、調査事項を示し、皆で分担して、一斉に聖書を調べ、発表して分級を組み立てていくという方法です。）……調査事項（例）：①ティベリアス湖畔の別名は？（ヨハネ6：1）②この時いた弟子の数は（ヨハネ21：2）③ペトロの生まれ故郷は（ヨハネ1：44）④イエスさまが5000人を養われた場所はなんという町か（ルカ9：10）⑤イエスさまはペトロに何と命令したか（ヨハネ21：15～17）⑥イエスさまはご自分を何のパンにたとえられたか（ヨハネ6：35）⑦ベトサイダの位置は？（聖書巻末地図で）……バイブル探偵は、指令書の様式を作ったり、調査の報酬としてお菓子などを用意すると楽しくできます。

〈参考〉



①魚のしるし

^{イグソス}
IXΘΥΣとはギリシャ語で魚という意味。

そして同時にキリスト教がローマによって迫害されていた時代、クリスチャンたちは「さかな」の絵を使って密かにクリスチャンであることを確認しあったそうです。なぜなら、「イエス・キリスト・神の・子・救い主」というギリシャ語の頭文字を取ると「IXΘΥΣ」となり、「さかな」の意味になるからということです。

②ナタナエルがバルトロマイと同一人物と推測される理由（⇒新聖書注解新約1、P451）

〈ねらい〉

復活の主の赦しの愛を知る。

〈展開例〉

1. 聖書をもう一度読む

2. 分かち合い

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

※教師、生徒という以前に、まず教師自身が神の御前に一人の御言葉の聴衆として、教えられたこと、感動したこと、心を導かれていることを、率直に生徒達に話すことが大切だと思います。自分の心に響いたメッセージが一番生徒の心に届くからです。分級では何かを新たに教えるよう無理に導くのではなく、生徒達と御言葉を巡って語り合ったり、共に祈る時間を重視してくださいと思います。

3. 質問例

※質問例は、それぞれのクラスの実情に合わせてアレンジしてください、解答例は子供達の答えを補足したり、教えたりするのにお使いくださいと思います。

Q. 今日の箇所に入る前に、まず大事なことを確認しましょう。ヨハネによる福音書20章6、7節を開いて下さい。弟子達は、イエス様の墓が空になっているのを確認しました。この空の墓の事実は、私達に何を教えているのでしょうか？
→イエス様の復活の事実。イエス様が罪と死の力に打ち勝ってよみがえられたこと。

Q. 少し話が前に戻りますが、イエス様が逮捕された時、弟子達はどうしましたか？ 最後までイエス様のお供をしたのでしょうか？
→イエス様を見捨てて逃げてしまった。

Q. 今日の箇所で、イエス様は自ら進んでペトロ

達に会いに来られました。何のためでしょうか？ 弟子達をしかるためでしょうか？
→御自分を裏切った弟子達を立ち直らせるため。

Q. イエス様は、特にペトロに話しかけ、「わたしを愛しているか。」と三度も尋ねました。どうしてですか？

→ペトロがイエス様を三度否認したことを打ち消させるため。「あなたがお存じです」と謙遜に答えるペトロには、以前の傲慢さはなくなっている。

Q. 私達であれば自分を裏切った人を赦せるでしょうか？ 少なくとも、以前のような信頼を置くことは出来ないと思います。しかしイエス様はペトロに対し、「わたしの小羊を飼いなさい」とおっしゃいました。これはどういう意味でしょうか？

→ペトロを再び使徒とすることを意味する。イエス様の赦しの愛を鮮やかに示している。イエス様は御自分を裏切ったペトロに対し、変わらない信頼と期待を寄せられる。

Q. イエス様の赦しの愛に慰められながら、「わたしに従いなさい」というイエス様の召しに再び応えて、ペトロは立ち上がってゆきました。私達もペトロのように失敗することがあります。失敗したらそれで終わりなののでしょうか？ ペトロの立ち直りは、このことに関してどう教えているのでしょうか？

→イエス様は私達を赦し、変わる事のない信頼と期待をかけてくださる。失敗することがあっても、イエス様の愛に慰められ、そこから再びイエス様にお従いしてゆくのである。

4. お祈り

イエス様の赦しの愛に感謝して。

※一人一人に祈りの課題を出してもらったり、自然に浮かび上がった課題を祈っても良いと思います。

テキスト 使徒言行録 1章6～11節

〈弟子たちの無理解〉

主イエスが逮捕されるまで弟子たちは、主イエスが語られる神の国こそが地上に建てられるイスラエルの再建であると考え、主イエスをイスラエルの政治的指導者と考えていた。そのため、主イエスが逮捕され、十字架に架けられた時、失望し、主イエスから離れ、逃げ去っていた。そしてペトロは三度も主イエスの弟子であることを否定していた。

主イエスは、十字架の死から三日目に甦られ、弟子たちの前にお現れになられた。そしてそれから四十日間にわたって、神の国について話された(1:3)。ペトロも主イエスに従うことをはっきりと告白した(ヨハネ21:15-19)。こうして主イエスの復活を受け入れた弟子たちは、主イエスの語られた神の国について全て理解しただろうか？否、彼らはまだ神の国について理解しておらず、弟子たちが求めていた神の国像、そして主イエスに対するメシア像は、以前と変わっていない。このことが6節の弟子たちの言葉で露呈する。彼らはなおも主イエスをイスラエルの王として、イスラエルを再建させることにより、神の国が完成することを信じていたのである。

〈宣教による神の国の伸展〉

しかし主イエスはイスラエルという一地域に神の国が到来することを否定される。主イエスが求められる神の国は、空間的な広がりを見せるのであり、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土に、また地の果てに至ることを示される(8)。つまり霊的なイスラエル、新約の教会の広がりによって、神の国が完成へと向かう。

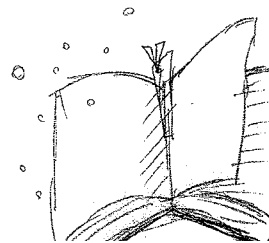
そして、神の国の伸展のために、弟子たちが証人としてつかわされるのである。言い換えれば、宣教の広がりがなければ、神の国の伸展はあり得ない。

〈天に昇られる主イエス〉

一方、主イエスは天に昇られる(9)。弟子たちにとっては、指導者としての主イエスを再び失うこととなる。弟子たちが今までのままの理解しか持っていないければ、弟子たちは再び散らされ、新約の教会が形成し、神の国が伸展していくことはあり得ない。

〈聖霊降臨と再臨の約束〉

しかし、天に昇られる主イエスは弟子たちに、聖霊が下ることによって力を受けることを約束して下さる(8)。つまり、弟子たちは、主イエスが天に昇られた後、聖霊が下る時、神の国について理解することとなる。事実、弟子たちは、ペンテコステの日に聖霊が下った後、主イエスが地上におられないにも関わらず、迫害を恐れることなく、力強く福音宣教につかわされていく。それは天に昇られた主イエスが、弟子たちの前からいなくなるのではなく、天におられ、聖霊を通して共にいて下さるからであり、また今と同じ有様で戻ってこられることを約束して下さっているからである(11)。つまり、弟子たちは、主イエスが地上におけるイスラエルの統治者ではなく、天に属する者であり、天から再び地上に降りて来られる時、神の国が完成することを知るのである。(辻 幸宏)



テキスト 使徒言行録 1章6～11節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問65, 30, 25, 10

〔単元のねらい〕

主イエス・キリストの昇天と聖霊降臨の出来事は、神のみわざの歴史における大きな転換点である。復活のキリストは天に上げられ、神の右に着座された。そして、聖霊が遣わされ、聖霊のお働きによって、キリストはご自身の体なる教会を地上に建て上げてくださった。その教会の働きが用いられて福音が宣べ伝えられるのである。主イエス・キリストは、肉の目からは取り去られたが、こうして、聖霊において教会が地上におけるキリストの体とされている。聖霊の満ち満ちる教会において、キリストは、「世の終わりまで、いつもあなたがたと共に」（マタイ27：20）いてくださる。主イエス・キリストの再臨に至るまで、このような、聖霊の時代、教会の時代である。子どもたちに、聖霊が与えられて、教会が建て上げられている喜びを分かち合うことができるようにと祈り願う。教会の礼拝と交わりにおいて、わたしたちは、復活の主イエス・キリストと出会う幸いを与えられている。

「主イエスさまが天に上げられた！」

先週は、主イエス・キリストがよみがえられたこと、ペトロさんに現れてくださったことを学びました。主イエスさまの復活のお話は、毎年の一週間に聞くので、「もう何度も聞いたよ」という人がいるかもしれません。けれども、そのよみがえられた主イエスさまがどうなったのか。それは、あまり聞かないかもしれません。主イエスさまは、よみがえって、ですから、生きておられるのです。今もちろん、生きておられます。それでは、どこでお会いできるのでしょうか。目で見て、十字架につけられた傷あとに触れることができるのでしょうか。

主イエスさまは、復活されて、ペトロさんやヨハネさん、そのほかの弟子たちにも現れて、ご自身がよみがえって生きておられることを教えてくださいました。弟子たちと一緒にパンやお魚を食べてくださって、証ししてくださったのです。また、神さまの大きな力が今もこの世界に働いていること、このイエスさまにおいて、神の国が実現していることをお話くださいました。そのようにして、四十日の間、主イエスさまは弟子たちと一緒に過ごされたのです。

その四十日が過ぎて、主イエスさまは、弟子たちと一緒にオリーブ山に行かれました。オリーブ山というのは、エルサレムの東にある小さな山で、主イエスさまと弟子たちが時どきお祈りするために登っていたところです。そのところで、とても不思議なことが起こりました。主イエスさまは、弟子たちが見ている目の前で、天に上がって行かれたのです。主イエスさまは、そのとき、弟子たちを祝福しておられました。立って、両手を上に上げて、弟子たちを祝福してください、そのままのお姿で天へと、上へ上へと上げられて、そうして、雲に覆われて、主イエスさまのお体は見えなくなりました。これは、とても不思議なことです。弟子たちにとっても驚くべき出来事であり、不思議であったのでしょうか。主イエスさまが上げられていった天を見つめたまま、しばらくは動くことさえできなかったようです。

これはいったいどうしたことでしょうか。主イエスさまは、せっかくよみがえられたのに、どうして、そのまま弟子たちと一緒にいてくださらなかったのでしょうか。どうして、今のぼくたちわたしたちにも、ご自身のお体を見せてくださらな

いのでしょうか。

主イエスさまは、天に上げられる前に、弟子たちにこうおっしゃっていました。「エルサレムを離れず、前にわたしから聞いた、父の約束されたものを待ちなさい。あなたがたは間もなく聖霊による洗礼を授けられるからである」。こうおっしゃって、聖霊を授けてくださることを約束してくださいました。「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる」とおっしゃって、聖霊を待ちなさいと命じておられました。聖霊を注がれて、弟子たちが福音を宣べ伝える器として用いられるようになることを教えておられました。

そのとおり、これは、来週、きちんと学ぶことなのですけれども、今日、少しフライングでお話してしまいます。主イエスさまが約束して下さったように、弟子たちが集まって、ひとつになってお祈りしていたときに、聖霊が降りました。この聖霊は、まことの神さまです。御父・御子・御霊という、三位一体の神さまの御一人です。この聖霊が働いてくださって、教会が建て上げられたのです。それは、神さまの息吹、神さまの力である聖霊がひとつになっていた弟子たちに注がれて、弟子たちは、ただ自分たちで集まっているのではない、主イエスさまが召し集めて下さった教会とされたのです。そして、教会が主イエスさまの手足のように用いられて、主イエスさまのみわざ、福音を宣べ伝えるみわざが進められます。

ですから、主イエスさまは、わたしたちに聖霊をお与えくださるために、ご自身は天に上げられたのです。主イエスさまのお体は、天に上げられて、わたしたちの目からは見えなくなりました。けれども、主イエスさまは、聖霊なる神さまをお与えくださって、地上には、教会が建て上げられ

ました。キリストの体なる教会です。ですから、いま、わたしたちは、自分の肉の目でイエスさまを見ることはできません。けれども、教会で、イエスさまを見ることができます。聖書の御言葉と説教を通して、ですから、教会の礼拝と交わりを通して、イエスさまに出会うことができるのです。この教会の恵みを与えてくださるために、イエスさまは、天に上げられてくださいました。

これはとっても素晴らしいことです。「イエスさまが今も地上におられたら」と思いますが、もし地上におられても、エルサレムに行かなければ、お会いできません。とても遠くて、なかなか行けませんね。そして、世界中の人たちがみな、主イエスさまにお会いしようと出かけたなら、主イエスさまの周りはずっと混雑して、とてもお会いできないかもしれません。順番待ちで、とても待ちきれないかもしれません。けれども、わたしたちは、教会の礼拝で主イエスさまにお会いできるのです。わたしたちは、主イエスさまの傷あとに触れることはできませんが、聖書の御言葉と聖霊によって、十字架の恵みを味わうことができます。何と幸いなことでしょうか。

主イエスさまが天に上げられて、動けなくて立っていた弟子たちに、白い服を着た二人の人、たぶん、神さまの御使いです、神さまの御使いがあらわれて、言いました。「天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる」。ですから、主イエスさまは、再び来てくださいます。聖書は、そのことを約束しています。その時まで、わたしたちは、教会で礼拝をささげて、主イエスさまをお待ちします。一人でも多くの人が神さまの救いの恵みを信じるように、福音を宣べ伝えて、お待ちします。主イエスさまがお与え下さった聖霊が、わたしたちの地上の信仰生活をいつも支え、助けくださるのです。 (望月 信)

[今週の暗唱聖句] 使徒言行録 1章8節前半

あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。

〈ねらい〉

主イエスの昇天はキリスト教が世界中に広がるための大きな布石でした（宣教命令）。また私たちが飼い主のいない羊のように放置するのではなく聖霊様を遣わして下さり、助けて下さることを約束してくださいました。その約束通りにペンテコステの出来事が起きました。私たちは小さな子供ですが聖霊様のお助けを受けてイエス様をお父さんやお母さん、兄弟、お友達にお伝えすることができます。そしてそれは私たちの大好きなイエス様のお仕事の、大切なお手伝いであることを学びます。

〈展開例〉

みなさんはキリスト教の教会が世界中にあることを知っていますか、私たちの〇〇教会教会学校も日本の中にたくさんある教会のひとつです。そして日本だけでなく世界中の子供達が教会学校でイエス様を賛美しお祈りし聖書のお話を聞いています。なんだか不思議な気がしませんか？

イエス様がよみがえられて40日が過ぎました。その間イエス様はたくさんの人の前に現れ、復活されたことをお示しになられました。復活のイエス様を見た人は何百人にもなりました。けれども、イエス様は私たちとこの世でずっと一緒に住んでくださる訳ではありません。いよいよイエス様が天のお父様の所へ帰られる日が来ました。イエス様はお弟子さんたちと一緒にオリブ山という所へ行かれました。そして最後にお弟子さんたちに言われました「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」聖霊なる神様が私たち一人一人の上に降り、お弟子さん達はその聖霊様のお助けで世界中にイエス様のことを伝えるようになるというお約束です。言い終わるとイエス様はお弟子さん達が見守る中、雲に覆われるようにして天に帰っていかれました。

た。お弟子さん達はイエス様がずっと一緒にいてくださると思っていましたので、イエス様のお姿が見えなくなると大変悲しい、寂しい思いになってしまいました。でもイエス様がくださったお約束を思い出して、勇気を出してエルサレムへ帰って行きました。

イエス様は、お約束通りにペンテコステの不思議な出来事を通して聖霊様をお弟子さん達に降してくださいました。聖霊様の力を受けたお弟子さん達は自分の町だけでなく、世界中にイエス様の事を伝え始めました。神様が味方ですからもう誰も恐いものはありません。このようにしてキリスト教は世界中に広まっていったのです。

聖霊様の力を、私たち一人一人にも同じようにくださるとイエス様は約束しておられます。私たちも、まだ神様のことを知らないお友達に勇気をだしてイエス様のことをお話しできたらイエス様もきっと喜んでくださいます。

〈お祈り〉

神様、イエス様は天にお帰りになりましたが、いつも私たちを守っていて下さいます。そして聖霊様を私たちの助けとして下さいます。私たちも勇気をいただいたお弟子さん達のように、まだイエス様のことを知らない方々にイエス様のお話を伝えることができるようにしてください。イエスさまのお名前によっておささげします。アーメン。

〈みんなにイエス様の事をお伝えしよう(伝言ゲーム)〉

1列に並んで最初の人から順に耳打ちで伝えていく。

最初の人と、最後の人に同時に伝えられた言葉を言ってもらおう。

伝言例「イエス様は救い主」、「イエス様はみんなを愛しています」etc……（イエス様の言葉を間違えないようにお友達に伝えられたかな？）。

〈ねらい〉

復活されたイエスさまが、復活されたことを多くの人々に明らかにされた後、天に昇っていかれた意味を考えてみよう。

〈展開例〉

私たちを罪から救うために十字架に付けられて殺されてしまったイエスさまは、三日目に墓から甦られて、復活されたことを多くの人たちに知らせてくださいました。

イエスさまは、決して復活してそれで終わりというわけではありませんでした。復活されて新しい命をもたれたイエスさまは、次に、私たちの天の国の住まいを用意するために天に昇っていかれました。私たちも死んで終わりということではなくて、死んだ後も、神さまを礼拝し従うための場所が用意されています。でも、イエスさまが天に上っていかれると、残された弟子たちはどうすればいいのでしょうか？

使徒言行録1章8節を読んでみましょう。「あな

たがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりではなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる」。すごいですね！イエスさまが天に上げられていなくなってしまったと思ったときに、ちゃんと神さまは聖霊を与えてくださいました。

イエスさまは天に上げられて、私たちの救いがちゃんと成されるようにしてくださっています。私たちも、今はイエスさまをこの目で見ることはできませんが、弟子たちに力を与えた聖霊に守られています。

〈お祈り〉

天のお父さま、私たちの救いのためにイエスさまが天に昇られました。そして、今は、天において生きて働いて私たちを守ってくださることを感謝いたします。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



なぜ天を見上げて立っているのか。

〈視聴覚教材〉

オリーブの絵や写真。

〈場面設定〉

イエスさまは、使徒たち（イスカリオテを除く11人）を伴い、エルサレム郊外のオリーブ山の上で、弟子たちに最後の教えを話しています。うらかな春の日差しの中、この後起こることを誰が予想したでしょうか。しかしイエスさまは、「実を言うと、わたしが去って行くのは、あなたがたのためになる。わたしが去って行かなければ、弁護者はあなたがたのところに来ないからである。」（ヨハネ16：7）とかつて弟子たちに言われたことを実行しようとしています。

〈分級メッセージ〉

☆ポイント聖句：使徒1：11 ⇒この天使の言葉は、終末の時へ希望を託すよう弟子たちを促しました。オリーブ山の上での“さようなら”は、弟子達の“再スタート”でもありました。

☆骨子：①昇天の有様②弟子達の悲しみと不安③天使の言葉に終末への望みを思い起す弟子たち。

☆例：復活された主イエスさまは、あることを実行するために、弟子たちを連れてオリーブ山に登られました。その「あること」とは、弟子たちとさようならをすることでした。もしみなさんの大好きなお友達が遠い町に転校してしまうとしたら、きっと悲しいと思います。しかもそのことが突然わかったら、びっくりとかなしい思いを一度に受け、つらいですね。イエスさまとのお別れも突然のことでした。イエスさまは、オリーブ山の上でお話を終えると、突然天に上り、雲に包まれて見えなくなりました。「ああ、天にお帰りになるのだ……。」悲しさや寂しさに包まれながら天を見つめていた弟子たちに天使は言いました。「どうしていつまでも天を見つめているのですか。イエスさまは、また同じお姿で地上に来られるのです。」天使の言葉に弟子達はわれに返りました。そしてイエ

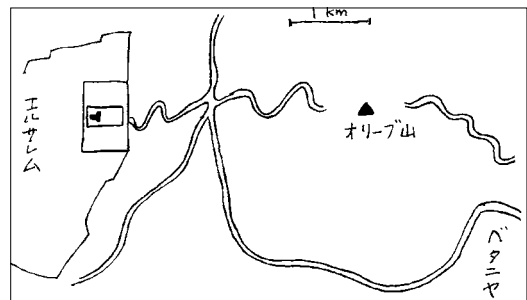
スさまの約束を思い出しました。イエスさまが再び地上に来られることと、その時に、死も悲しみもない神の国が実現するということ。そしてその時がとても楽しみになり、みんな心が明るくなりました。ペトロは言いました。「さあ、都にもどろう。主のご命令に従って聖霊様が来てくださる時を待ってしよう！」弟子達は主を讚美し、歌いながらオリーブ山を降りてエルサレムへ向かいました。

〈展開の工夫〉

オリーブはイスラエルの七産物（申命記8：8）の一つで、漬物にするほか、灯し油、食用油、医療品としても使われます。また常緑樹であるため、大変寿命が長く、オリーブ山には、樹齢1000年を越す老木があるそうです。ダビデは、「わたしは生い茂るオリーブの木。神の家にとどまります。世々限りなく、神の慈しみに依り頼みます。」（詩編52：10）と歌っています。（『聖書の世界』ミルトス編集部P182より）豊かな恵みを連想させるオリーブの話を通して、主イエスにより頼むことの幸いを覚えましょう。（なおゼカリヤ14：4参照）

〈参考〉

インターネットでGoogle地図検索を使い、まずイエスラエルの航空写真を表示させ、Mount of Olivesで検索すると、おおよその場所が示されます。エルサレムの神殿（現在は岩のドーム）から約1.2km、ベタニヤ（Bethany）は約2kmの位置にあります。



〈ねらい〉

イエス様の昇天の意味を知る。

〈展開例〉**1. 聖書をもう一度読む****2. 分かち合い**

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

Q. イエス様が十字架にかかる前、弟子達はイエス様の救い主としての働きを理解できませんでした。当時の人々同様、誤解していたところがあります。では、当時の人々は、どのような救い主を期待していたのでしょうか？

→異邦人であるローマ皇帝の支配から、神の選民であるユダヤ人を自由に、イスラエルのために王国を打ち建てる政治的解放者。

Q. 弟子達は復活の主にお会いしました。それによって、弟子達の救い主とその働きに対する理解は何か変わったのでしょうか？ 6節を読んで、答えて下さい。

→依然として、当時のユダヤ人の救い主像から完全に脱却してはいなかった。救い主がもたらす神の国に対する誤解も同様であった。

Q. 弟子達の無理解な質問に対して、イエス様ははっきりとした解答を与えませんでした。その代わりに何とおっしゃいましたか？ 8節を見て、答えて下さい。

→聖霊降臨の約束をされた。

Q. 弟子達の上に聖霊が降る時、何が起るとイ

エス様はおっしゃいましたか？

→力を受けるとおっしゃった。聖霊なる神様の御力によって、イエス様を見捨てて逃げ出し、復活後もなお無理解の中にある弟子達を、キリストとその働きへの正しい理解へと導き、それを証しする者と変えるのである。

Q. この約束をなされた後、イエス様は天に上げられました。何故だと思えますか？

→父なる神様から聖霊を受けて、弟子達に注ぐため。そして聖霊において、全ての弟子と共にいるため。イエス様が昇天しなければ、限られた人数の弟子達としか共にいることはできない。しかし天に上げられたイエス様は、聖霊において、御自分の弟子達全てと共にいらっしゃる。

Q. 天を見つめていた弟子達に、「白い服を着た二人の人」は何を語りましたか？

→イエス様が再び来られること。

Q. イエス様の再臨までの間、教会は何をするのですか？ 私達も何をするのでしょうか？ イエス様は、誰の力でそれをせよとおっしゃいましたか？

→「地の果てに至るまで」福音を伝える使命を果たす。私達も家族や友達に福音を伝える使命を帯びている。「自分にはできない」あるいは、「私はキリストの証人にはふさわしくない」と考えることがあるかもしれない。イエス様は聖霊の御力によってとおっしゃった。「わたしの証人になれ」ではなく、「わたしの証人になる」とおっしゃった。聖霊において、私達を通してイエス様が働いて下さるのである。

4. お祈り

イエス様の昇天を感謝して。

テキスト 使徒言行録 2章1～13節

「聖霊の降臨」というペンテコステの出来事は、祭りの日に起きた。それは主イエスの十字架による贖罪死が、過越の祭りの時に起きたのと同じである。「五旬祭」(2:1)については、聖書巻末の「用語解説」にこう説明されている、「ユダヤ教の三大祭りの一つ。麦の収穫を祝う祭りであったが、同時にモーセがシナイ山において神から律法を受けられた記念の祝祭でもあった。過越祭の安息日の翌日から数えて五十日目にあたるので(レビ23:5-8、11、15、16、21参照)、この名で呼ばれた。ギリシャ語で「ペンテコステ」(五十の意)。旧約では「週の祭り」あるいは「七週祭」と呼ばれる。神はモーセを通して「律法」を与えられたが、そこで定められていた「五旬祭」に込められた神の深い意図が今や明らかにされる。今こそ、失われた人々が収穫される時である。

主イエスは、「使徒たちに聖霊を通して指図を与え」(1:1-2)、「あなたがたは間もなく聖霊による洗礼を受けられる」(1:5)、「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける」(1:8)とお語りになったが、五旬祭の日、それが現実となった。神の御計画は、主イエスの指図と弟子たちの祈りを通して実現された。この日注がれた聖霊は、十字架で死に、三日目に復活し、天に昇られて、父なる神の右の座に着かれた王なるキリストから注がれた「キリストの霊」である。即ち、イエス・キリストとは誰であり、私たちのために何をしてくださったかを悟らせ、信じさせるお方である。このお方の働きによって「イエスは主である」と信じ告白した弟子たちは、今改めて聖霊を注いでいただくことによって、自分たちが預かった救いを力強く証しする者として、聖別されたのである。

神の救いの御計画の中で、今初めて聖霊が注がれたわけではない。旧約の古い時代から既に聖霊は注がれていたのである、それは選ばれた人々に

限られてはいたが。だからこそ、モーセはこう語った、「わたしは、主が霊を授けて、主の民すべてが預言者になればよいと切望しているのだ」(民11:29)。このモーセの願いは、ペンテコステの日に十分な意味で叶えられた。限られた者たちだけではなく、主の民すべてが、主の喜ばしい福音である神の御言葉を宣べ伝える預言者として、油注がれ聖別されたのである。それを象徴するように、2:3で「とどまった」と訳されているギリシャ語「カスイゾー」には、「位につかせる」とか「任命する」といった意味がある。言わば、聖霊なる御神は、自分が預かった救いを世界の人々に広く伝えるために、弟子たち一人一人を預言者として任命され、彼らがその使命を全うできるように、彼ら一人一人の王座に着かれたわけである。

聖霊なる神御自身が主導権を握って、一人一人を福音宣教のために用いられる。御霊は、「炎のような舌」として「分かれ分かれに現れ」たが、これはかつてバプテスマのヨハネが、主イエスについて「その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる」(ルカ3:16)と言ったことの成就である。天に挙げられ、王座に着かれた主イエスは、まさに弟子たちに聖霊と火で洗礼をお授けになった。火や炎は、終末を象徴する言葉である。最後の審判を前にして、人々に最終的な悔い改めと救いへの招きを語るために、弟子たちは聖別された。また、「舌」として現れ、とどまった聖霊なる御神は、ヤコブが「舌は火です。舌は『不義の世界』です」(ヤコブ3:6)と語っている通り、罪の手先になりやすい私たちの舌を清めて、ただひたすら「喜ばしいキリストの福音」を語り告げるにふさわしいものとして整えてくださったのである。それが「分かれ分かれに現れ」たということは、世界のあらゆる言語を話す人々に向かって、福音が高らかに宣言され、広められるということのしるしなのである。(梶浦和城)

テキスト 使徒言行録 2章1～13節

参照カテキズム 子どもカテキズム 問3, 65, 68, 10

〔単元のねらい〕

聖霊が与えられて、キリストの体なる教会が建て上げられた、ペンテコステの御言葉である。弟子たちは、霊の賜物を与えられて、世界の果てに至るまで福音を宣べ伝えるキリストの体とされた。弟子たちが外国の言葉で話し出したことは、世界宣教の務めを与えられたことのしるしにほかならない。こうして、教会は、キリストによって建てられ、聖霊によって力を与えられて、福音宣教の使命に生きるのである。この教会の働きが今日の日本にも及んで、わたしたちは神の救いの恵みにあずかる幸いを与えられている。大きな感謝と喜びを子どもたちと分かち合いたい。そして、この恵みを与えられて、わたしたちもキリストの体のひとえだとされている。聖霊によってひとつとされ、神と教会に仕えて、わたしたちも、福音の器として生きていく。聖霊の豊かな働きを祈り求めたい。

「聖霊に満たされた教会」

天に上げられた主イエスさまを見送って、弟子たちは、エルサレムに戻って来ました。主イエスさまは、弟子たちに約束してくださっていました。「エルサレムから離れず、前にわたしから聞いた、父の約束されたものを待ちなさい。あなたがたは間もなく聖霊による洗礼を授けられるからである」。「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける」。この主イエスさまの御言葉に従って、弟子たちは、エルサレムから離れることなく、みな集まっていました。婦人たちも一緒であったでしょう。ひとつになって、お祈りしながら、聖霊が与えられるのを待ったのです。

一日、二日、三日、……そして、十日目のことです。皆がひとつに集まってお祈りしていたときに、突然、激しい風が吹いてくるような音が聞こえ、家中に響き渡りました。炎のような舌が分かれ分かれにあらわれ、一人ひとりの上にとどまりました。弟子たちは、このしるしはいったい何であろうかと思ったでしょう。ただ何かの自然現象であるとは思えず、すぐに主イエスさまの言葉を思い出したでしょう。これは、「天から」のみわざ、神さまのみわざであると感じたのです。これが、主イエスさまが約束しておられた聖霊のみわざに違いない。弟子たちは、すぐにそう確信させられ

たに違いありません。

聖霊に満たされた弟子たちは、ほかの国々の言葉で話し出しました。このときの弟子たちは、みなユダヤ人です。アラム語（ヘブライ語）かギリシア語を話すというのが、ふつうだったはずですが。けれども、このとき、ユダヤの言葉ではない、外国の言葉を話すことができる。そんな奇跡を与えられたのです。この物音を聞いてやって来た人たちの中には、外国で暮らしたことがあって、外国から帰って来ていた人たちもいました。その人たちは、自分たちがむかし住んでいたところの言葉を聞くことになって、とても驚きました。弟子たちは、世界のいろいろな国々の言葉で、主イエスさまのことをお話ししていたのです。

今お話ししたことは、実は、主イエスさまが建ててくださった新約の教会の、最初の出来事です。天に上げられた主イエスさまが、聖霊を与えると約束してくださっていました。その約束のとおり、聖霊が与えられて、主イエスさまのことを宣べ伝える教会が生み出されたのです。

聖霊とは、三位一体の神さまの一人です。御父・御子・御霊の神さまの一人なのです。この聖霊なる神さまが、一人ひとり違う人間である弟

子たちを、ひとつの信仰に生きる教会として建て上げていただきました。キリストに召し集められて、キリストの手足のように用いられる、福音を宣べ伝える器としていただきました。そして、この聖霊が、教会に働いて、何をどのように語るべきなのか教えてください。宣べ伝えるための力と勇気を与えてくださいます。聖霊のお働きによって、教会は、世界の果てに至るまで福音を宣べ伝えるのです。

教会は、ですから、このあと、ユダヤ人ばかりではなく、世界の隅々まで主イエスさまのことを宣べ伝えるようになります。パルティア、メディア、エラム、メソポタミア……と、たくさんの外国の名前が挙げられています。これは世界中の名前が挙げられているのです。教会は、まことの神さまを礼拝して、主イエスさまの福音を世界に宣べ伝えるようにと、神さまが地上に建ててくださったキリストの体なのです。

このときの教会は、皆が集まっても百二十人くらいの人たちでした。世界の全体から見たら、何と少ない、小さな人数でしょうか。けれども、福音を宣べ伝えるのは、教会であって、教会ではありません。実は、聖霊が働いて、主イエス・キリストご自身が福音を宣べ伝えてくださっています。教会は、そのキリストの体として用いられているのです。ですから、教会は、自分たちの小ささに恐れることなく、主イエスさまのことを宣べ伝えました。世界の隅々まで宣べ伝えて、そうして、エルサレムからうんと離れている、この日本、わたしたちのところにまで、主イエスさまのことが宣べ伝えられました。

わたしたちが、いま主イエスさまを知って、まことの神さまを礼拝することができている。このことは、教会が福音を宣べ伝えてきたからこそで

す。主イエスさまが聖霊を与えて、教会を建ててくださったからこそです。神さまのお働きが、いま、わたしたちのところにも届いているのです。とても素晴らしいことですね。ですから、不思議なことですけれども、わたしたちが神さまを礼拝していること、そのこと自体が、神さまが生きて働いておられることの証明なのです。最初の教会のように、わたしたちも神さまを礼拝し、神さまを心からほめたたえたいと思います。

この聖霊が与えられた出来事は、五旬祭の日に起こりました。ペンテコステです。これは決して偶然ではありません。ペンテコステは、もともと旧約のイスラエルのお祭りで、旧約のモーセ律法が与えられた記念日であり、また春の収穫感謝のお祭りでした。

聖霊が与えられて、わたしたちの心に神の御言葉を刻み込まれます。神の御言葉に聞き従う者とされるのです。ペンテコステとは、わたしたちがまず神の御声に聞く者であることを思い起こす日でもあるのです。そして、聖霊に満たされて福音を宣べ伝えるのですが、それは、神さまの救いのみわざの刈り入れの営みにほかなりません。そうであれば、神さまのみわざは確かなのであって、刈り入れも豊かであると信じるのが許されています。最初の弟子たちがその初穂だったのであり、ほかでもないわたしたちも、聖霊によって刈り取られた、世界宣教の実りなのです。

このような、豊かな刈り入れが約束されている福音宣教のわざへと、聖霊がわたしたちを押し出してください。神さまの励ましに応えて、臆することなくお友だちに主イエスさまのお話をし、教会に誘ってくるものでありたいと思います。主イエスさまが、いつも共において、わたしたちを励ましてくださっています。 (望月 信)

[今週の暗唱聖句] 使徒言行録 2章4節

すると、一同は聖霊に満たされ、
“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話し出した。

〈ねらい〉

集まってお祈りしていた弟子達に、約束の聖霊が与えられ、世界中に福音を伝える者に変えられました。福音の恵みを今、日本で受け取った私達も、キリストの体の一部分です。聖霊によって一つとされ、神様と教会に喜んで仕え、福音を宣べ伝えましょう。

〈展開例〉

「誕生日がきたら、素敵なプレゼントをあげるからね。いい子に、楽しみに待っててね。」お家の人から、そう言われたら、どうしますか？ どんな気持ちになるでしょうか？

イエス様は天に帰られる前に、弟子達に約束なさいました。「エルサレムから離れず、前にわたしから聞いた、父の約束されたものを待ちなさい。あなたがたは間もなく聖霊による洗礼を授けられるからである。」

弟子達や女の人達は皆、イエス様のお言葉通り、エルサレムに集まっていました。皆一つになって、お祈りしながら、約束の聖霊を待っていたのです。まだかなあ、もう少しかなあ……。

十日目のことです。突然、強い風が吹く音がして、家中に響き渡りました。それから炎のような舌が分かれて、一人ひとりの上にとどまりました。いったい、何が起こったのでしょうか。地震？ それとも、火事でしょうか？ いいえ、今まで見たことも聞いたこともない出来事でした。弟子達は、イエス様の約束を思い出しました。「あ、これがイエス様のおっしゃった聖霊の御業なんだな。」

聖霊に満たされた弟子達は、ほかの国のいろいろな言葉で話し始めました。今まで習ったことのない言葉なのに、不思議ですね。集まってきた人

達も皆、ビックリしました。この時から、イエス様を信じる人達は、元気よくイエス様のお話をするようになりました。目に見えないイエス様の手となり足となって、自分の国だけでなく、隣の国にも、そのまた隣りにも、そして世界の果ての遠くの国までも行って、イエス様のお話をしたのです。どんな時も、どこへ行っても、神様が勇気を下さり、どんな風に話したらよいか、知恵も下さいました。イエス様を信じる人達は、最初はほんの少ししかいませんでしたが、神様がいつも一緒だったので、大丈夫でした。

こうして私達のこの日本にも、イエス様のお話が届いたのです。ずっと昔、弟子達に与えられた聖霊は、今、私達の内にも、私達の教会にも働いていて下さいます。皆が今日、教会に来て、ここでこのお話を聞いているのは、神様が生きておられる証拠です。嬉しいですね。

これからも神様を礼拝し、皆でお祈りしながら、弟子達のように、お友達にイエス様のお話をしてあげたいですね。イエス様はいつも喜んで私達を助けてくださいます。

〈お祈り〉

神様、聖霊を私達にも下さってありがとうございます。これからも神様を礼拝し、お友達にもイエス様のお話ができるように助けてください。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉

世界地図を広げ、エルサレム、日本、キリスト教が伝わっている国々などを示し、聖霊による福音宣教の御業を目で見えて確かめる。

〈ねらい〉

イエスさまの群れに、不思議な力が与えられました。イエスさまがかねてから遣わされると約束してくださった聖霊が、弟子たちに与えられたのです。その聖霊のどんなものでしょうか。子供たちにイメージしやすいように伝えたい。

〈展開例〉

聖霊は、《風》のようなものであると言われていきます(2章2節)。風をテーマにした「千の風になって」のようなヒットした歌がありましたが、皆さんは、風というと、どのようなことを思いますか？台風のような激しい風もありますね。また、木々の間を吹き抜ける心地よい風もあります。でも、残念なことは、エアコンなどの設備が住まいに整えられていると、風を肌で感じたり、風そのものを強く意識することは、少なくなっているかもしれませんね。

2000年前、イエスさまの弟子たちが集まって礼拝しているところに、不思議な力が与えられました。使徒言行録が書き記していますペンテコステ(聖霊降臨)の出来事です。イエスさまがかねてより遣わされると約束しておられた聖霊が、弟子たち一人ひとりに与えられたのです。それは、まさに風のようなものでした。

この風が、弟子たちを励まし、勇気づけ、喜びと希望をもってキリストの福音を証しする伝道者としてこの世界へと押し出していく、新しい力となりました。

風は、つかみどころがなく、把握しにくいものですが、それは同時に、いつでも空気の流れをつくり出してくれます。窓を開けて風通しをよくしておけば、いつでも新鮮な空気を取り入れることができます。

同じように、福音を広めていく働きをしています教会において、《風》はなくてはならないものです。その風が吹き込まれなければ、教会は、イ

エスさまの復活によって新しい命の希望を告げ広めていくことはできません。

いつもよどんでしまう人の心を生き生きとした希望で満たして、リフレッシュさせて、神さまの御心へと新しく導くのは、神さまが与えてくださる聖霊の力です。

イエスさまの弟子たちに与えられました不思議な風が、今、私たちにも与えられ、進むべき道へと私たちを押し出してくださるように、共に祈りましょう。

〈お祈り〉

「息吹」

一つの家族なった幸せを
共に祝うことができるように
いまなお希望を失っている人々に
あなたの力強い息吹を
吹きかけてください

恐怖にとらわれ
信頼するところを
失いかけているわたしたちに
あなたの炎のような息吹を
吹きかけてください

イエスと同じ行動をとる
勇気が湧いてくるように
あなたの愛に満ちた息吹を
吹きかけてください

聖霊、来てください
みんなが聖なる喜びを
胸に抱きながら
生きていくことができるように

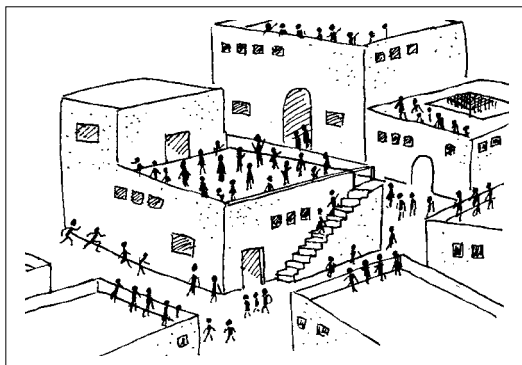
『イエスと出会う～福音書を読む～』
木崎さと子監修 原田葉子訳(教文館)

〈視聴覚教材〉

エルサレムの町並みの絵。当時の世界地図。

〈場面設定〉

使徒1：15によると、120人ほどの弟子たちが屋上の間に集まっていた。これほどの人たちがひとつところに集まることができる家とは、かなり広い家であったことでしょう。



「主の復活の証人」(使徒1：22)との自覚を持った使徒たちは、毎日定例的な集会を守り、聖書を説き明かし、「心を合わせて熱心に」祈っていました。そこにはイエスの母マリア、イエスの兄弟たちもいました。イスカリオテのユダに代わる使徒も補充しました。五旬祭の日に向けて、世界中から外国に寄留しているユダヤ人たちが帰ってきていたので、エルサレムの町はにぎやかでした。

〈分級メッセージ〉

☆ポイント聖句：使徒2：2～4「激しい風が吹いてくるような音」「炎のような舌」「ほかの国々の言葉」……これら三つの聖霊降臨のしるしをおぼえましょう。

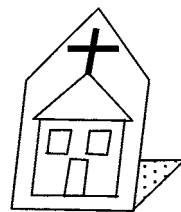
☆骨子①弟子たちの生活②聖霊降臨のしるし

☆例：オリーブ山からエルサレムにもどった使徒たちは、泊まっていた家の屋上の間で、他の仲間とともに、毎日集会を開き、聖書のときあかしをし、一緒に祈っていました。さて、五旬祭(ペンテコステ)の祭りの日、町はたくさんの人でにぎやかでした。外国人もたくさん祭りを祝うために集まっていた。突然、嵐のような音

が町中に響き渡りました。近くにいた人たちは「なんだ、なんだ」と音がしたところへ集まってきました。音がしたのは、ペトロたちが集まっていた家でした。屋上の間で何かが起こっている！人々は競って、屋上へ上がり、または隣の家の屋上へあがりたりして、様子を見にきました。すると驚いたことに、弟子たちの頭の上に、炎のようなものが見えました。さらに、いろいろな外国の言葉で、神さまのお話をしていたのです。外国から来ていた人は、弟子たちの話を聞いてちゃんと意味がわかり、これまたびっくりしました。これらは神様の言葉が世界中に広まることのしるしです。嵐のような音、炎、そして外国の言葉は、聖霊さまが地上に来てくださったしるしだったのです。

〈展開の工夫〉

ゲーム：当時の世界宣教すごろく(28日の展開例の図参照)。エルサレムをスタートし、当時の世界の国々にびったり止まったら、教会を建てることができます。五つ以上の教会を建て、はやくゴールした人から順位がきまります。次図のように、十二弟子とパウロの名前入りのコマと、教会を作りましょう。



〈参考〉

ペンテコステの日、エルサレムに集まっていた外国人は、世界中に離散していたユダヤ人です。離散のユダヤ人は、アッシリヤとバビロンによる捕囚の時代にまで遡り、その数はざっと4～500万ほどで、パレスチナに残っていたユダヤ人はわずか50万人だったそうです。(『バイブルアトラス』日本聖書協会P24)

〈ねらい〉

聖霊を信頼して、イエス様を証しする。

〈展開例〉

1. 聖書をもう一度読む

2. 分かち合い

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと思いを動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

Q. 五旬祭の日、一つになって集まっていた弟子達に、何が起こりましたか？ 三つ挙げて下さい。

→①天からの風の音 ②炎のような舌 ③ほかの国々の言葉で話す

Q. この「しるし」は、何を示すためのものだったでしょうか？

→三位一体の第三位格である聖霊なる神様が、天に上げられたイエス様から教会に注がれたしるしであった。聖霊降臨のしるし。

Q. 8～11節に、弟子達が自分の生まれ故郷の言葉で、神の偉大な業を話すのを聴いた人々のリストが書かれています。これにはどういう意味があると思いますか？

→当時の人々が考えていた世界の全体を表している。

Q. 聖霊が降られたことに伴うしるしのうち、特に弟子達が世界中の言葉を語り出したことに、どのような意味があるのでしょうか？

→世界中の人々にイエス様の福音を語る使命が教会に与えられたことを示す。

Q. 聖霊の御力によるペトロの説教によって、こ

の日、3000人が回心し、新約のキリスト教会が誕生しました。そもそも五旬祭とは、麦の収穫を祝う祭りでした。収穫の初穂は、その後の収穫全体を保証しています。この日、誕生した初代教会は、いわば世界宣教の初穂と言えます。では、この場合の初穂は、私達に何を保証していますか？

→教会の時代、聖霊の時代の世界宣教の豊かな収穫を約束している。

Q. この日に始まった新約のキリスト教会は、代々に亘って救い主イエス様のことを世界に向かって宣べ伝えてきました。ここに教会があるのも、私達一人一人がイエス様の福音を知ることができたのも、誰かがイエス様のことを伝えてくれたからなのです。では、その後を継ぐのは誰でしょうか？教会に通う私達です。聖霊が働く時、人間の思いや限界を超えてイエス様を伝える器として用いられるのです。私達にできることがないか、考えてみましょう。

4. お祈り

まだイエス様を知らない人のために。



霊が語らせるままに

テキスト 使徒言行録 2章14～42節

【ペトロの説教】(2:14-36)

ペトロの説教は大きく分けると、(1) 聖霊降臨はヨエル書の実現・成就(2:14-21)、(2) イエスの十字架・復活は詩編16編、110編の実現・成就(2:22-36)。

(1) 聖霊降臨とヨエル書

外国語でイエス・キリストの福音を証しする人々が、「朝っぱらから酒に酔っている」とのそしりを受け、「酒ではなくヨエルの預言が実現して、聖霊に満たされているのだ」と、ペトロは反論する(2:14-16)。神の救いがイエスの十字架・死・復活によって実現し、聖霊が約束どおり父とイエスのもとから送られると、男女の区別、年齢年代、更に身分や立場の区別も超えて、人々はこの聖霊に導かれて福音を理解し、イエスの証人とされる(2:17-18、ヨエル3:1-2)。ヨエルの預言(2:19-20、ヨエル3:3-4)はまた、ルカ福音書23:44-45において実現。

「主の名を呼び求める者は皆、救われる」(ヨエル3:5、使徒2:21)とあるように、ペトロは、この後、イエスの御名によって洗礼を受け、罪赦され聖霊に導かれ、救われて生きることを勧める。

(2) イエスの死・復活と詩編16編(2:22-33)

イエスの十字架による死も復活も神の救いの御計画にうちに定められており、そのことは詩編16:27を通して既に語られていたことであると、ペトロは説明(2:22-23)。詩編16:27は、ダビデを含めて旧約時代のいかなる人物によっても実現されない。ダビデは、自分の子孫の中から詩編16:27で言われているような人物が現れ、その王座は永遠に固くされると預言し(2:29-30、サムエル下7:12)、この永遠の王座に着く自分の子孫の一人、イエスが陰府に捨てられるはずがなく、必ず復活させられると知っていた、とペトロは旧約聖書を解説する。2:33は聖霊が父と御子とから派遣されることに言及(ヨハネ14:16、26;16:7)。復活し神の右に着座されたイエス(2:32-35)の地上の生涯における数々の

力ある御業とその死と復活とによって、神はこのイエスこそ、「主でありメシアである」ことを証明された(2:22, 36)。

【信徒の生活】

主の御名を呼び求める者は皆、イエスの名によって洗礼を受け、救われ、信徒の群れに加わった。この救いは、救いの契約の下に生まれてくる信者の子どもたちにも約束されている(2:39)。信者の生活の基本は「使徒の教え」「相互の交わり」「パンを裂くこと」「祈りと賛美」。

「使徒の教え」は、「使徒信条」「ニケア信条」で表わされる聖書全体から語られる健全なキリスト教教理に基づいた説教。「相互の交わり」は、共同体としての弱者への支援の仕組み(2:44-45)。主の御名によって救われ仲間に入る人々の中には、社会的弱者(やもめ、孤児、高齢者、障害者、etc.)も多くいた。そんな弱者と共に一つの体、一つの共同体として生きるための支援の仕組み。「祈り」と「賛美」は、主の民に与えられた、主との生命的な営み・全人的応答。聖霊に導かれて主と向かい合う時、自ずと祈りと賛美という応答が生まれる。「パンを裂くこと」は、「主の晩餐」「聖餐式」の原型。主の体と血にあずかって、主イエスと一体とされている事実、また、主の体と血とを共有する我々信者が一つ体・共同体として結ばれている事実を「パン裂き(主の晩餐・聖餐式)」は表わしている。ここに信者のまことの交わりがある。この真実の交わりは、「使徒の教え」を通してたえず確認され、その交わりがより真実なものへと深められ、きよめられて行く。

「使徒の教え」「相互の交わり」「パンを裂くこと」「祈りと賛美」は、合流して一つの流れとなる。それは、互いに愛し合うことであり、その愛の実体が教会の中に生き活きと表わされるとき、世の人々は、キリストの体・共同体・教会に聖なる関心・憧れを持ち、教会の交わりへと巻き込まれて行く(2:47)。(芦田高之)

テキスト 使徒言行録 2章14～42節
参照カテキズム ハイデルベルグ教理問答 問1、90

〔単元のねらい〕

ここではペトロの説教の内容よりも、ここでペトロたちが立ち上がり、力強く復活の主イエスを証した姿に焦点をあてました。説教内容は、ヨエルの預言の成就と共に、「十字架と復活」という初代教会のケリュグマ（宣教使信）が語られていきます。そのことも大切ですが、何よりも弱虫だったペトロが、ここで大胆に福音を語る者に変えられたこと、そこに聖霊の大きな力があつたことを焦点としました。同じ聖霊が子供たちにも生きて働き、みんなを力強く支え、大胆にしてくださることへと、信仰の目を向けさせていってください。そのことをなによりも、これを語る教師自身が深められながら、ここでの働きを助けてくださる聖霊の生きた働きを実感しつつ、生き生きと語ってください。

「聖霊によって変えられたペトロ」

主イエスは天にお帰りになるとき、「あなたがあつたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける」と弟子たちに約束されました（1章8節）。そして主イエスの言われたとおり聖霊が降ると、その約束どおり、彼らは上からの力を受けて、主イエスを証しする証人となります。ここでペトロは他の十一人と一緒に立ち上がると、大きな物音を聞いて周りに集って来た人々に向かって、「声を張り上げ」て、話し始めました。考えてもみてください。この少し前まで、ペトロはどんな様子でしたか。主イエスから一番愛されたペトロ、そのペトロは、主イエスの弟子だと言われると、震え上がって、それを否定しました。「いいえ、自分はあんな人を知らない、あの人の弟子などでは決してない」と。それも三回もそれを繰り返しました。その後はどうしましたか。自分は間違つて主イエスを否定してしまった、反省して、これからは主の弟子だと証ししようと思いましたか。いいえ！周りの人に見つからないように、こっそりと家の中に隠れ、内側から鍵をかけて、ひっそりとしていました。どうしてですか。周りの人を「恐れ」たからでした（ヨハネ20章19、26節）。

ペトロは、主イエスが復活されたことを知らなかったのでしょうか。いいえ！ちゃんと知ってい

ました。墓が空だったことも知っていました。マリアや他の女性たちが復活した主イエスに会ったことも、知っていました。それなのにペトロたちは、こっそりと家に隠れて、鍵をかけていたのでした。情けないペトロ、卑怯なペトロ、弱虫ペトロです。ペトロだけではありません。他の弟子たちも同じでした。主イエスが選ばれた弟子たちとは、このように主イエスを裏切ることしかできず、しっかりと主イエスを信じることもできず、ちゃんと主イエスを証しする勇気もない、卑怯で弱虫たちでした。主イエスは弟子選びを間違えたのでしょうか。主イエスには人を見る目がなかったのでしょうか。いいえ！選ばれた彼らはとても弱く、情けない人たちではありましたが、やがて彼らが聖霊によって大きく変えられ、命をかけて主イエスを力強く証しする、大胆に人になっていくことを知っておられたからでした。

これまでは部屋に閉じこもり、こっそりと隠れることしかできなかった弱虫たちが、聖霊を注がれてからは、逮捕されて、鞭で打たれても、脅されても、牢屋に入れられても、ひるむことなく主イエスを証ししていく人たちに変わったことを、知ってください。どうしてこんな弱虫が、こんなに元気に、大胆に、力強く、主イエスについて語

る人によって変わってしまったのでしょうか。それは聖霊が与えられたからでした。命の源である聖霊が豊かに注がれ、彼らの中で生きて働かれるようになったからでした。このように主イエスが約束された聖霊とは、弱いわたしたちに働きかけて、わたしたちを強くし、主イエスを信じ、従っていく勇氣と力を与えてくださるのです。そのことを、ここでペトロは人々に語りかけていくのでした。

「神は言われる。終わりの時に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたたちの息子と娘は預言し、若者は幻を見、老人は夢を見る。わたしの霊を注ぐ。すると、彼らは預言する。」(新改訳) これは、ヨエルという預言者が預言していたことでした。主イエスが来られる前の、旧約聖書の時代にも、もちろん聖霊は注がれたし、働いておられました。けれどもそれは「すべての人」にはなくて、ダビデとかイザヤといった特別な人にだけでした。そしてその人たちも、あるとき霊に捕らえられることはありましたが、それがずっと続いたわけではありませんでした。これまで聖霊は、特別なときに、特別な人にだけ、働きかけてこられただけでした。しかし主イエスが天にお帰りになり、聖霊をお遣わしくださるようになってくださったので、これからは「すべての人」に、注がれるようになったのでした。「わたしが(天に)行けば、弁護者(聖霊)をあなたがたのところに送る」と約束してくださいました(ヨハネ16章7節)。そして今、それが本当に実現したのです。

ここで一人一人に聖霊が注がれるようになったことで、ここで「彼らは預言する」とあるように(18節)、神さまの言葉をいただき、それを受け入れ、理解し、信じることができるようにされました。

かつて主イエスが話されたことを、聖霊は弟子たちがよく理解できるようにし、その深い意味を悟ることができるように働いてくださいます。「弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる」(ヨハネ14章26節)、「真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる」(ヨハネ16章13節)と約束しておられました。そしてその聖霊が働かれるとき、ただ聖書を理解し、信じるようになるだけではなく、それを大胆に証しし、伝道するようになるということです。わたしたちは、一人一人小さく弱い子供かもしれないかもしれません。主イエスのために何かをできるなどという力も知恵も持っていないかもしれません。でも大丈夫です。だって、あの臆病で弱虫だったペトロでさえ変えられて、力強く主イエスを証しする人に変えられたのですから。同じ聖霊が生きて働いてくださり、わたしたちをも変えてくださるのです。

これらの話の最後に、「ペトロは、このほかにもいろいろ話をして、力強く証しをし、『邪悪なこの時代から救われなさい』と勧めていた」としめくられます(40節)。このように臆病者で弱虫だったペトロを、力強く大胆な人に変えていった聖霊は、わたしたちをも変えてくださる、生ける命の主なのです。あなたの中で、今も生きて働いておられる聖霊の働きを信じて、今週もお友だちに、主イエスのことを大胆にお話ししてください。聖霊はあなたに、必ず話す勇氣と、話すべき言葉を与えて、助けてくださいますから。

(三川栄二)

[今週の暗唱聖句] 使徒言行録 1章8節前半

あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。

〈ねらい〉

主イエスを否定し、イエスの復活後も、周りの人々を恐れて隠れていたペトロが、聖霊の力により、大胆に復活の主を証しするようになる。同じ聖霊が私達にも与えられており、私達を支え、主に仕える力を与えてくださることを知る。

〈展開例〉

お昼寝をして目が覚めてみると、真っ暗なおへやに一人ぼっちだったら、どんな気持ちですか？そこにお家の人に来て、電気をつけてくれたら、どんなにほっとするでしょう。スイッチを入れると、電気が流れて、真っ暗だったお部屋が、パッと明るくなりますね。実は、イエス様のお弟子さんのペトロも、そうでした。

「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける」というイエス様の約束通り、聖霊が降ると、ペトロは元気に力強く、イエス様のお話をはじめました。

聖霊が降る前、ペトロはどんなだったでしょうか。イエス様が十字架に架けられる前、「あんな人は知らない。」と言って、三回もイエス様を否定してしまいました。それから家の中に隠れて、鍵をかけました。誰かが自分をつかまえに来るかもしれないと思って、怖かったからです。

ペトロは、イエス様がよみがえられたことも知っていました。女の人達がイエス様のお墓に行ったら、お墓の中は空っぽで、イエス様の身体に巻いてあった布はぺっちゃんこでした。それから、復活されたイエス様は、弟子達のところに会いに来てくださいました。皆は、幽霊を見ているのかと思って怖がったので、イエス様は手や足をちゃんと見せてくださり、お魚も食べて、幽霊じゃないよ、本物だよ、生きてるんだよと、証拠を見せてくれましたね。ペトロが湖に魚を獲りに行ったときも、イエス様は朝ごはんを用意して待っていてくれました。

こんなに優しいイエス様に何度も会ったのに、ペトロたちは、鍵をかけ、家に隠れていたのです。

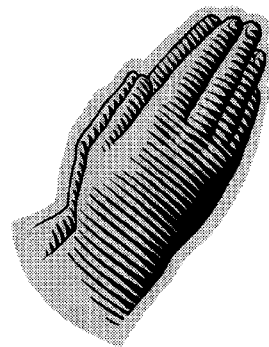
弱虫なペトロでした。しっかりとイエス様を信じることのできないペトロでした。

けれども、聖霊が降ったとき、ペトロは変わりました。元気に、大きな声で、どこでも、誰にでも、イエス様のお話をするようになりました。牢屋に入れられたり、鞭で打たれたりしても、「イエス様は神様です。」と、語り続けました。ペトロをこんなに変えたのは、聖霊です。聖霊は、イエス様を信じて従っていく力を、私達にもくださいます。聖書の言葉がよく分かるように助けくださり、お友達にイエス様のお話ができるように勇気をくださいます。

昔は、聖霊は特別な人にだけ働いてくださいました。でも今は、違います。大人も子供も、男の人も女の人も、日本人もほかの国の人も、イエス様を信じる人には誰にでも聖霊は与えられます。だから、小さな私達でも大丈夫です。今週もイエス様を信じて過ごしましょう。イエス様のことを知りたいと思っているお友達に出会えるように祈りましょう。聖霊がきっと導いてくださいます。

〈お祈り〉

神様、聖霊により、ペトロを強くして下さってありがとうございます。小さな私達にも力を下さい。そして、お友達にもイエス様のお話ができるように助けして下さい。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

イエスさまを三度も否定したペトロのとてもし強い説教を通して、聖霊を受けることの幸いと喜びを教えたい。

〈展開例〉

ペトロさんがイエスさまを否定し、イエスさまが十字架に付けられて殺されるときにも傍にすることができなかつたのも関わらず、こんなに多くの人たちの前で、イエスさまの十字架と復活のことを語る事ができたのでしょうか？ それはもちろん、ペトロさんの力ではありませんでした。聖霊の不思議な力が与えられたからです。

皆さんは、自分に力を与えられたいと思うときは、どんなときですか？ 日曜学校ですから、信仰のお話で言うと、やはり、イエスさまをわたしの救い主として受け入れ、信じていることを告白するときですね。

小さいということが信仰の告白をすることの条件を満たしてはいない、ということではありません。小学科下級だから、まだできないということではありません。

ペトロさんは、弱虫で、イエスさまの心も実はよく分かっていない人でしたが、聖霊が与えられましたときに、「力強く証しをし、『邪悪なこの時代から救われなさい』と勧めていた」(40節)と書かれています。イエスさまなど知らないと言っていた臆病なペトロさんが、とてもし違えるほどの力強い大胆な人に変えられた聖霊は、あなたがたを必ず変えてくださいます。

イエスさまが天に昇られて送ってくださった聖霊は、今も生きて働いておられます。

〈お祈り〉

神さま、わたし達はすぐにくじけてしまいます。聖霊を注いで、あなたの力を与えてください。わたしの周りにお友だちにイエスさまのことを伝える勇気をください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。

〈やってみよう〉

子供たちに聖霊によって変えられたいところを書いてもらい、それに基づいて一人ひとりのためにお祈りをしてみましょう。



だれにでも、与えられているものなのです。

〈視聴覚教材〉

先週と同じ。

〈場面設定〉

ペトロは屋上の間から集まった人々に向かって説教を始めます。街路から、向いの家の屋上から大勢の人々がペトロの話に耳を傾けました。

〈分級メッセージ〉

☆ポイント聖句：使徒2：38

☆メッセージの骨子：①ペトロの説教のポイント（主イエス、罪、救い）②3000人の受洗⇒教会の誕生③聖霊について

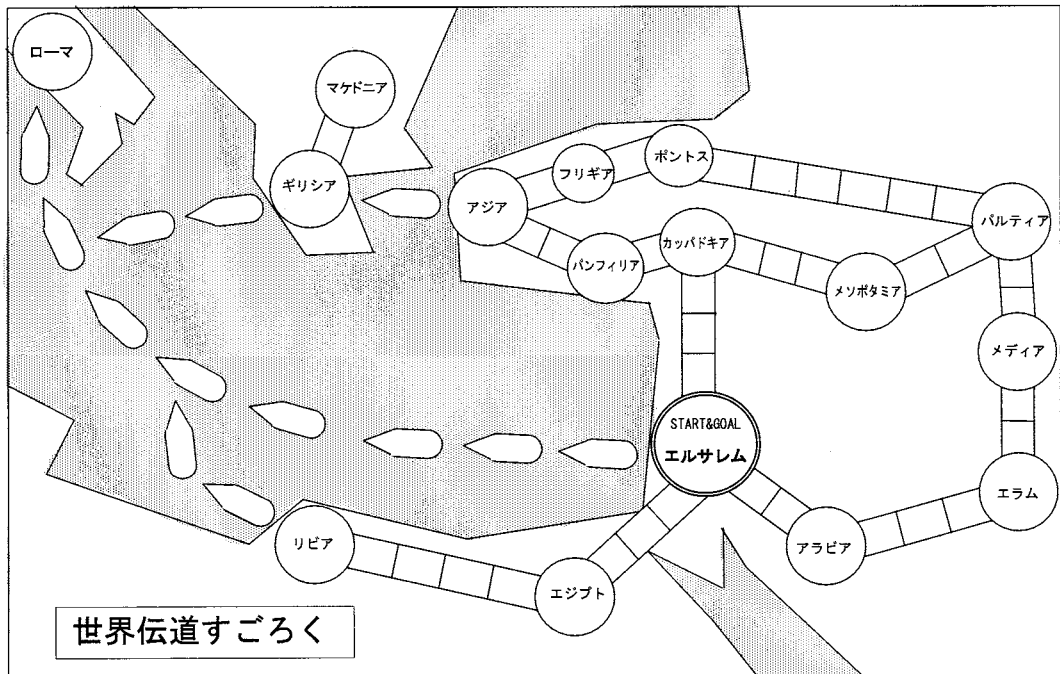
☆例：先週の続きです。不思議なしるしに驚いている人たちに前に、ペトロが立ち上がり、聖書のお話を始めました。ペトロは、「いまあなたがたが見たしるしは聖書で約束されていたことなのです。」「ナザレの人イエスこそ神が遣わされた救い主です。」「あなたがたはそのイエスさまを、ローマの兵隊の力を借りて、十字架につけて殺してしまったのです。しかしそのイエス

さまは復活され、いま神さまの右の座についておられるのです。」と言いました。聞いていた人々はぎくりとしました。「わたしたちユダヤ人はなんということをしてしまったのだろう。このままではわたしたちは神の怒りに触れて滅ぼされてしまうのではないか？ どうしたらいいのだろう？」と人々は思いました。ペトロは言いました。「悔い改めなさい！ イエス・キリストの名によって洗礼受け、罪を許していただきなさい。そうすれば聖霊を受けます。」驚きでした。罪が許される。しかも聖霊をいただくことができる！ その日3,000人もの人が洗礼を受けました。こうして初めての教会が誕生しました。聖霊さまは、神さまのお話ができる力をくださり、人々の心を神さまに向けてくださるお方なのです。

〈展開の工夫〉

世界宣教すごろく。

十二使徒の名前を覚えてみよう。



〈ねらい〉

聖霊の御力によって福音を語る。

〈展開例〉

1. 聖書をもう一度読む

2. 分かち合い

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

Q. ペトロは大胆に公然とイエス様のことを証しました。元々ペトロはこれ程イエス様のことを理解していたのでしょうか？ 強い人だったのでしょうか？

→イエス様を三度も知らないと言った程に弱いペトロだった。そしてイエス様の救い主としての働きに、悲しい程に無理解であった。

Q. ペトロの変貌は何によるのでしょうか？ を変えたのは、誰ですか？

→聖霊なる神様。

Q. 聖霊は使徒ペトロのような特別な人にだけ与えられるのでしょうか？

→そうではない。「わたしの霊をすべての人に注ぐ。」(17) というヨエルの預言の実現として、聖霊は教会に注がれた。旧約時代において聖霊は特別な人に注がれたが、聖霊降臨によって始まった教会の時代には全ての信者に与えられる。

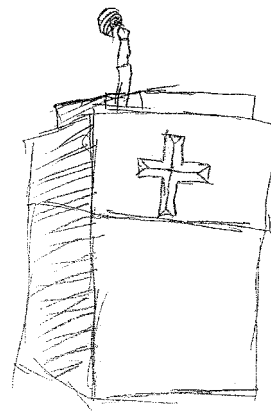
Q. ペンテコステの日に教会に注がれた聖霊は、何をしてくださいましたか？ ならぬ私達一人一人に何をして下さるのでしょうか？

→イエス様の救い主としての働きを理解できるようにして下さり、イエス様の自分のための救いの素晴らしさを語らずにおれなくさせた。聖霊は私達の内にも働いて、私達がイエス様の救いを喜ぶことへ導き、それを語る力を授けて下さる。

Q. ペンテコステの日、聖霊は一人一人に働いて、その口を開き、神の偉大な業を語らせて下さいました。これこそ聖霊の最も大切な働きです。聖霊は私達にイエス様がしてくださったことの素晴らしさを教え、喜びと感謝をもって、それを語らずにはおれなくなさるのです。イエス様のことを伝えるのは、特別な人だけの働きではありません。聖霊は、他ならぬ私達一人一人の心に宿って、イエス様が自分にして下さった素晴らしい救いを語る唇を授けて下さいます。今、この聖霊の働きに信頼して、私達にできることが何かないか、一緒に考えてみましょう。

4. お祈り

聖霊を与えて下さったことの感謝。



テキスト 使徒言行録 3章1～10節

約束の聖霊が与えられた弟子たちの群れは、「毎日ひたすら心を一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。」今日の場面は、ペトロたちが生まれながらに足の不自由な男と出会い、その男が主イエスの御名によって立てるようにされる奇跡。これを契機に弟子たちは、ユダヤ教の議員・長老・律法学者たちから、イエスのゆえに迫害を受けるようになる。

【美しい門での出会い】(3:1-4)

エルサレムにある「美しい門」と呼ばれる場所には、定例の祈りの時間に大勢の信心深い人々が集まっていた。この三時の祈りの時間に生まれながらに足の不自由な男が施して生計を立てるために連れて来られていた(3:1-3)。

ペトロとヨハネは三時の祈りの時間に神殿に上るとこの男に出会った。以前にも二人はここを何度も通ったはず。しかし、これまでは、二人の目にはこの男の存在は目に入ってこなかったようだ。ところが今、この男の存在が二人の目に入り、この男に対する関心が新たに生じた。これは、聖霊を頂いた後の弟子たちの心の変化。聖霊が造り出した新たな心。

【イエス・キリストの名による救い】(3:4-6)

足の不自由な男は、物乞いとして、ペトロとヨハネの彼への関心の眼差しに期待を持った。しかし、ペトロの口から出た言葉は、「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」(3:6)。金や銀はやがて使い果たせばまた物乞いせねばならない。この人が、自分で立って、自分で歩いて、自分で自分の人生に責任を持って、人生を与えて下さった神に応答して生きて行く。これを「生きる」という。ペトロとヨハネは、この男が生きようになることを望み、それを実現する実力がイエス・キリストにはあることを知っていた。人を生かし、人の人生を

希望と喜びに変えるのは、今も生きて働くイエス・キリストである。イエス・キリストの御名とは、単なるキリストの名前、キリストと他の人を区別する為の記号のようなものではない。生きたキリストが、今、生きて働くそのキリストの存在そのものが「イエス・キリストの名」。今、キリストは生きていて、人を立ち上げらせ、人が本来持つその人固有の輝きを輝かせて生きさせる。そんな生ける力を、今、信じる者の上に発揮される。その生けるキリストが、今生きて働かれることを、この「美しい門」で物乞いを続けている男とペトロたちとのやり取りの中で明らかにされた。

【御名により、躍り上がり救いを喜ぶ】(3:7-10)

ペトロはその男の右手を取って、「イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩け」と促す。今まで立ち上がる筋肉も働かせず、どこにどう力を入れたらいいかも良く分からなかったはず。しかし、この男の足の諸部分に力が入って、躍り上がって立ち上がり、歩き出す次第を、医者であるルカは仔細に生き活きと描き上げている(3:6-8)。この男の自分で立ち上がろうとする意志、立ってみようというやる気、きっと立ち上がれるだろうという希望、こうした精神的部分にもイエスは働きかけ、立ち上がる勇気をもこの男に注がれた。人の心にも、体にも、勇気と力を与えて、その人が自分の意志・責任で神に向かって生きるようにと力を注がれる。それがイエス・キリスト御自身、すなわち、イエス・キリストの御名。

この男が踊り上がって立ち上がり歩けるようになった。目に映るこの癒しの光景は、実はこの男の内面・魂こそが救われたことを表わす外的なしるし。踊り上がって立ち上がり歩いたこの男は、ペトロたちと共に神殿境内に入って行って、神を賛美した。そこに我々は、魂の救いを見ることができる。イエスの御名は、今も働き、人を神との生き活きとした交わりの中に救われて生きる生活へと招き入れる。(芦田高之)

テキスト 使徒言行録 3章1～10節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問27

〔単元のねらい〕

生まれて初めて何かを実現したり、達成できたときの喜びを、子どもたちに考えさせたりすることで、とにかく生まれながら足の不自由だった人が、ここで癒されたことの「喜び」を、子どもたちも実感することができるように導いてください。ここで大切なことは、この人の「喜び」です。その「喜び」こそが、この人と同じく、主イエスによって心の腰を立ち上げられ、自分の足で歩くように立たせられた、わたしたちの信仰の「喜び」でもあるからです。主イエスによって救われたことの喜びを味わいながら、語っていただきたいと願います。展開例では、その「喜び」に焦点を絞りましたが、大切なもう一つの点は、生まれながら足の不自由な男が癒されたのが、彼自身の信仰の力でも、ペトロの癒しの力でもなく、そこに復活の主イエスが生きて働かれたということです。福音書と言行録を書いたルカは、ペトロ、パウロといった働き人の業が、かつて主イエスが為された働きと同じものであるように記述することで、彼らの背後に生きて働かれる、復活の主の業へと、読者の目を向けさせていきます。このルカの意図を読み取って、「この人を、イエスの名が強くしました」と、今も生きておられる主イエスへの生きた信仰へと、子どもたちの心を向けていていただきたいです。同じ主が、今もわたしたちに働いてくださっているということへと、思いを向けさせ、困難な毎日を、それでも元気に生きていけることを教師自身が実感しながら、生きた信仰を豊かに語ってあげてください。

「共に生きて働かれる復活の主」

みなさんは、自分がしたいと思ったことが初めてできたときのことを思い出すことができますか。サッカーで初めてゴールしたとか、ピアノを一度も失敗しないでうまく弾けたとか、後ろを押さえてもらわないで自転車に乗れるようになったといったことです。そのときどんな気持ちになりましたか。ヤッターという気持ちで、嬉しくて仕方がなかったのではないのでしょうか。先生は、自分の子供が初めて立ち上がり、初めの一步を踏み出したことを覚えています。突然自分で立ち上がり、なれない足で一步を踏み出しました。でもうまく歩けなくて、すぐにどんと腰を下ろしてしまいます。それでもあきらめないで、何度も立ち上がっては歩き出し、そうする内に何歩も歩けるようになりました。きっと自分で立つことができるようになり、歩くことができたことが嬉しかったのではないのでしょうか。今までできなかったことが、うまくできるようになったときの喜びを思い出

ながら、お話を聞いてください。

ペトロたちは、今日も祈りを捧げようと神殿に出かけました。その神殿の建物の正面、女性たちが出入りできる「婦人の庭」と、男性たちだけが入ることができた「イスラエルの庭」の間に、「美しい門」と呼ばれた大きな門があり、そこにいつも座る常連がいました。もう40歳になっていたこの人は、「生まれながら足の不自由な男」で、いつもこの門の前に陣取って、神殿に詣でる善男善女から施しをもらっていました。その時、向こうから来たペトロたちと出会います。この人は、いつものように缶からを差し出して、「お恵みを」とペトロに施しをねだりました。いつもなら、ごくさやかなお金がチャリンと入れられて、「だんなに神さまの恵みがありますように」と丁寧に挨拶し、その人が行き過ぎると、すぐに缶の中をのぞいては、いくらもらったかを確かめるのでした。もらえるお金は人によってまちまちで、同情

してたくさん入れてくれる人もいますが、たいていはがっかりするほどわずかでした。立派で豪華な服を着たお金持ちが、たくさん入れてくれるとはかぎりません。かといって貧しい身なりの人が、施しをしてくれることもあまりありません。缶から差し出した相手は、身なりは貧しく金持ち風でもないの、あまり期待はできないなどと思いながら、それでも少しでも恵んでくれさえするならばと考えました。

この不思議な二人連れは、立ち止まると、年取った方が人が言いました。「わたしたちを見なさい」と。さては大金をくださるのかしらんとわずかに期待する思いが膨らんで、じっと二人を見たとき、また言いました。「わたしには金や銀はない」。なんだ、何かくれるのかと思ったがと、この人はさぞかしがっかりしたでしょう。ところがそこで不思議なことを言い始めるのでした。「持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」。一瞬この人はとまどったことでしょう。

考えてもみてください。この人は生まれてからこれまでずっと、一度も立ち上がったことも、歩いたこともないのです。わたしたちは、立ち上がるにはどうしたらよいか、歩くにはどうするか、考えなくても当たり前になります。しかしこの人には、それがまるで分からないのです。立ち上がるには、どこの部分に力を入れて、どの筋肉をどれくらい動かしたよいか、この人には生まれて初めてすることなのです。体がまひして動かすことができませんでしたが、たとえまひしていた体が動かせるようになったとしても、それでも立ち上がるとか、歩くとか、ましてや走ったり、踊ったりするには、どうしたらよいか、まるで分からないのです。それなのに、ここでこの人は、自分の体にたしかに力が与えられた感じがして、今まで一度も力を入れることができなかつた部分に力が入り、動かすことができなかつた部分が動かせるようになって、一気に立ち上がることができました！ たちまち、くるぶしが強くなったと思う

と、足腰が強くなり、しっかりと立つことができるようになりました。そしておそるおそる歩いてみたのです。歩けました！ 生まれて初めて歩いたのです。少し早く歩いてみました。走れました！ 初めて立ち上がり、歩き、走ることができるようになったこの人は、喜びがこみ上げました。そして嬉しくて嬉しくて仕方なくなり、溢れるような喜びに狂喜しながら、踊り始めたのです。ぐるぐると回ってみたり、跳ねてみたりしました。できました！ ますます喜びがこみ上げてくる中で、賛美が溢れてきたのです。もう誰かに助けてもらふ必要はありません。誰かに頼らなければどこかに行けないということもありません。恥ずかしい思いをしながら物乞いをする必要もありません。この人は、もう嬉しくて嬉しくて、神殿の中のあちこちを、飛び跳ねたり、躍り回ったり、走ったり、ゆっくりと歩いたりしながら、見て回りました。そして自分を救ってくださった神さまに心から感謝し、喜びに溢れながら、賛美したのでした。

この人がこんなになったのは、ペトロにそのような不思議な力があつたからではありません。この人が信仰深く、立派な人だったからでもありません。主イエスが今も生きて働いてくださることが明らかにされました。主イエスは死んで今はいない方ではなく、天に帰られたのでここにはおられないというのでもなく、聖霊によって、ここに生きて働いてくださっているのです。そして復活の主イエスは、今、この教会にも、みんなのところにも一緒にいてくださって、わたしたちを立たせ、起き上がらせ、歩かせてくださるのです。悲しい出来事で心がくじけそうになるとき、心を起こしてくださり、つらいことでがっかりするとき、元気を与えて立ち上がらせてくださる方なのです。復活された主イエスは、今もわたしたちと一緒にいてくださり、弱いわたしたちを立たせてくださる命の主です。学校でも、家でも、教会でも、どこにいても、わたしたちと共に、主イエスが一緒にいてくださることを信じて、今週も元気に励んでいきましょう。(三川栄二)

[今週の暗唱聖句] ヨハネによる福音書 16章33節後半

あなたがたには世で苦難がある。

しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。

〈ねらい〉

長い間、足が不自由で苦しんでいた乞食が、イエスの御名によって立ち上がることができました。どんな人でも、主イエスさまに出会ったとき、その人は変わることが出来る。立ち上がることができる。イエスさまと一緒に歩む人生の喜びを知る者にしていただきましょう。

〈展開例〉

さて皆考えてみてください。もし、皆が体が悪くて動くこともできないで、お友達もいなくて、ずっと独りぼっちで、生活をしていたら、皆どんな気持ちがするだろうか？（子どもたちの話を聞く）きっと寂しい思いがしますね。そんな乞食が今日の御言葉に出てきます。

乞食に声をかけた二人のお弟子さんがいました。それは、ペトロとヨハネでした。ペトロとヨハネがこの乞食に目を留めたのでした。「ペトロはヨハネと一緒に彼をじっと見て、わたしたちを見なさいと言いました。その男が、何かもらえると思って二人を見つめていると、「ペトロは言った。『わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。』そして、右手を取って彼を立ち上がらせた。すると、たちまち、その男は足やくるぶしがしっかりして、躍り上がって立ち、歩きだした」(ver6-8)。どうでしょうか。驚いたことに何とこの乞食は、立ち上がることができたのでした。

「民衆は皆、彼が歩き回り、神を賛美しているのを見た」(ver9)。彼は、立ち上がることができたのが嬉しくて、嬉しくて、踊りながら神様を賛美しました。

弟子達はこの乞食にお金をあげることもできました。でもお金ならばすぐに使ってしまうようになってしまいます。でももう今は、自分の力で立ち上がることができます。自分の力で歩くことも

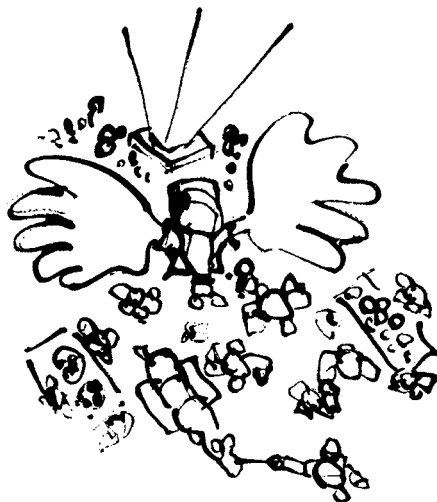
できます。そうすれば、もう自分で働くことができます。自分でお友達をつくることもできます。自分の力で生きていくことができるのです。

弟子達を通して、イエスさまが働いて下さって、乞食はもう一回立ち上がる喜びを、自分の足で人生を生きていく喜びを体験したのでした。

イエス様は、僕なんか独りぼっちだ、僕の事なんか誰も分かってくれない、僕にはだれもお友達がいない。そんな僕たち私たちでもイエス様は、出会って下さって、毎日を喜びをもって生きていくことができるようにして下さいます。イエス様はいつも、僕たち、私達の毎日の生活を新しくして下さいます。

〈お祈り〉

神様、僕なんか独りぼっちだ、僕の事なんか誰も分かってくれない、僕にはだれもお友達がいない。そんな僕たち、私たちでもイエス様は、出会って下さいます。そして毎日を喜びをもって生きていくことができるようにして下さいます。このイエス様を心から信じていくことができるようにして下さい。アーメン。



持っているものをあげよう。

〈ねらい〉

足の不自由な男がいやされて立ち上がることでできた喜びを伝えたい。イエスさまを信じることは、大きな喜びを味わうものなのです。

〈展開例〉

自分の目標はありますか？まだの人は、ぜひ、目標を立ててみてください。目標を立てるときに、最初からできないことを目標にする人はいないと思います。

今日の聖書の箇所は、ペトロさんたちが生まれながらに足の不自由な男に出会いました。その男の人は、神殿に連れてきてもらって、神殿に来る人たちから少しのお金を貰うためでした。それがこの男の人の一日の生活費になりました。

でも、本当は、足の不自由さの問題が解決すれば、自分の足で歩いて仕事をすることもできるようになります。生まれながら、自分の力で歩いたことはありませんから、そんなことは期待もしていませんでした。望みのないところに望みを与えてくださるイエスさまは、ペトロさんを用いて、聖霊の不思議に力によって、この男の人を立ち上がらせてくださいました。

パウロさんがローマの信徒への手紙5章に、このように書いています。「そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです。苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。希望はわたしたちを欺くことがありません。わたしたちに与えられている聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです」(3～5節)。

私たちがもしも倒れてしまうことがあったとしても、立ち上がる力を与えて、歩いていくための必要な力を与えてくださるイエスさまです。

〈お祈り〉

神さま、私たちがイエスさまと歩いていくための必要なものをいつも与えてくださってありがとうございます。悲しいとき、つらいとき、どうか、助けてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。

〈話し合ってみよう〉

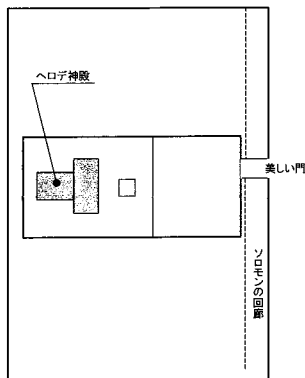
教師の神さまによって助けられ、導かれた体験を、素直に伝えてあげてください。神の働きを具体的に証しするよい機会です。つらいことがあったときに、神さまに一所懸命にお祈りをして、平安が与えられたということでもかまいません。

あるいは、世界の中には争いのために不自由をしている人たちがたくさんいますから、その人たちの平和のために祈ることもいいと思います。自分の周りに目を向ける良いときとしてください。



〈視聴覚教材〉

エルサレム神殿の地図。「WWJD」を紙に書いたもの。



〈御言葉の背景〉

当時の神殿は、B.C. 515年に再建された第二神殿を、ヘロデ大王が、B.C. 20年頃から46年もかけて大改築を行ったヘロデ神殿と呼ばれるものです。いくら立派な神殿があっても、中身のない形式的な礼拝は、古来さまざまな預言者や主イエスから厳しく批判されてきました。ヘロデ神殿は大変壮麗なものであったと言われてますが、その入り口で貧しく弱者がないがしろにされている光景は、まさに当時の「邪悪なこの時代」を象徴しています。

〈分級メッセージ〉

☆ポイント聖句：使徒3：6

☆骨子：①足の不自由な男について②男をとらえたペトロのまなざし③いやし④ペトロが与えたもの

☆例：エルサレムの神殿に通じる、美しい門のそばには、午後3時頃になると、きまって40歳過ぎ（使徒4：22）の男が座っていました。神殿に出入りする人々は、みんなその男のことを知っていましたが、たいして気にかけていませんでした。なぜなら、その男はうまれつき足が不自由な乞食だったからです。ほとんどの人がその前を素通りするか、ほんのたまにお金を恵んであげる人がいるだけでした。ある日、ペト

ロとヨハネが美しい門にさしかかると、その男が「だんなさま、どうかあわれみを」とペトロたちに施しを求めました。ペトロは男の前で立ち止まりました。人々からみればとるに足りない、ほとんど無視されていた男を、ペトロはじっとみつめたのです。ペトロは見つめながら「わたしの羊を養いなさい。」とのイエスさまの言葉を思い出したのかもしれませんが。ペトロはイエスさまのまなざしで男をみつめたのです。ペトロは言いました。「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」（使徒3：6）するとどうでしょう！その男は躍り上がるように立ち上がり、歩き出したのです。男は歩きまわったり、踊ったりして、全身で喜びを表し、神を讃美しました。ペトロはお金は持っていませんでしたが、もっと大切なものを持っていました。それは神さまを信じることの「喜び」です。そしてペトロは、神さまからさずかった癒しの力を通して、その「喜び」を足の不自由な男にわけてあげたのです。男はペトロと共に神殿に入っていました。このようにして、イエスさまを信じる人がどんどん増えていきました。

〈展開の工夫〉

WWJDのロゴの入った商品を見たことがあるかと思います。WWJDとは、*What would Jesus do?*（イエスさまだったらどうするだろう？）という意味です。いろいろな場面で、「イエスさま、あなただったら……」と主に問いかけつつ行動することによって、人を見る目や行いが変わります。「WWJD」このロゴをテーマに、わたし達の生活を考えていくとどうなるでしょう。



〈ねらい〉

キリストの名によって生かされる幸いを知る。

〈展開例〉**1. 聖書をもう一度読む****2. 分かち合い**

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと思いを動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

Q. ペトロとヨハネが「美しい門」の傍らで出会った、生まれながら足の不自由な男は、何をしていた人でしたか？

→神殿の境内に入る人に施しを乞うていた。

Q. 2 に「運ばれて来た」、「置いてもらっていた」と書かれています。これは人に使う表現ではありません。では、何に使いますか？ この人はどのように見なされていたと思いますか？

→物に使う表現である。ここから、この生まれながら足の不自由な男が、人間として真に低い価値しか認められていなかったこと、ほとんど人間扱いされていなかったことが推測できる。

Q. 神殿に入る者の内、一体どれだけの人が彼の求めに応じたことでしょうか。施しは、宗教的美徳でしたから、義務的に、自分が賞賛されるために、施しをしたかもしれません。しかし彼の本当の隣人になったのではなかったでしょう。隣人になるとはどういうことでしょうか？

→ペトロやヨハネのようにじっと見つめること、すなわち、誠実な関心を寄せるということである。それなくして、隣人であることはない。そしてそのような関心は、聖霊によって心に起こ

されるのである。

Q. ペトロ達は施しを乞う男に対して、真実な関心を寄せていましたから、金や銀ではなく、イエスの名によって立ち上がることを命じました。私達が他の人に対してしてあげられることが色々あると思います。しかし私達が隣人にできる最も善いことは何でしょうか？

→イエスのことを伝えること。

Q. 生まれながら足の不自由な男が「躍り上がって立ち、歩き出した。」(8節)とあります。この奇跡は誰の力で起こったのでしょうか？ ペトロの魔術的な力でしょうか？ この足の不自由だった男の立派な信仰によるのでしょうか？ →どちらでもない。復活の主イエス・キリストの御力による。イエスがペトロを通し、足の不自由だった男の信仰を通して働き、この男をいやした。

Q. この奇跡は、福音書に書かれているイエスの奇跡と重なります。この足の不自由な人のいやしは、私達に何を教えているのでしょうか？ →イエスが復活され、今も弟子達を通して働いておられること。

Q. イエスは今も生きて働いておられます。私達をも慰め、励まし、救いの喜びに躍り上がらせ、神様を賛美させて下さいます。では、そのために求められていることは何でしょうか？ 16節、19節を見て、答えて下さい。

→イエスを信じる信仰と悔い改め。

4. お祈り

イエスの救いの喜びで満たして下さるよう

テキスト 使徒言行録 5章1～11節

(1) 大きな流れ

教会は初めから「不正」と戦うことからその歴史を始めています。そしてその不正とはイスカリオテのユダを継承するものと考えられているようです。なぜなら「このユダは不正を働いて得た報酬で土地を買った」(1章18節)と言われていますが、土地の代金と関係付けられているユダの不正が、同じく土地の代金に関するアナニア夫妻の不正へと語り進められているからです。そしてこの不正はさらに、ギリシャ語を話すやもめへの分配の不正(6章1節以下)というかたちで教会にありつづけたことを、使徒言行録は記録し続けるのです。アナニアに対するペトロの「あなたはサタンに心を奪われ」たのだという言葉も、「ユダの中にサタンが入った」(ルカ22章3節)と告げるルカの記述を引き継ぐものです。

ユダの不正、アナニア夫妻の不正、ギリシャ語を話すやもめへの分配の不正というそれぞれの事件の間で、「信者たちは皆一つになって、すべてのものを共有にし」(2章44節)、「信じた人々の群れは心も思いも一つにし」(4章32節)、「一同は心を一つにして」(5章12節)という、教会のあるべき姿が確認され続けていくという流れです。そのような一連の流れの中で、聖霊を欺くことにたいする教会の鋭い意識と対処が語られています。三つの事件のどれに対しても、教会はその都度、誠意をもって対策を講じています。使徒言行録が記す教会の最初の行動は、ユダの欠員を補うための補欠選挙でした(1章12節以下)。今回はアナニア夫妻に対する尋問であり、次には食事の世話をすべき七人の役員を選出です(6章1節以下)。生まれたばかりの教会は、イエス・キリストを大胆に証言することと表裏一体の最重要課題として、聖霊を欺く不正のいっさいに最も鋭敏に目を留め、それに具体的に対処することによって、「一つ」のキリストのみ体を具現することを目指しているのです。

(2) 聖霊を欺くことの恐ろしさ

使徒言行録はユダの不正との連続を意識しつつ、このアナニア夫妻の不正を「聖霊を欺いた」(3節)、「神を欺いた」(4節)、「主の霊を試した」(9節)と、三通りにも言い換えながら追求しています。それほど熱情をもって初代教会が、信仰的な生き方の真実を追究していたことの表れといってもいいでしょう。

ユダについては「その地面にまっさかさまに落ちて、体が真ん中から裂け、はらわたがみな出てしまいました」(1章18節)とまでリアルに、聖霊を欺くことの恐ろしさが描かれていました。同じようにアナニアについても「アナニアは倒れて息が絶えた。そのことを耳にした人々は皆、非常に恐れた。若者たちが立ち上がって死体を包み、運び出して葬った」(5～6節)というところまで言葉を費やしていますし、サフィラについても全く同様に「彼女はたちまちペトロの足もとに倒れ、息が絶えた。青年たちは入って来て、彼女の死んでいるのを見ると、運び出し、夫のそばに葬った。教会全体とこれを聞いた人は皆、非常に恐れた」(10～11節)と、その恐れを強調しています。聖霊を欺くことがどれほど恐ろしいかを聖書は私たちに伝えようとしているのです。

(3) 神の真実・私たちの真実

神は真実な方です。私たちもまた、魂の真実さをもって神さまに対し、神さまとの真実な関係を生きたいと思います。使徒言行録の言葉をそのまま使うなら「真心をもって」(2章46節)です。聖霊なる神さまにたいして私たちが真心をもって対峙すればするほど、神さまはそれだけいっそう純度の高い深い喜びで私たちを満たしてくださるでしょう。「真心をもって」神と教会に仕えたいものです。

(赤石純也)

テキスト 使徒言行録 5章1～11節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問59、60
ウェストミンスター信仰告白 26：3
同大教理問答 問105、145、151 同小教理問答 問78

(単元のねらい)

子どもたちの中には、神様を信じて教会生活を続けることと、日常の生活を、区別して考える人もいるかもしれない。しかし、神様を信じることは、私たちの生活するすべてにおいて神さまが共におられ、神さまは常に私たちの生活を見守っていて下さることを語って頂きたい。この時、神さまを信じて、神の御言葉である聖書に従うことが、他人にも従うことにつながる。そして、他人に対して嘘をついたり、むさぼることが、その人に対して罪を犯しているのみならず、神さまに対しても罪を犯しており、神さまが悲しんでおられることの理解を求めて頂きたい。

「他人に嘘つくことを、神さまは見ておられます」

皆さんは、お父さんやお母さんに対して、嘘をついたことはありませんか？ 誰でも、一度や二度は、嘘をついてしまったことがあるかと思います。その時、心の中では、嘘をつくことは悪いことであり、「嘘についてごめんなさい」と思っているのではないのでしょうか。

でもね、心の中のもう一人の自分が、「嘘をついても、バレなければいいや」とも思っていますか。特に、自分が嘘をつくことで、他の人が誰一人として嫌な思いをすることがなく、傷ついたりすることがないような嘘ならば、「嘘をついても良いんだよ」と心の中で思っていないのでしょうか。

先程お読みした聖書には、神さまを信じてクリスチャンになったアナニアさんと奥さんのサフィラさんが登場します。アナニアさんとサフィラさんは、つかっていない土地を持っていました。だから、土地を売って、教会のためにつかってもらうため献金することに決めました。聖書には金額は載っていませんが、分かりやすくするために、1000万円で売れたことにします。

この時、アナニアさんとサフィラさんは二人で相談して、500万円で売れたことにして、その

500万円を教会のために献金をしようと、二人で決めたのです。そして残りの500万円は、自分たちのために使おうと思ったのでしょうか。500万円も献金すれば、教会は助かりますし、貧しい人たちのためにも施しをすることができます。二人は、「教会の人たちも喜ぶだろうな」と思ったことでしょうか。

そして、アナニアさんが、使徒たち（イエスさまのお弟子さんたち）のいる教会に行き、「私の持っていた土地が500万円で売れました。その500万円を献金します」と言い、献金をしたのです。

この時ペトロさんは、「アナニアさん、こんなに多くの献金をしてくださり、ありがとう」とは語りません。そうではなくペトロさんは、聖霊によって導かれて、500万円で土地を売ったことが嘘であることを知り、「アナニア、なぜ、あなたはサタンに心を奪われ、聖霊を欺いて、土地の代金をごまかしたのか。売らないでおけば、あなたのものだったし、また、売っても、その代金は自分の思いどおりになったのではないか。どうして、こんなことをする気になったのか。あなたは人間を欺いたのではなく、神を欺いたのだ。」(5：3～4)と語ります。ペトロさんは、「1000万円で売れた

のだから、そのすべてを献金しなければなりません」とは語りません。「なぜ『1000万円で売れたうちの500万円を献金します』と正直に言わないのですか。」と語るのです。

主なる神さまは、アナニアさんとサフィラさんの行ったことをすべてご存じです。そして使徒たちの前で嘘をついたことに対して、悲しんでおられ、怒っておられるのです。

つまり本当ならば、500万円も献金をするには、素晴らしいことで、喜ばれるべきことですが、そこに嘘が隠されていることにより、神さまは悲しまれるのです。これは、少し難しい言葉かもし

れませんが、「偽善」ということです。

神さまが求めておられることは、見栄をはって多くの献金をするのではなく、ありのままの状態を神さまの前に告白し、神さまが共にいてくださり、救われていることの感謝の思いを、少額でもよいから献金することです。この行為を神さまは喜んで受け入れてくださいます。

そして私たちが神さまの前に真実に生きようとする時、それは同時に、周りの人たちに対しても、正しく生きることにもつながるのですよ。

(辻 幸宏)

[今週の暗唱聖句] ヨハネの手紙一 3章20節後半

神は、わたしたちの心よりも大きく、すべてをご存じだからです。



神を欺いたのだ。

〈ねらい〉

私たちはよく嘘をついてしまう。これぐらいの小さな嘘ならばいいやと考えてしまうことがある。しかし、私たちが嘘をつくことは、人に対して嘘をつくだけではなく、神に対して嘘をつくことになってしまいます。神と人の前に真実に生きる者にさせていただきます。

〈展開例〉

ある国で嘘つきコンテストがありました。そのコンテストの中で優勝した人がいました。さて、どんな嘘をついたのでしょうか？（子どもたちの話を聞く）何と優勝した人は、僕は今まで一度も嘘をついたことがありません。そう言ったそうです。

今日は、アナニヤとサフィラという二人の人が主人公です。「ところが、アナニアという男は、妻のサフィラと相談して土地を売り、妻も承知のうで、代金をごまかし、その一部を持って来て使徒たちの足もとに置いた」（ver1-2）。

二人は、夫婦で悪いことを考えて、土地の代金をごまかして、それが全部であるかのように見せかけて、その一部を弟子達のところにもってきたのです。二人はただ嘘をついたつもりでした。しかし、その嘘は、「聖霊を欺いて」（ver3）「あなたは人間を欺いたのではなく、神を欺いたのだ」（ver4）と、聖書は言っています。そして、何とアナニヤは倒れて息が絶えて死んでしまいます（ver5）。サフィラも息が絶えて死んでしまうのです（ver10）。二人は、これぐらいならいいやと、小さな嘘をついたと思ったかもしれません。しかし、人に対してついでした嘘は、神様に対してついでした嘘になるのです。

例えば皆がお母さんから、「弟と分けなさいね。妹と分けなさいね。」と、お小遣いを貰ったとします。それが、仮に1000円だったとします。兄弟で半分ずつということならば、自分も500円弟も500円ということになると思います。でもいいや、弟なんて分かりやしないや、そう思って、自分が700円、弟に300円あげたとしたら、どう

でしょうか。最初はラッキー、多く自分のものになったと喜ぶかもしれません。でも、だんだん心の中は、落ち着かなくなってくるのではないのでしょうか。それは、神様が私達の心に、本当にそんなことをしていてもいいのか？と語りかけて下さるからなのです。私達は神様によって創られました。ですから神様と一緒に毎日を生活するときに、正しく歩むことができます。私達がこれぐらいならいいやと、つい、ついでした嘘は神様に対しても嘘をついてしまったことになるのです。神様はいつも正しい心で私達が生活をしていることをねがっておられるのです。

〈お祈り〉

神様、私達は、これぐらいの嘘ならいいやと、ついつい、小さな嘘をついてしまうことがあります。しかし、それは、お友達に対して、お父さんお母さんに対して嘘をついただけではなく、神様に対して嘘をついたことになるのです。神様の前にいつも正しい心で、歩めるように、私達をお守り下さい。アーメン。



〈ねらい〉

聖霊が降ってキリストの福音を告げ広めていた教会は、ほとんどの人たちが貧しい人たちでした。だから、教会は必要なものを分け合っていました。私たちに与えられているものを神さまのために使うことを学びましょう。

〈展開例〉

日曜学校でする献金は、神さまへの感謝の献げものです。だから、献金の金額が多いことが大事ではなく、神さまの恵みに心からの感謝をもって献げる私たちの心が大事です。

アナニアさんとサフィラさんは、自分たちの土地を売って、そのお金を神さまのために献げました。たぶん、少ない額ではありません。でも、二人は神さまへの献金をごまかしてしまいました。それは喜んで神さまに献げたからではありません。惜しむ心で、もったいないと思ってささげたのです。

神さまのためにささげるものを、ちゃんと準備しておいてから礼拝にのぞみましょう。献金するときになってあわててお財布の中を見るようなことはしないようにしましょう。決して、小さな金額でも、もしできなくても、神さまはあなたの心をよく知っていてくださいますから、悲しまないでください。

実は、5円であったとしても世界の中には、そのお金で赤ちゃん一人を助けるための必要なワクチンを買うことができます。どんなに小さなものであっても、それを神さまの働きのために大きく

してくださるまことの神さまを信じて、喜んで神さまの心に従う者となりましょう。

〈お祈り〉

神さま、惜しむ心からではなく、喜んですべてをあなたにささげる者とさせてください。わたしたちのささげるものは、小さいものですが、聖霊が大きく神さまと人のために用いられるようにしてください。

イエスさまのお名前によってお祈りします。
アーメン。

〈話し合ってみよう〉

マザー・テレサのインドのカルカッタでの〈死に行く人のための家〉の働きを紹介し、人のために仕えることを神さまが大いに祝福してくださることを考えてみましょう。



〈視聴覚教材〉

おにぎり12個（本物。お菓子でもよい）。

〈場面設定〉

十二弟子とその仲間の教会はどんどん人が増え、その数は10,000人を軽く超えていたでしょう。彼等は毎日神殿のソロモン回廊（使徒5：12……先週の神殿地図参照）という場所に集まり礼拝をしていたほか、持ち物を持ち寄り、貧しい仲間に分け、助け合っていました。

〈分級メッセージ〉

☆ポイント聖句：使徒5：4「あなたは人間を欺いたのではなく、神を欺いたのだ。」

☆骨子：①初代教会の美しい助け合いの姿②アナニアとサフィラの罪③心をごらんになる神さまを覚える。

☆例：人に分けてあげるという行為はとっても美しい行いですね。エルサレムの教会は、そのことを実行しました。お金持ちの人がたくさんのお金や食べ物や服や家を教会に持ってきました。また土地を売ってお金に換えてそれを教会に捧げた人もいます。そしてペトロや他の使徒たちは、ささげられた食べ物や服やお金を、貧しい人に分けてあげたのです。そのため、教会の中には一人も貧しい人がいませんでした。中には自分の土地や家を全部売ってお金にし、それを全額教会に捧げる人もいました。

アナニアやサフィラという教会員も、土地を売ることにしましたが、土地の代金をぜんぶ教会に捧げるのは惜しいと思いました。でも全額ささげて人々からすごいと思われたかったので、二人は相談して、売った代金をごまかすことにしました。まずアナニアがお金を持って教会へ行き、「ペトロさま。これがそれがしの土地を売った代金の全額でございます。どうぞお受けください。」と得意そうに捧げました。その結果どうなりましたか。ペトロにうそがばれ、

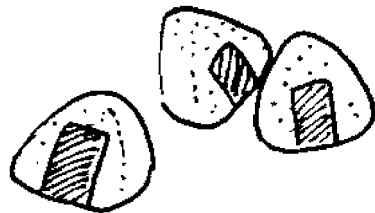
アナニアはすぐに倒れて死に、あとから入ってきたサフィラもすぐに倒れて死んでしまいました。神さまは人の心をごらんになります。人に分け与えることは尊い行いですが、その心の中が自分の欲で真っ黒けでは、美しい行いとは言えません。それは神さまを欺いたことになるのです。

〈展開の工夫〉

①分級の冒頭におにぎりやおやつを12個用意し、クラスの一人に10個、一人に2個渡し、導入の話として次の話を入れる。

「ある学校で遠足に行きました。お昼ごはんになって、A君はおにぎりを10個持ってきましたが食べきれません。B君はおにぎりを二つしかにぎってもらえませんでした。C君はおにぎりの入った袋を忘れてしまいました。さあA君くんどうしますか。B君とC君に分けてあげますか？それとも食べきれない分は家に持って帰りますか？」

……みんなで分け合って、分級の終わりに食べましょう！



②バルナバを調べよう。：アナニアとサフィラとは反対に、わたし達の模範として描かれているバルナバについて聖書を調べてみよう。使徒4：36（名の意味、出身地）、9：27（サウロを仲間に紹介した）、11：25（サウロを捜した。）、13：2（パウロの伝道旅行に同行）、15：37（マルコにやり直すチャンスを与えた）、地図（キプロス島の位置）。

〈ねらい〉

神様を畏れて生きる者となる。

〈展開例〉

1. 聖書をもう一度読む

2. 分かち合い

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

Q. 今日のアナニアとサフィラ夫妻の話は、読んだ後、とても怖い印象がします。彼らはそもそもどういう理由で死んだのですか？

→土地を売った代金をごまかしたため。うそをついただけでなく、神様のものとして聖別されたものを奪う行為であった。彼らが土地の代金の全額を神様へ献金するとしていたからである。だから、その代金をごまかし、一部だけを持って来たことは、ただのうそではなく、献金の着服、神様のものとして聖別されたものを貪欲に盗む罪であった。

Q. アナニアとサフィラ夫妻は、神様に献げられ、聖別された献金をごまかし、死にました。まずアナニア、次にサフィラが、ペトロの言葉を聞いた後に死にました。では、ペトロがアナニア夫妻の死なせたのでしょうか？

→ペトロではなく、神様が彼らの罪を裁き、打たれた。

Q. 「聖霊」、「神」、「主の霊」を欺いた罪を裁かれて、その罰としてアナニア夫妻は死にました。このアナニア夫妻の事件は、教会に何を示しましたか？

→教会には聖霊がおられ、復活の主が聖霊において教会の只中におられ、働かれるということ。神様が教会の歩み、一人一人の信仰者をご覧になっていらっしゃるということ。

Q. アナニア夫妻の罪と罰は、教会には復活の主のご臨在があることを改めて教えました。それは教会にどういう態度を形作りましたか？

→神様を畏れて生きる態度。「そのことを耳にした人々は皆、非常に恐れた。」(5節)、「教会全体とこれを聞いた人は皆、非常に恐れた。」(11節)と書かれている通りである。

教会は単なる人間の組織ではありません。私達の目には人の集まりのように見えますが、しかしその只中に神様がおられ、私達の歩みをご覧になっていらっしゃるのです。私達の教会での生活、そこから始まる生活は、神様の御前で営まれる生活です。神様は私達の罪を赦し、救うために、イエス様を十字架の上で犠牲となさる程の無限の愛で愛して下さいます。しかし同時に、罪を見逃されるお方でないことを覚えましょう。それは私達の救いのために、身代わりとしてイエス様が十字架の上で罪の刑罰を受けて下さらなければならなかったことに、何よりも示されています。十字架にかかって下さった復活の主イエス様を信じる私達は、神様の愛を疑わないと共に、神様を正しく畏れて生きていくのです。

4. お祈り

神様の愛と正義を正しく理解させてくださるよう。



テキスト 使徒言行録 7章54～60節

(1) 大きな流れ

今日の激しい情景の中に、初めて登場する重要人物の姿がごく控えめに描きこまれています。後にパウロ（小さき者）と呼ばれることになる、誇り高い王の名を持つ青年サウロです。使徒言行録は、交わらない平行線を引くようにステファノとパウロの二人を描きます。ステファノが逮捕されたとき「この男は、この聖なる場所と律法をけなして」（6章13節）いるというのが彼らの主張でした。やがてパウロが逮捕されるときにも「この男は、民と律法とこの場所を無視する」（21章28節）ことを教えていると主張されることとなります。パウロの逮捕に向けて「全群衆を扇動」したのは「アジア州から来たユダヤ人たち」（21章27節）でした。ステファノのときに「民衆、長老たち、律法学者たちを扇動」した者の中にもやはり「アジア州出身の人々」（6章9節）がいました。今日ステファノを抹殺するのも、律法と神殿を「無視され」「けなされる」ことに耐えられない人々の陣営に扇動された人々です。

しかし彼らはその本質においてはどのような人々だったのでしょうか。イエスご自身の裁判の席で「今から後、人の子は全能の神の右に坐る」（ルカ22章69節）と言われました。この主のみ言葉のリアリティーをステファノが証言した瞬間に、彼らは「耳を手でふさぎ」「一斉に襲いかかり」ました。それは神の言葉を聞くまいとする人間の姿です。そしてキリストの言葉は現実であると告げる口を、カづくで封じようとする人間の姿です。

(2) 神のみわざ

しかしそのような人間のわざによって神のみわざをとどめることはできません。とどめようとしたサウロに起こった出来事がそれをまざまざと示すこととなります。それだけではありません。神のみわざは、ご自身に敵対する力を覆すだけではなく、神を信じる私たちの、御国の進展を願

うがゆえの祈りや奉仕のわざにたいしても、私たちの当初の意図を超える仕方では答えてくださいませ。ステファノら七人を選出したとき十二使徒たちは彼らの上に手を置いて祈りましたが（6章6節）、その祈りは、この七人に「食卓の世話」を任せることによって十二使徒は「祈りとみ言葉の奉仕に専念する」ことができるようにという願いだったはずですが。しかし食卓の世話をするはずの七人によって福音宣教の突破口が開かれることになり、ステファノはこの殉教に至るまでの説教において「知恵と霊によって語った」（6章10節）し、フィリポはサマリアの「人々にキリストを宣べ伝え」（8章5節）しました。「エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で」（1章8節）というキリストの言葉はこのようなかたちで使徒たちの祈りを超えて現実化していきました。教会の歴史とは、私たち人間の思いを超えた神のみわざの歴史です。この神の御力を私たちは信頼することができるのです。

(3) キリストと結ばれる

「主イエスよ、わたしの霊をお受けください」（59節）というステファノの言葉には「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」（ルカ23章46節）という主の言葉がこだましています。また「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」（60節）という言葉には、主の「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」（ルカ23章34節）という言葉がこだましています。「ステファノは聖霊に満たされ」（55節）ていましたが、その聖霊とは「キリストの霊」であることが分かります。主を信じる者はそのようにして主の霊と結ばれています。私たちはキリストと結ばれて、神のみわざの確かな歴史を生きています。ステファノは「眠りについた」という言葉に注意しましょう。キリストと結ばれた者は「死んでも生きる」（ヨハネ11章25節）のです。（赤石純也）

テキスト 使徒言行録 7章54～60節

参照カテキズム 子どもカテキズム 問7～9、37、38

ウェストミンスター信仰告白 第18章 同大教理問答 問145

〔単元のねらい〕

教師を含めてわたしたちの信仰は、思弁的になってしまう恐れがある。特に子どもたちは、学校や社会の中であって、周囲にクリスチャンの少ない環境におり、信仰の確信が弱まれば、誘惑に従うこととの格闘に襲われる。だからこそ、信仰の確信が与えられることにより、試練にあっても、信仰によって乗り越えることが出来ることを伝えたい。

今日のテキストにおいては、キリストによる救いの喜びに満たされ、教会の仕事（執事職）が委ねられたステファノの信仰を取り上げる。彼は旧約の時代に生きて働く主を告白し、その同じ主による救いにあずかっている喜びに満たされている。それは神の国の希望に満たされているものであり、迫害によっても揺るぎのないものである。

「苦しい時でも、神さまによる救いを信じ、神さまの御言葉に従う信仰」

主イエスが十字架の死から三日目に復活され、後に天に昇られた後、使徒たちを中心とした教会では、神さまを信じる人たちが非常に増えました（参照2：41）。そのため十二人の使徒たちに代わって食事の世話をする人たちが七人選出されました（6：1－6）。その中の一人にステファノという人がいました。

ステファノさんは、キリストの十字架によってこそ救われることを信じて、神の御言葉にも忠実に、教会のためにも熱心に働いていたからこそ、教会での重要な働きに就くことがゆるされたのです。だからこそ、ステファノさんは、神さまによる救いの恵みと祝福に満たされ、人々の前でも、神さまを証ししていたのです（6：8）。その時、キリストの十字架の死と死からの復活を信じないユダヤ人たちが、ステファノさんを捕まえ、裁判にかけます（6：9－15）。

こうしてステファノさんは、キリストを主なる神さまとして信じていることで、人々の前で神さまを証しすることが求められます。ユダヤ人たちは、何とかステファノを有罪にして、殺してやろうと考えているのです。そうした中、ステファノさんは、恐ろしかったことでしょう。しかしステ

ファノさんは、主なる神さまが共にいてくださることを知っており、また信じていましたから、ユダヤ人たちの前で、主なる神さまのことを証します。それは、旧約の時代に、主なる神さまが働かれた証しです。主なる神さまはアブラハムをお選びになられ救ってくださったことに始まり、ヨセフの時代にエジプトに下ったこと、出エジプトのためにモーセが立てられたこと、主の奇跡により出エジプトが成し遂げられたこと、ヨシヤに受け継がれた信仰がダビデ、ソロモンの時代にも主の救いにより、彼らが主に従った歩みを行ったという旧約における主なる神さまの救いの全般に及ぶものでした（7：2－53）。

そして、ステファノさんの証しは、あわせて、どの時代にも、神さまの救い、神さまの愛を理解することが出来ず、主に逆らい続けるイスラエルの民がいることも語っていたのです。ユダヤの人たちは、そのことに怒りをぶつけます（7：54）。ユダヤ人たちの顔つきが変わり、ステファノさんは、殺されるかもしれないとも思ったことでしょう。

ステファノさんは、主なる神さまを裏切り、信仰から離れて、ユダヤ人たちに気に入られようと

したでしょうか。ステファノさんは、そのようなことはしませんでした。主なる神さまが聖霊をとおしてステファノさんと共にいてくださったからです。ステファノさんは、旧約聖書の時代にアブラハムやヨセフ、モーセたちを救いに導いてくださった神さまが天におられる状態を見たのです。この救い主である神さまこそ人の子であるイエス・キリストです。主イエスが私たちのために十字架に架かり死を遂げてくださったのです。そしてその方が、復活を遂げて、今、天におられるのです。そして主なる神さまは、天国における永遠の生命をお与えくださる力を持っておられるのです。こうした主なる神さまを、今ステファノさんは見ているのです。

そうであれば、どうでしょうか。今、ユダヤ人たちは激しく怒り、ステファノさんを石を投げつけ殺そうとしています。ステファノさんも、怖かったですでしょう。しかし、アブラハム、モーセ、ダビデを救いに導いてくださった主なる神さまが、たとえ地上で死を遂げて、キリストが復活し、天

国に入れられたように、復活して天国での永遠の生命が与えられ、神さまの栄光と祝福に包まれることをステファノさんは信じて、すべてを神さまに委ねたのです。

みんなも学校などのお友だちで、皆さんと同じように神さまを信じている人は少ないかもしれませんが。だから、神社やお寺に行って、「拝みなさい」と言われるかも知れません。しかし、旧約の時代のアブラハムやモーセ、ダビデを救ってくださった神さまは、ステファノさんをも救い、信仰を守ることをゆるして下さいました。その主なる神さまが、今も、天国におられ、私たちと共にいて下さいます。そして、信仰が守られるように見守っていて下さいます。どのようなことがあったとしても、キリストの十字架による救いを信じ、神さまのお語りくださる聖書の言葉に従うことができるように、神さまにお祈りしましょう。

(辻 幸宏)

[今週の暗唱聖句] ローマの信徒への手紙 5章2節

このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、
神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。



「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」

〈ねらい〉

周りの人々はいろいろなものを神様としているが、聖書に示された本当の神様を知ること、その神様のみを信じ従うことの大切さと喜びを伝えたい。

〈展開例〉

「おはよう！」ともちゃんは今日も元気に幼稚園に行きました。「ともちゃんおはよう！」お友達のゆうちゃんも元気です。ゆうちゃんが「ねえ、ともちゃん、良いものを見せてあげる。」とカバンに付けた赤い小さな飾りを見せてくれました。金色の糸で何か書いてあるきれいな飾りです。「あのね、昨日おばあちゃんが旅行のおみやげだよって買ってきてくれたんだ。これ、神様なんだよ。」「あ、ぼくだってそういうの持ってるよ、ほら！」みっくんもカバンについている飾りを見せてくれました。みっくんのは紫色でやはり金色の糸でなにか書いてあります。「お母さんがね、これ、ぼくが交通事故に遭わないようにぼくのこを守る神様だから、なくさないようにしなさいって言ってたよ。」「私も神様持ってるよ！」ななちゃんもカバンを持ってやってきました。ななちゃんのは金色の糸とオレンジ色の糸できれいな模様が付いた飾りでした。「きれいでしょ、パパが買ってくれたんだあ！」みっくんがいました。「ねえ、この中に何が入ってるか知ってる？ぼく知ってるよ、前に開けてみたんだ。あのね、中にはね、紙が入ってるんだよ。なにか書いてあってね、はんこが押してあったよ。」「へー、みっくんのは紙が入ってたの？私も見たことあるんだ、私のはね、なにか書いた木が入ってたよ。それが神様なんだよ。」ななちゃんが言いました。「ねえ、ゆうちゃんの袋には何が入ってるの？」「えー？分からない。」「開けてみて。」「開けても大丈夫かな？神様、怒らないかな？」「大丈夫だよ、開けてみて。」「うん！」ゆうちゃんが開けてみると、なにか書いてある紙と銀色の小さなお人形のような物が入っていました。「わー可愛い！これがゆうちゃんの神様なんだ！」「ねえ、ともちゃん、ともちゃんは

神様持ってないの？」「うーん、そういうのは持ってないよ！」「どうして？買ってもらえばいいのに。」「そうだよ。みんな持ってるんだから！」「うーん……」ともちゃんは困ってしまいました。だってともちゃんは教会学校で本当の神様は目には見えませんというお話を聞いたことがあったからです。ともちゃんはみんなに聞きました。「それ本当に神様なの？」

さあ、みんなはどう思いますか？（子どもたちと一緒に考えましょう）

*おばあちゃんやお父さんに買ってもらったと言っていました、神様は、お金で買うことが出来るのでしょうか？

*みんな神様を持っていると言いましたが、○ちゃんの神様、×ちゃんの神様など、神様はたくさんいらっしゃるのでしょうか？

*神様はカバンの飾りのような小さな袋のなかに入れることが出来るのでしょうか？

*紙や木やお人形は神様ですか？

本当の神様はただお一人です。お金で買うことも小さな袋の中に入れてしまうことも出来ません。燃えてなくなったり壊れたりする紙や木や人形は神様ではありませんね。本当の神様は目には見えませんが、いつも私たちと一緒にいて私たちを守っていて下さる方です。

ともちゃんは、教会学校で先生が教えてくれたことを思い出しました。そしてみんなに言いました。「わたし、そういうのいらない。だって、それは本当の神様じゃないから！」

〈お祈り〉

神様、いつも一緒にいて下さってありがとうございます。これから神様だけを礼拝することが出来ますようにお守り下さい。イエスさまのお名前によって。アーメン。

〈さんびかをうたいましょう〉

『プレイズワールド～子どもリビングプレイズ』
(いのちのこことば社) 4「ぼくの心の中が」

〈ねらい〉

ステファノの殉教の死は、キリストの福音を旧約聖書から筋道立てて明らかにしたにもかかわらず起こりました。人間の罪の恐ろしさを思うと共に、それを包み込むようなステファノの最後の言葉を子供たちに伝えたい。聖霊に満たされて、「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」(60節)と述べました。神の愛に満たされることの大切さを伝えましょう。

〈展開例〉

ステファノさんが、わたしにはイエスさまがいつも一緒にいてくださり助けてくださることを、大胆に語りましたときに、人々はステファノさんを殺そうとします。神さまを信じる心を明らかにしただけなのに……人々は寄ってたかってステファノさんを殺そうとしました。

ステファノさんの話を聞いた人たちは、「歯ざしりした」(54節)のです。心から悔しがっている姿が目に見えます。

人間の罪は、神さまの言葉が語られたときに、それを耳をふさいで聞こうとしないところに現れます。神さまの言葉など、どうでもよいと思う心です。ステファノさん一人が死んだところでどうなるのでしょうか。

インドの貧しい人々のために奉仕を続けたマザー・テレサは、あなた一人がどんなに努力しても、世の中から貧しい人々はなくなるのではないかと尋ねられた時、「今、していることは大海の中の水滴のようだわかっています。でもその水滴がなかったら、足りない一滴のために大海すらも足りないところがある。数がそろいのを待っている、数の中に道を見失ってしまって、

そのひとりの人のための愛と尊敬を表すことは、いつまでたってもできなくなるでしょう」と答えている。

成績や偏差値という数字によって人間が評価され、すべてのことが人間の力や、お金の力で解決できると信じられているような世界において、一滴の水も集まれば大海になるという確かな希望がなければ、世界平和という大きな課題に、自分の小さな力をささげていくことはできない。

たとえ私たちに世の中を変える力なくても、人を愛することは誰にでもできるはずである。たとえ僅かな献金でも、小さなボランティア活動でも、それが神のみわざのために用いられることによって、世の中を変える力となるのです。

〈お祈り〉

神さま、私たちがイエスさまの喜ばれることのために用いてください。そして、それがどんなに小さなことであってもやる勇気を与えてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈視聴覚教材〉

ステファノ殉教の絵。

〈御言葉の背景〉

教会はエルサレムで大きくなりましたが、依然として彼らの礼拝の場所は神殿でした。世界宣教へ出て行くためには、神殿中心の礼拝から脱却する必要があります。その神学的裏付けを見事な説教をとおして明らかにしたのがステファノでした。

〈分級メッセージ〉

☆ポイント聖句：使徒7：60

☆骨子：①ステファノの紹介②ステファノ逮捕の事情③ステファノの説教と殉教④世界宣教のはじめ、サウロ

☆例：使徒たちを助けてエルサレム教会の貧しい人たちの世話をしている人の中にステファノという人がいました。彼は、聖書にも大変詳しく、聖書のお話については使徒にひけをとりませんでした。また神さまからの賜物により、さまざまな不思議な業とするしを行ったので、多くの人々に人気がありました。そのことを面白く思わない人々が、「ステファノは神殿と律法を汚した」とうその証言者をたて、ステファノを逮捕することに成功しました。裁判の席で、律法学者たちはステファノに「おまえは本当に神殿と律法を汚したのか。」と聞きました。ステファノの顔はまるで天使のようでした。それは神さまが備えられた死を覚悟し、受け入れた人の安らかな表情だったのでしょう。ステファノは話し始めました。それは聖書のお話でした。ステファノは、アブラハム・イサク・ヤコブ・ヨセフ・モーセ・ダビデ・ソロモンと順序正しく、ポイントを押さえて、大変わかりやすく話したので、人々はステファノの話に静かに聞き入ってしまいました。ステファノは聖霊

の導きに従って真理を語りました。しかしまことの救い主を理解しない律法学者や祭司長たちを怒らせることになりました。「あなたがたはいつも聖霊に逆らっています。あなたがたの先祖が逆らったように、あなたがたもそうしているのです。」この言葉がステファノの口から出ると、人々の怒りは頂点に達し、ステファノを外へ連れ出し、石打ちにして殺してしまったのです。さらに、イエスの名を信じているものは全員逮捕して牢屋に入れるよう命令が下ったので、エルサレムの教会の使徒とその仲間たちはみんな外国へ逃げなければなりませんでした。

教会はもうばらばらになってしまったのでしょうか。いいえ、ステファノの死をきっかけに、使徒たちとたくさん仲間たちが外国でイエスさまを伝え、教会を建てることになったのです。ステファノは最期に「イエスさま、この罪を彼らに負わせないでください。」と叫び眠りにつきました。この祈りは、ステファノの殺害に賛成し、人々が脱いだ上着の番をしていたサウロのためにも祈られたのです。

〈展開の工夫〉

むごたらしい私刑の中であって、ステファノの死はなんと安らかであったことでしょうか。人は死んだらどうなるのでしょうか？御言葉によって整理しておきましょう。

- ①肉体はちりに帰り、霊魂はただちに神のもとに帰る。(コヘレト12：7)
 ②天には住む家が用意されている。(IIコリ5：1)
 ③死にもせず、眠りもせず、霊魂はただちにきよくされ、主イエスさまとともに住む(IIコリ5：8)

(ウ告白32章1節より)

〈ねらい〉

力強い神様の御業を仰ぐ。

〈展開例〉

1. 聖書をもう一度読む

2. 分かち合い

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

Q. エルサレム教会の七人の執事の一人ステファノは、不当にも逮捕されて、最高法院に連れて来られてしまいました。しかし彼は人を恐れることなく、大胆に説教しました。そしてイエス様のことを証しして殉教の死を遂げたのです。まず考えたいのは、何がステファノを、ここまで命がけにさせたかです。何故、ステファノは自分の命を捨てる覚悟で、イエス様を証したのでしょうか？人々がステファノに襲いかかるきっかけとなった56節の御言葉から、考えてみましょう。

→56節、『天が開いて、人の子が神の右に立っておられるのが見える』と言った。」人の子とは、イエス様のことである(55節)。イエス様こそ、神様の右におられる主、救い主であるから、ステファノは自分の命を賭けて証したのである。

Q. 聖霊に満たされてステファノが見たイエス様は、神の右に座っておられたのではなく、立っておられました。何故、イエス様は立っておられたのでしょうか？

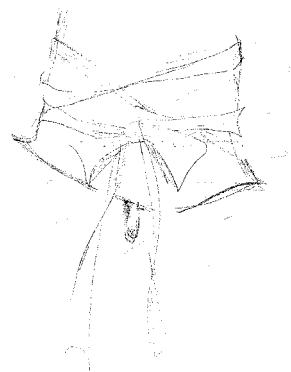
→今や殉教の死を遂げようとしている御自分の証人を天の栄光に迎え入れるため。ステファノはキリスト教会の殉教者の初穂であった。主イエス様がステファノの霊を天に受け入れたことは、彼に続く代々の教会、クリスチャンの迫害、殉教の際の慰めとなった。

Q. エルサレム教会にせっかく立てられた執事の一人ステファノは殉教の死を遂げてしまいました。そしてこの日、教会に対する大迫害が起こり、ほとんどの弟子達が各地に散ってしまうこととなったのです。教会がこれだけの目に遭ったのですから、ペンテコステの聖霊降臨から力強く進められていた神様の御業は、止まってしまったのでしょうか？

→実はそうはならなかったのです。ステファノはとても素晴らしい人で、彼を失ったことは教会にとって大きな損失だったでしょう。しかし神様は、ステファノの最後の祈り（「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」(60節))を聞かれて、彼に代わる新しいイエス様の証人を起こされるのです。その人物が誰であるかは来週学びます。それにしても、私達は本当に神様の力を信じているのでしょうか？神様の始められた力強い御業は何者によっても、決して阻むことはできないことを覚えたいと思います。そして私達の祈りも、大きな神様の働きの中でたしかに用いられるのです。この世界の中で今も神様が進めておられる力強い働きを信じ、私達もそれにお祈りによって参加してみましょう。

4. お祈り

神様の御業の進展のために。



テキスト 使徒言行録 9章1節～19節前半

〈復活の主イエスとの出会い〉

サウロ（ヘブライ名、以下、パウロと呼ぶ）は、復活の主イエスと出会う以前は、神の大義の下、エルサレムで、ステファノの殺害に加担し（8：1）、エルサレム教会の指導者や信徒たちを迫害していました（8：3）。パウロは、エルサレム教会を構成する家の教会の数々を荒らし、男女を問わず信徒を牢に投げ込む内に、教会への迫害の熱心さがいよいよ増し加わって、ユダヤ人社会の最高権威者・大祭司のお墨付きを得て、「なおも」（1）ダマスコへと迫害の魔の手を伸ばそうとしていました。ダマスコは、ローマ帝国の属州シリアの中にあり、エルサレムから242キロほど離れた重要な町で、ユダヤ人が大勢住んでいたと言われていました。そのダマスコへの途上、パウロは、復活の主イエスと出会ったのです。

パウロは、突然、まともに目も開けられないぐらいのまぶしい光に打たれ、呼びかける声を聞きました。これは、主なる神の顕現の現象です。この呼びかける声によって、パウロは、自分が今まで熱心に迫害して来た相手が、実際に誰だったのかを思い知ったのです（4～5節）。パウロは、教会の指導者、信徒を迫害することによって、実は、彼らの頭である主イエス御自身を熱心に迫害していたのです。それは、結局、主イエスをこの世へと遣わされた神御自身に対して反逆していたということです。パウロは、神への熱心さから、神を冒瀆するキリスト者たちを抹殺しようと意気込んでいたのですが、そうではなく、逆に神に反抗し、再び、主イエスを十字架につけて抹殺するような大罪を犯していたのです。パウロは、その大罪を思い知って、ダマスコの町で、三日間、悔い改めの断食をしました。

〈主イエスを迫害する者から、主イエスの御名を運ぶ器、“使徒”へ〉

パウロは、教会を迫害するためにダマスコへと意気込んで出かけて行ったのですが、実は、これも全て、主の御計画の下にあったことでした。主イエスは、彼をアナニアと出会わせて、彼を通じて御自身の御名を運ぶ器とさせるという御計画をお持ちだったのです。アナニアは、ダマスコに住むキリスト者でしたが、彼のことを後にパウロは次のように評価しました。『律法に従って生活する信仰深い人で、そこに住んでいるすべてのユダヤ人の中で評判の良い人でした』（22：12）。主イエスは、パウロを御自身の御名を運ぶ器、つまり、使徒とするために、予め、ダマスコの町にアナニアという信仰深い器を備えておられたのです。

アナニアは、幻の中で、主イエスから、パウロを訪問するようにと命じられました。しかし、彼は、最初、悪名高いパウロと接するのを恐れました。そんなアナニアに、主イエスは、御自身の御計画を示されて、さらに命じられました。「行け。あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。わたしの名のためにどんなに苦しまなくてはいらないかを、わたしは彼に示そう」。主イエスは、アナニアを通じてパウロを使徒の職務へと召し出されるのですが、パウロは何よりも異邦人への使徒として召し出されるのです（ローマ1：5）。そして、以前は、主イエスを迫害する者として、キリスト者を、そして、誰よりも主イエス御自身を苦しめていたのですが、今度は、主イエスの御名を運ぶ器として、自分自身が苦しむことになるのです。アナニアは、パウロへの恐れを主イエスへの信仰をもって克服して、パウロの所に行き、彼の上に手を置いて、洗礼を授けました。「目からうろこのようなものが落ち」たパウロは、苦しみをも堪え忍んで、主イエスの御名を異邦人へと運ぶ器、“使徒”の道をこうして歩み始めることになったのです。（長谷川潤）

テキスト 使徒言行録 9章1節～19節前半
参照カテキズム 子どもカテキズム 問29、34

〔単元のねらい〕

光の中で復活の主に出会うというサウロの回心の出来事は、特別な使徒を召し出すための神の特別な御業であった。生まれたばかりの教会にとっての迫害というピンチを、大伝道者の誕生というチャンスに変えられた神様の御業のすばらしさを伝えたい。そしてまた、神様のすばらしい御業は、パウロとまったく同じような仕方ではないにしても、私たち一人ひとりの歩みの中でも起こるといふことに子供たちの注意を向けたい。今も生きておられる主イエスに私たちも出会い、新しい歩みを始めることができる。キーワードは、御言葉、祈り、教会。

「どんな人でも変えられる」

パウロという人の名前を聞いたことがあるでしょうか。たくさんの人にイエスさまのことを伝え、教会を造った人です。聖書の中にある手紙をたくさん書いた人でもあります。このすばらしい働きをしたパウロが、昔はどんな人であったか知っているのでしょうか。パウロは最初からイエスさまを信じていたわけではありませんでした。むしろ、イエスさまのことがきらいで、教会をいじめる人でした。今日は、そのパウロがどのようにしてイエスさまを信じる人になったのかというお話です。

ここにはサウロという名前が出てきますが、これがパウロです。サウロはダマスコという町に行くところでした。そこにある教会を迫害するためでした。ところが、そのときイエスさまが現れたのです。光の中で、イエスさまが「なぜわたしを迫害するのか」と言われました。するとサウロは目が見えなくなってしまい、周りの人に手を引かれてダマスコに行きました。三日間もそのままであったようです。ところでそのダマスコの町にアナニアというクリスチャンがいました。彼のところにもイエスさまは現れ、パウロのところに行きなさいと言われました。アナニアはパウロという人がどんなにひどい人かを知っていたので、行きたくありませんでした。でも、イエスさまの御言葉に従って、パウロのところに行きます。そして、

パウロの上に手を置くと、パウロは目が見えるようになりました。パウロはすぐに洗礼を受けました。イエスさまを信じ、イエスさまに従う決心をしたのです。パウロはとても元気になりました。そして、イエスさまのことを伝える人になりました。

この時代、教会はまだ始まったばかりでした。だから教会のことをきらいな人もたくさんいました。きらいなだけではなく、いじめたり、教会をなくそうとしたりする人もいたのです。このままでは教会は本当になくなっていたかもしれません。でも、神さまはここで、教会の大きなピンチを、大きなチャンスに変えてくださったのです。パウロという迫害者を伝道者に変えてくださったのです。それは、パウロが自分でそうしようと考えていたことでもなく、また、周りにいた人がそうしようと考えていたことでもありませんでした。ただ神さまだけがこのことを考えておられ、実行してくださったのです。

そして、このことは私たちにも起こることです。パウロのときとまったく同じように、光の中にイエスさまが現れるということはないかもしれません。でも、イエスさまは私たちに御言葉を語りかけてくださっています。聖書を通してです。聖書を読むことによって、私たちもイエスさまの御言葉を聞くことができます。

また、パウロは目が見えなくなっていました。私たちは聖書を読んだからといって、そんなふうになることはないと思いますが、実は、このときパウロはただ目が見えなくなっただけではなく、祈っていました。何も見えない暗闇の中で祈っていたのです。このことは、私たちにとっても大切なことです。聖書を読んで、私たちは祈ります。目を閉じて、目が見えなくなったわけではないけれど、暗闇の中で祈ります。聖書から教えられた自分の罪を悔い改めて祈るということもあるでしょう。パウロの祈りはまさにそういう祈りであったと思います。祈りが、パウロという人を変えたのです。

そして、もう一つ大切なことがあります。それは、アナニアの働きです。パウロは、自分で三日間ずっと祈って、それで自分で目を開けて立ち上がったわけではありませんでした。アナニアがやはりイエスさまに導かれ、パウロのもとに来て、そしてパウロを助けてあげたのです。こういう人が私たちにもいるはずで、教会の人たちです。教会の人たちが、私たちを助けてくれるのです。

私たちもパウロと同じように、それまでの自分とは違う、新しい自分に生まれ変わることができます。イエスさまを知らない人から知る人に、イエスさまのことがきらいな人から大好きな人に、イエスさまに従わない人から喜んで従う人に、変わることができます。神さまにはその力があります。そしてそのために大切なことは、聖書、祈り、教会です。聖書を開くときイエスさまの御言葉が聞こえてきます。そうしたら目を閉じて祈ってください。すると、教会の先生やお友だちが助けてくれます。

今こうして教会学校に来ている私たちの中に

は、もうイエスさまを信じているという人もたくさんいると思いますが、一人一人がどのようにしてイエスさまを信じるようになったかはいろいろだと思います。生まれたときからお父さんお母さんがクリスチャンだったという人もいますし、お友だちにさそわれて教会学校に来たという人もいます。また、自分で行ってみたいと思って教会に来た人もいれば、最初は教会なんかいやだなあと考えていた人もいるかもしれません。でも、みんな同じように聖書を読み、お祈りをし、教会学校で先生やお友だちと仲よく過ごす中で、イエスさまを信じるようになりました。大切なことは、教会に来る前はどんな人だったかということではなく、今、イエスさまを信じるということ、そして、これからもイエスさまに従っていくということです。パウロも最初は教会を始める迫害者でした。そんなパウロをも、神さまは愛し、また特別な働きをすることができる人に変えてくださったのです。こんな私でも教会に来ていいのかなあと考えている人がいるかもしれません。そういう人こそ、教会に来て、イエスさまを信じることができます。

そして、もうずっと教会学校に来ていて、イエスさまを信じている人たちには、ぜひアナニアのことを見習ってほしいと思います。彼は最初、パウロという人がこわくていやでしたが、イエスさまの御言葉に従ってパウロのもとに行っただけです。ひょっとしたら来週、教会のことをきらっていた学校のお友だちが来るかもしれません。でも、そのお友だちも神さまに導かれてくるのです。アナニアのように、やさしく迎えてあげましょう。教会で、人は変わることができるのです。

(石原知弘)

[今週の暗唱聖句] テモテへの手紙一 1章15節

「キリスト・イエスは、罪人を救うために世に来られた」という言葉は真実であり、
そのまま受け入れるに値します。

〈ねらい〉

どんな人でも、主イエスさまに出会ったとき、その人は変わることが出来る。大人も子どもも、お友達も、自分自身も。み言葉の中で、日々の生活の中で、私たちに語りかけ、出会って下さる主の声をしっかり聞き、悔い改めることが出来る人にしていただきますよう。

〈展開例〉

お友達に「嫌い」と言われたことはありませんか？ どんな気持ちでしたか？（子どもたちの話を聞く）嫌いと言われると、悲しい気持ちになりますね。

パウロさんはイエスさまが嫌いでした。ちいさいときから聖書のお勉強をたくさんしていたのですが、イエスさまのことを知らなかったからです。そして、イエスさまは神様じゃない、イエスさまがよみがえったなんて嘘だと思っていました。ですから、「イエスさまは神様です。ずっと昔からみんなが待っていた救い主です。」と言っているクリスチャン（イエスさまを信じている人）も大嫌いでした。そこで、パウロさんは仲間を集めて「クリスチャンを捕まえて牢屋に入よう！」と言いました。パウロさんの心は意地悪な冷たい心になっていました。そして、あちらこちらの教会に行って、イエスさまを信じている人々を捕まえては縄で縛って牢屋に入れました。パウロさんは、それが神様の喜ぶことだと思っていました。

ある日のこと、パウロさんが仲間と一緒に「今日もクリスチャンを捕まえよう」と歩いていたとき、ふしぎなことが起こりました。突然強くまぶしい光がひかって、パウロさんの目が見えなくなりました。そればかりではなく、誰かの声が聞こえました。「パウロさん、どうして私をいじめめるのですか？」それはとても悲しそうな声でした。

パウロさんはビックリして「あなたはどなたですか？」と聞きました。すると、「私はあなたがいじめているイエスです。」とイエスさまがお答えになりました。イエスさまのお声を聞いたパウロ

ロさんは、イエスさまが神様だということがよく分かりました。そして意地悪で冷たかった心が、優しく温かい心になりました。

パウロさんは「イエスさまごめんなさい。」と心から謝りました。そしてクリスチャンを捕まえるのを止めたのです。そればかりではなく、自分が牢屋に入れられても、「イエスさまは。ずっと昔からみんなが待っていた救い主です。イエスさまを信じましょう！」と大きな声で世界中の人に知らせる人になりました。

イエスさまに出会ってイエスさまのお声を聞くと、どんな人でも変わることが出来ます。どんなに悪い子とをした人でも、イエスさまに出会うと、「イエスさま、悪いことをしてごめんなさい。悪いことは止めます。」と言える人に変えていただけなのです。わたしたちも、聖書のお話を聞いたり、お祈りしたりして心を静かにすると、イエスさまのお声を聞くことが出来ます。イエスさまのお声がよく聞こえるように、心の耳を澄ませましょう。

〈お祈り〉

神様、どんな人でもイエスさまに出会うと変わることが出来ることを教えて下さってありがとうございました。わたしたちも、心を静かにしてイエスさまのお声を聞き、いけないことをしたときには「ごめんなさい」と心から言うことが出来ますように、そしてイエスさまに喜ばれる人に変えて頂くことが出来ますように。イエスさまのお名前によっておささげします。アーメン。

〈お話のときに使うペープサートを作しましょう〉

一つ目は、パウロの険しい顔、目に鱗のような物がついた顔を用意して色を塗り、二つを背中合わせに貼って割り箸をつけてペープサートにする。もう一つは穏やかな顔と、凛々しい顔を用意して同じように作る。お話に合わせて使う。子どもたちも自分の険しい顔と穏やかな顔を作って、自分のお話を作ってみてはいかがでしょう。

〈ねらい〉

イエスさまを迫害するサウロ（パウロ）を選んで、キリストの福音を告げ広めようと言われた神さまの御力を覚えたい。

〈展開例〉

人にはイエスさまを信じる時があります。教会に行ってもなく信仰告白する人もいれば、長い求道生活を経てから洗礼を受ける方もいます。人それぞれに信仰を言い表すのにふさわしい時が与えられます。サウロさん（後のパウロ）は、甦られたイエスさまに出会って、すぐに信仰が与えられました。こんなに劇的な変化が一人の人に起きたのです。それも、これまではどちらかと言えば、イエスさまを信じる人たちを苦しめる立場にあったサウロさんが、全く信じる人に変えられたわけですから、これは驚きです。サウロさんは後で、わたしが救われたのは、罪人の中で、とても救われるはずがないと思われたわたしが救われることによって、神さまの力が現されるためでした、と言っています。

「回心」は、「改心」と読み方は同じですが、意味は違います。「改心」は、一時的に申し訳ないと思う気持ちのことです。サウロさんは、「回心」です。これは一回の決定的な心の変化です。サウロさんは、復活されたイエスさまに出会うことによって、イエスさまに背を向けていた生き方を、イエスさまの方に180度向き直ったのです。回心は、イエスさまの方に「回れ右」をすることです。

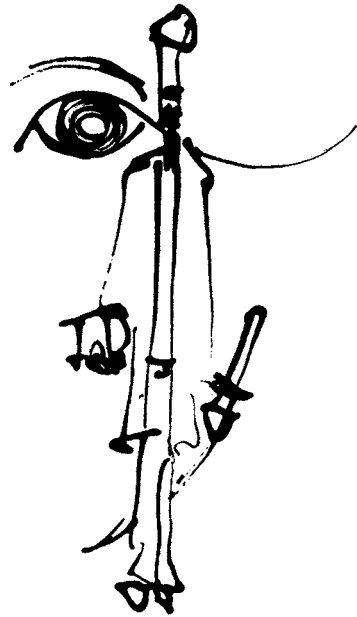
サウロさんは、パウロと名前を代えて、この後は、イエスさまの十字架と復活の福音を宣べ伝える伝道者として大きな働きをしました。まだまだ誕生して小さく弱い教会が、大いに励まされて成長していくために、神さまは、パウロという一人の人を用いてくださいます。パウロさんの働きが神さまに喜ばれたのは、神さまの言葉をよく聴き、

神さまに祈り、教会に生きる人たちによく仕えたからです。

私たちが全くパウロと同じようにとは生まれませんが、必ず、神さまは必要な力を与えて用いてくださいます。

〈お祈り〉

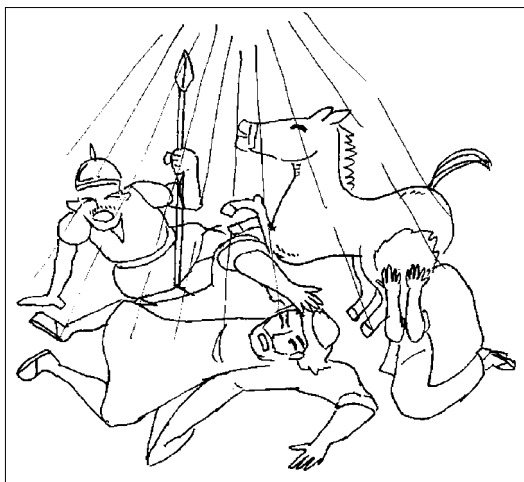
神さま、今も生きておられるイエスさまに私たちも出会い、新しい歩みをすることができますように。この神さまを礼拝するときを大切なときとさせてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



目からうるこのようなものが落ち。

〈視聴覚教材〉

ダマスコ途上の出来事の絵。



〈場面設定〉

キリスト者迫害の熱意に燃えたサウロが、護衛を引き連れて、山道を進んでいます。行き先はエルサレムから200キロ以上も離れたダマスコです。こんな遠くまでキリスト者を追ってくるほど、サウロの迫害心は徹底していたのです。

〈分級メッセージ〉

☆ポイント聖句：使徒9：5「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。」

☆骨子：①サウロについて②ダマスコ途上での復活の主との出会い③神に向き直ったサウロの心

☆例：ステファノの殺害に賛成していたサウロという青年は律法学者で、イエスとその弟子たちを激しく憎んでいました。イエス・キリストの復活は弟子たちが流したうそであるときめつけていました。そしてサウロはキリスト者たちをどんどん捕まえて、牢屋に入れていました。サウロという名はすべてのキリスト者たちに恐れられました。ある日サウロはエルサレムから遠く離れたダマスコという町にイエスさまを信じる人々を捕まえに行きました。しかし、その途中、天からの光があたり一面を照らしたので、サウロとその部下たちは倒れてしまいました。

そして天から声が聞こえました。「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。」サウロました。「あなたはどなたですか。」「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。」よみがえって天にのぼられたイエスさまが、天からサウロかけたのです。サウロくりしました。本当に復活しておられたとは！この方こそ神の子だったんだ。ああ、自分はなんて悪いことをしていたのだろう……。サウロ見えなくなりましたが、3日間飲みも食べもせず、ただひたすら悔い改め、祈っていました。そしてダマスコでアナニヤというイエスさまの弟子に祈ってもらって、聖霊に満たされ、目からうろこのようなものが落ち、サウロは見えるようになりました。ただ見えるようになったのではなく、本当のことがわかるようになりました。その後はサウロは、イエスこそメシアであると人々に伝える人に変えられたのです。

〈展開の工夫〉

サウロについて調べましょう。



〈ねらい〉

復活の主の御力によって、新しく生かされる。

〈展開例〉

1. 聖書をもう一度読む

2. 分かち合い

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

Q. 迫害者サウロにダマスコ途上で何が起こりました。彼の人生を根本的に転換した、その出来事は何ですか？

→復活の主イエス様が彼に現れた。

Q. 「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。」という御言葉を聞いて、サウロは何を悟ったでしょうか？

→自分が迫害していたクリスチャン達の信じていることが正しかったこと。すなわち、イエス様は十字架にかけて復活した後、天に上げられ、神様によって、主、救い主として公けに立てられた。そして神様とそのキリストに対して敵対し、反逆する大罪を犯したということ。

Q. このサウロは、後に異邦人の使徒と呼ばれたパウロです。神様は教会の迫害という危機において、迫害者サウロをキリストの使徒に変えるという、人の思いを越える御業をなしてくださいました。このような神様の力強い御業を阻むことのできる者は誰かいるのでしょうか？

→誰もいない。神様の御業は、人が思いもよらなかった驚くべき出来事も起こしつつ、前進して

ゆく。

Q. 復活の主イエス様がこのように呼びかけて下さるのは、サウロだけでしょうか？

→そうである。しかし超自然的現象を抜きにすれば、そうではない。今、キリストの話に関心を抱き、祈れる心が与えられていることこそ、復活の主イエス様の働きの何よりの証しである。

Q. 復活の主イエス様が、今も私達に働いて下さるのが事実であるなら、それはどのような仕方によるのですか？

→イエス様のことを証しする聖書の話を書くことや、読むことを通して、私達に今もイエス様は語って下さる。

Q. サウロの回心と使徒への召しは、同時に起こりました。それは彼の全生涯をかけて、キリストの使徒としてイエス様の証しに生きることでした。それではイエス様は、神様の大きい救いの歴史の中で、私達にどんな使命を委ね、どのように生きてゆきなさいとおっしゃられるのでしょうか？ イエス様は無駄なことはしません。イエス様を信じる人に、いらない人間はいないのです。必ずその人だけにしかできない使命が準備されているのです。無目的で無為に人生を費やしてしまわないために必要なことですので、是非、このことを真剣に祈って考えてみてください。

4. お祈り

復活の主の語りかけを、聖書を通して聞くことができるように。

自分に与えられた使命を教えて下さるように。

テキスト マラキ書 3章19～24節

(1) 旧約聖書最後の預言マラキ書。イスラエルは捕囚から解放され、すでに神殿再建も終わった。しかし礼拝は力を失い、祭司たちは神の御旨にかなわず、社会は道義を失っています。神はイスラエルに厳しい審判を予告せねばなりません。

にもかかわらず、イスラエルへの神の愛は失われていません。神は契約への真実を保ち、その救いのために、確かなご計画をもっておられます。「わたしはあなたたちを愛してきた」(1章2節)という御言葉は、神の痛切な告白です。

(2) この神の愛と契約への熱意が、「主の日」到来の約束を支えているのです。「見よ、その日が来る」(3章19節)。旧約最後の預言として、マラキに託された「主の日」待望の使信は、単純でなく重層的です。

一方で、主の日は厳しい審判であり、不信の民を根こそぎにします。他方、「わが名を畏れ敬うあなたたち」への約束は、癒しと喜びをもたらすのです。「わたしが備えているその日に、彼はわたしにとって宝となる」(3章17節)とあるように、「主の日」は、待ち望みつつ信じる民が「宝」として発見される喜びの日です。

(3) 他方で、「主の日」は「義の太陽が昇る」ことによって、イスラエルと世界を覆う闇を光に変えます。義は、神のもたらす命と救いだからです。義の太陽から伸びる「翼」(20)は、太陽の放つ光線でしょう。その光は、病む者を「いやすか」を宿しています。

神への信頼をこめて、義の太陽を迎えるまことの「イスラエル」は、大きな喜びを経験するでしょう。寒さに震えながら夜の「牛舎」で忍耐した「子牛」たちは、明るい恵みの草原に解き放たれ、「踊り出て跳び回る」のです(同)。まことの救いである「義の太陽」(イエス・キリスト)の光を浴

びる信仰者の喜びです(使徒3章6～8節参照)。

(4) 義の太陽の出現に、どのように備えるのでしょうか。待降節に生きる私たちの祈りと課題がそこにあります。

マラキ時代のイスラエルは、神の愛への信頼を失い、神が「父」となってくださるほどの恵みの「契約」をみずから反故にしました。そこで主なる神は警告します。「わが僕モーセの教えを思い起こせ」(22)。神がモーセを通して与えた契約の恵みを「思い起こす」のです。個々の律法を行うことより、もっと重要なことは、神との契約に立ち返ることです。

思い起こす(想起)。それは聖餐の礼典で繰りかえし求められる、キリスト者の責任です。待降節の今、既にも実現している贖いの恵みを、新たな経験として「想起」することは、全てのキリスト者の喜びです。すでに来ている恵みを、来らんとする恵みとして待望する。その時、繰り返されるクリスマスの暦は、過去のどの年にもまさる救いの追体験を生み出します。

(5) 「父の心を子に、子の心を父に」(24)は、契約への真実な立ち返りを促す言葉とされます。神関係のねじれが、父一子の世代間の断絶を生む根本的な原因でもあります。

このような神への転換(転向)を促すために、神は、エリヤを主イエスに先立って送られました。主イエスは、洗礼者ヨハネこそ、そのエリヤだと語られます(マタイ11章14節)。

ヨハネが「主の日」到来の門口に立ってキリストを指さしたように、教会は、キリストにある終末を指さす証人として、待降節の中に立っています。「転向して神に向かえ」と叫びつつ。

(小野静雄)

テキスト マラキ書 3章19～24節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問31

〔単元のねらい〕

神は私たちの思いを遙かに越えて、私たちを深く愛しておられる。だが、その愛を私たちはなかなか信じ切ることができない。そのような私たちを見捨てない神は、御子イエス・キリストを「義の太陽」として昇らせて、私たちの罪を赦し、癒そうとなさる。そのために預言者エリヤを遣わし、モーセの教えを思い起こさせようとしてくださる。その教えの中に、神の愛が溢れるほど込められているからだ。今まで、どれほど深く強い愛をもって、神が私たちのことを愛してこられたか、また今も愛して下さるか、それを子供たちと共に味わいたい。

「義の太陽の下、子牛たちよ、喜び踊れ！」

皆さん、おはようございます！ 今日、教会に来てくれてありがとうございます。神様もきっと喜んでくれていると思います。今日も一緒に神様の御言葉を耳を傾けましょう。

さて、教会では、今日から「アドベント」と言って、クリスマスを楽しみに待つ一ヶ月が始まりますが、ここで皆さんに一つ簡単なクイズを出したいと思います。クリスマスは何月何日でしょうか？そうですね、クリスマスは12月25日です。でも、どうしてクリスマスが12月25日なのか、知っていますか。それはイエス様の誕生日だからですね。しかし、もう一つ大切な理由があります。ちょうど12月25日頃というのは、一年で一番太陽が沈むのが早い時期ですね。みんなも外で遊んでいると、夏なんかには比べると、すぐ暗くなってしまいますね。そのように、冬になって12月のクリスマスの頃になると、太陽が一年で一番早く沈んでしまうのです。それで、昔の人たちは、このクリスマスの時期を「太陽の誕生日」としてお祝いして、太陽の神様がもう一度私たちを照らして、恵んでくれるようお願いをしたのです。そうやってみんな、太陽を神様として拝んでいたんですね。しかし、キリスト教が広まって、イエス様だけが本当の神様、救い主ですよ、ということをとくさんの人たちが信じるようになって、イエス様を信じてクリスチャンになった人たちは、

イエス様こそ本当の太陽だ、こう思うようになったのです。そして、今まで12月25日を「太陽の誕生日」としてお祝いしていたのを止めて、「本当の太陽であるイエス様の誕生日」としてお祝いするようになったのです。それが、いま私たちがお祝いしているクリスマスなのです。

でも、「イエス様が私たちの本当の太陽だ」というのは、どういうことなのでしょう。先ほど一緒に読みましたマラキ書3章20節には、こう書いてあります、「しかし、わが名を畏れ敬うあなたたちには、義の太陽が昇る。その翼にはいやす力がある。あなたたちは牛舎の子牛のように、躍り出て跳び回る。」ここには「義の太陽」という言葉が出てきますね。イエス様は義の太陽なのです。「義」というのは、簡単に言うと「私たちを救う」ということです。つまり、イエス様は私たちを救う太陽として来て下さる、ということです。

みんな、太陽の光を浴びると気持ちがいいですね。嫌な気分の時とか、気持ちが落ち込んでいる時に、太陽の光を浴びると、不思議と心も体も何だか元気になってきますよね。それと同じように、いえそれ以上に、イエス様は皆さんを照らして、沈んだ気分や悪い心を癒してくれるお方なのです。私たち人間は、先祖アダムにあって神様に罪を犯して墮落してしまいました。神様から離れ

て、神様のことなんか知らない、こう言って神様に逆らって歩んでいます。でも、神様はそんな私たちを決して見捨てずに、今までも深く愛し続けてくださいました。今も皆さん一人一人のことを心から愛しておられます。

ですから、皆さんには、この神様の、太陽のように光り輝く暖かな愛をたくさん浴びて欲しいと思います。そうしたら、皆さんは聖書に書いてあるように、牛舎から飛び出して跳び回る子牛のように、本当に元気に生きることができるのです。牛舎というのは、要するに牛小屋のことですね。寒い日々が終わり、暗い夜が過ぎて、太陽が皆さんと空に輝いた時、子牛が牛小屋から飛び出して、元気に跳び回るように、皆さんも、神様の愛の太陽をいっぱい浴びて、跳び回るほど元気になるってほしいと、先生は願っています。

皆さんは、今日までお父さんやお母さんの愛をたくさん受けて、育ってきたことと思います。でも、それ以上に神様は皆さんのことを愛してくれています。お父さんやお母さんだって人間ですから、いろいろ忙しくて大変で、みんなのことを構ってくれないことがあるかもしれません。でも、そんな時でも、神様だけはみんなのことを構って下さるのです。皆さんの面倒を見てくれるのです。みんなのことだけじゃなくて、みんなのお父さんやお母さんのことも構って面倒見てくださるんです。だからこそ、この神様の愛を教えてくださいましたイエス様は、私たちみんなの本当の太陽なんです。

太陽は、夜になったら沈んでしまいます。でも、イエス様という本当の太陽は、夜でも沈みません。いつも、みんなのことを照らして、傷ついた心や悪い心を癒して下さるのです。20節に「その翼にはいやす力がある」と書いてありますが、この翼というのは、太陽の光のことです。昔の人は、太陽の光を鳥の翼みたいなものだと思っていまし

た。それは、親鳥が子供をその翼で守って癒してくれるように、太陽はその光で私たちに照らし暖めて、癒してくれるからです。それと同じように、イエス様は大きな翼で私たちを守って、太陽よりもまぶしく暖かい光で私たちに癒して下さるので

す。でも、こんなにもイエス様は皆さんのことを愛しているのにも関わらず、「神様が僕のこと私のことを愛してるなんて嘘だ。愛してくれてるなら、証拠をみせてよ」こう思ってしまう人たちもいっぱいいるんですね。とっても悲しいことです。聖書は19節でこう言っています、「高慢な者、悪を行う者は、すべてわらようになる。到来するその日は、と万軍の主は言われる。彼らを燃え上がらせ、根も枝も残さない。」そういう人は、わらが火で燃えてしまうように、燃やされてしまう、というのです。とっても恐いことです。

ですが、そんな人のことも神様は見捨てていません。神様は繰り返し、「私が今まできみのことをどんなに愛して大切にしてきたか、思い出してごらん。どんな時も、わたしはきみこのことを見捨てたりはしなかったのだよ」こう語りかけてくださるのです。そのために、神様は22節で「わが僕モーセの教えを思い起こせ」と言われるのです。そして、モーセの教えを思い起こすことができるように、神様は預言者エリヤを遣わす、と言われました。その約束の通り、神様は預言者エリヤを遣わしてくださいました。それが、バプテスマのヨハネです。このヨハネのお陰で、たくさんの人たちが神様のところに帰って帰ることができました。神様の深い愛が彼らの心に届いたのです。

私たちも今日、こんなにまでして愛してくださいました神様の深い愛を、一緒に味わいたいと思います。太陽の光のように私たちに照らし、罪を赦して癒してくださいましたイエス様の豊かな愛に、心から感謝したいと思います。(梶浦和城)

[今週の暗唱聖句] マラキ書 3章20節

しかし、わが名を畏れ敬うあなたたちには、義の太陽が昇る。

〈ねらい〉

神さまの深い愛が、すべての人に、そして今も私たちに注がれていることを知る。神さまの愛、救い主イエス・キリストを喜んで待つ。

〈展開例〉

みなさんはひとりでお留守番をしたことがありますか？ 私がみなさんくらいの頃、お留守番がとても嫌でした。ひとりきりで居るのはつまらないし、何より寂かったのです。それにもし、そのお留守番が暗い夜のことだったらどうでしょう。ひどりは怖いし、はやく誰か来て欲しい、はやく明るくなって欲しい、と思います。あたりが暗くて寂しい時、灯りが見えるとホッとして安心しますね。そして自分の大好きな人が一緒に居てくれたら、とても心強く感じます。

神さまは、ずっと昔から私たちを愛してくださっていました。でも、私たちには自分勝手な心があるので、好きなことや楽しいことばかりしたが、神さまのことをすぐ忘れてしまいます。神さまを忘れるということは、私たちをつくり、生かして下さるかたから離れてひとりぼっちになるということです。ひとりぼっちでは、嬉しい時に一緒に喜んでくれる人もなく、困った時に助けてくれる人も居ないのです。まるで真っ暗な場所にひとりきりで居るのと同じです。でも神さまはこう言ってくださいます。「わたしのことを思い出しなさい。いつもあなたと一緒に居ますよ」

今日の聖書には、「義の太陽」という言葉がでてきます。太陽とはお日さまのことです。寒い冬、お日さまの光は暖かで、光にあたると冷えた身体も温まり気持ちが良いですね。明るい朝が来るととても元気が出ます。お日さまが誰のところも同じように光を照らしてくれるように、神さまの愛は私たちみんなに注がれています。そして、ひとの心を暖かくして元気づけてくれるのです。

神さまの愛とはイエス様のことです。神さまは私たちにたったひとりのお子のイエス様をおくつ

て下さいました。イエス様をお迎えする時、私たちの心は明るくなり、嬉しく元気に躍ります。そのイエスさまのお誕生祝うクリスマスをみんなで楽しみに待ちましょう。

〈いのり〉

神さま、いつも一緒にいてくださってありがとうございます。そのことをどうか忘れずにいることが出来るようにしてください。イエスさまのお名前によってお祈りいたします。アーメン。

〈クリスマス飾りを作る〉

ステンドグラス風壁飾り

○用意するもの

- ・油性ペン・透明ビニール袋・ボール紙などの厚紙（ビニール袋の一回り小さなサイズ）・セロハンテープ・アルミホイル（銀紙）

○作り方

- ・厚紙をビニール袋の中に入れる。
- ・黒の油性ペンでクリスマスに関係のあるものを描き、塗り絵のように色を付ける。
（絵が自分で描けない子には、イラストのコピーを使うと良い）
- ・厚紙を一旦取り出して、アルミホイルを厚紙全体を覆うように巻いて再び袋の中に入れ、袋の口を裏に折りテープでとめて出来上がり。（アルミホイルは軽く丸め、しわを着けて伸ばしてから使うのもよい）



〈ねらい〉

イスラエルの民たちが、礼拝にも社会生活にも力を失い、神さまの御心を見失っているときに、神さまは主の民を厳しく戒めながらも、神さまの愛は、決して消え失せることはありませんでした。主の日の意味する神の裁きの面と宝とされ義の太陽が昇るようにされている幸いと喜びを伝えたい。

〈展開例〉

「主の日」は、神さまの言葉や御心に従わない者には、たいへん厳しい審判のときです。それに引き換え、いつまでも神さまを信じて恵みを待ち望む者には、「宝」として発見される喜びの日です。この宝物は、他の人からすればたいしたものではないかもしれませんが、主を信じる人にとっては、神さまの方が、「あなたはわたしの宝物だよ！」と言ってくれることはかけがえのないことです。

それだけでなく、主の日は、「義の太陽が昇る」ときです。イスラエルや私たちや世界を覆っ

ています暗闇を光に変えてくださいます。その光は、病氣の人を癒す力さえ持っています。

まさに、私たちの救い主であられるイエス・キリストは「義の太陽」として私たちのところに来てくださいました。来てくださっただけでなく、「父の心を子に／子の心を父に向けさせる」と言われています。このことは、私たちに「心の向きを変えて神さまの方に向き直りなさい」と指し示すことを意味しています。

クリスマスの季節は、お友だちにも、イエスさまのことを紹介するいちばんよい季節ではないでしょうか。神さまに祈りつつ、お友だちに、「神さまの方をむいてみませんか」に話ることができるようにしましょう。

〈お祈り〉

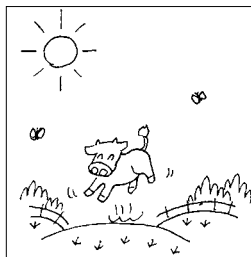
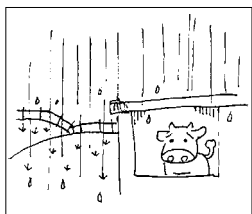
神さま、私たちのためにイエスさまを送ってくださいありがとうございます。イエスさまのことをお友だちに話ることができるように聖霊の力を与えてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



義の太陽が昇る。

〈視聴覚教材〉

雨の牧場、晴れの牧場（喜ぶ子牛）。



〈御言葉の背景〉

マラキは、B.C. 515年の神殿再築とB.C. 458年のエズラの祭儀改革の間に活動した預言者と言われています。（『旧約聖書の預言者たち』雨宮慧著P352）マラキは、礼拝を軽んじ、神を侮り、道徳的に乱れたイスラエルの人々に対して、さばき、悔い改め、そしてメシヤの出現について預言しました。

〈分級メッセージ〉

☆ポイント聖句：マラキ3：20「しかし、わが名を恐れ敬うあなたたちには、義の太陽が昇る。その翼にはいやす力がある。」

☆骨子：①導入（太陽の恵み）②イエスさまの光に照らされることの安心、喜び

☆例：最近どんどんお日様が出ている時間が短くなりました。夕方5時になるともうほとんど外は真っ暗です。夏でしたら7時くらいまで外で遊べたのに……。太陽はわたしたちに光をもたらします。雨上がりの時、雲の切れ目から太陽の光が差し込む光景はとても美しいですね。また寒い冬でも昼は太陽の光に照らされてあったかいですね。マラキという預言者は、やがてこられる救い主イエスさまを太陽にたとえ、その出現を預言しました。「義」とは「神さまの正しさ」や「救い」を意味する言葉です。そして太陽の光を「翼」にたとえました。イエスさま

は親鳥がその翼でおおってひなを守るように、わたしたちを守ってくださいます。イエスさまはかつて弟子たちに「昼間のうちに、歩けばまずくことはない。」（ヨハネ11：9）と言われました。イエスさまと一緒に、イエスさまの光に守られて、安全に歩くことができるという意味です。イエスさまと一緒に歩むことは、ちょうど、雨の間牛舎で退屈していた子牛が、雨が上がり、顔を出した太陽のもとで嬉しそうに緑の牧場をかけめぐるといった喜びがあります。今日からクリスマスまでの間、義の太陽であるイエスさまの誕生を祝う備えをしましょう。

〈展開の工夫〉

“預言の言葉をさがせ！”：「鉢植えの下を探せ」「ホワイトボードの裏を調査せよ。」「前から○列目で右から2脚目のイスの裏を調査せよ」などの指令書を用意。それぞれの場所にあらかじめ、メシア預言が記された紙を貼っておく。見つけた預言の言葉を発表し、先生が説明する。

〈参考〉

太陽に翼というイメージは、古代エジプトの神殿に翼を持った太陽が描かれているところから来ているといわれます（「有翼太陽円盤」下図参照）。これは異教の太陽神を表すものですが、マラキは偶像の神々に対抗して主イエスを「義の太陽」と



表現したのかもしれませんが。（日の丸も日本の太陽神をかたどったと言われています。）人間の欲望を第一とし、創造主を忘れ、豊かさや快適さを追求してやまない現代社会にあって、太陽ではなく、太陽を造られた方、富ではなく、富をもたらす方に、子供たち一緒に目を向けることができるようクリスマスを企画したいものです。

〈ねらい〉

救い主を待ち望む。

〈展開例〉

1. 聖書をもう一度読む

2. 分かち合い

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと思いを動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

Q. 今日からアドベント、待降節に入りました。アドベントとは「到来」という意味です。誰かがやって来るのです。誰が来るか？それはイエス様です。アドベントは、主イエス様の二重の到来を覚えて過ごす期間なのです。では、イエス様の二つの到来とは何でしょうか？

→一つは、約2000年に、十字架の上で私達の罪を全部身代わりに背負って処理して下さるために、救い主として生まれて下さったこと。二つ目は、やがて世の終わりに、私達の救いを完成するために再び来て下さること。

Q. 旧約最後の書であるマラキ書は、神様から遣わされる救い主の訪れを告げています。神様に対する罪の刑罰としてバビロンに捕らわれていましたが、この当時はすでに約束の地に帰り、神殿などの再建作業も終わっていました。しかし肝心の神様に対する心がどうなっていたのでしょうか？ 1:6、7と3:14から答えて下さい。そして神様を信じる民の生活の有り様を、2:14、3:24から答えて下さい。

→祭司が神様を軽んじ、正しい礼拝が捧げられないようになっていた。民は神様に仕えることをむなしいこととしていた。人間同士の関係も、

離婚によって夫婦関係が壊れ、親子関係も破綻していた。社会の基盤である家族相互の関係が崩れていたために、乱れていた。

Q. では、正しい神礼拝が捧げられず、社会が乱れていた当時、神様を信じる真の信者達はなくなってしまっていたのでしょうか？ 3:16を見て、答えて下さい。

→主を恐れ敬う者たちが残っていた。

Q. 神様は預言者マラキを通して、「高慢な者、悪を行う者」には何をなさると警告しておられますか？「わが名を恐れ敬う」者には、どういうことを約束して下さっているのでしょうか？ 3:19、20節から答えて下さい。

→神様に逆らう者達は、神様の怒りの裁きによって滅び、そのような者達の中で、なお御自分を信じる信仰を持ち続けている者達には、義の太陽が昇ると約束されている。

Q. 「義の太陽が昇る。その翼にはいやす力がある。」とは何を意味しているのでしょうか？

→真の信仰者が与えられる、救い主イエス・キリストにおける神様の救いといやし。

Q. 神様はエリヤを遣わす預言に続いて、「わたしに来て、破滅をもってこの地を撃つことがないように。」とおっしゃっておられます。神様の御心は、御自分に背く者も悔い改めて救われること、そして御自分を畏れる者達が、救い主イエス様を待つ信仰をしっかりと持ち続けることなのです。

4. お祈り

主イエス様の成し遂げられた救いと再臨を覚えて。

テキスト ルカによる福音書 1章26～38節

概観

最初に状況説明があり、そのあとで天使とマリアの長い会話が続きます。34節を軸として、「神」と「聖霊」、「いと高き方の子」と「聖なる子」、「マリアの身ごもり」と「エリサベトの身ごもり」、「恐れるな」と「出来ないことはない」という前後の対応関係が見られます（告知→反論→説得）。また六ヶ月目とあるとおり、このマリアへの受胎告知は、その前のザカリアへの受胎告知の繰り返しとなっています。ルカによる福音書のこの箇所は、ヨハネの誕生告知、イエスの誕生告知、エリサベトとマリアの出会い、ヨハネの誕生、イエスの誕生というように、二つの出来事の繰り返しと結合という形をとっています。また、旧約聖書を色濃く感じられる数々の引用（例えばマリアへの受胎告知と、ハガルへの受胎告知（創世記16:11）の類似や、イザヤ預言（7:14, 9:6）など）によって、旧約とのつながりが感じられます。

ダビデ家

最初の状況説明においてマリアの立場、すなわちダビデ家のヨセフの婚約者でおとめであったことが告げられたのは大切なことです。それは、主イエスのご生誕こそ、旧約における神とその民との契約の成就であり、預言者に与えられた多くの預言の実現であることが明らかになるからです。

天使の約束とマリア

マリアはガブリエルから四つの約束をいただきます。(1) 男の子を得る。(2) その子は神の子である。(3) 彼はダビデの王位を永遠に受け継ぐ。(4) その誕生は聖霊の臨在によってもたらされる。以上はザカリアに与えられた言葉と似ています。そして、彼女もまたザカリア同様、このみ告げを受け止め切れません。合理的な理由によって反論しています。男性を（性的）に知らない以上妊娠もないということです。しかし、ガブリエルは先立

つエリサベトを例にあげ、「神に出来ないことは何一つない」と告げます。この言葉は創世記18:14で主のみ使いがアブラハムに告げた言葉をほぼそのまま繰り返しています。また、翻訳の可能性としまして「こと」と訳されましたところは「言葉」とすることも可能です（すぐあと38節ではマリアの台詞として「お言葉通り」とあり、これが同じ単語）。その場合には「神からのお言葉は実現しないことなどありえない」と訳することも可能です。そうであれば、ガブリエルのこの一言には直前の出来事であるエリサベトに現われた神の恵みという具体的な例のみならず、創世記から預言者に与えられた啓示まで続くすべての神からのお言葉を含むかもしれません。

信じたマリア

マリアは常に信心深く（39節）思慮深い（29節）女性として描かれていますが、その彼女に信仰告白を促したのはガブリエルでした。ガブリエルの言葉を受け、マリアは「お言葉通りに、この身になりますように」とはっきりと信仰を表明します。自分の体に神の御業を受け入れるということは、自分のすべてをご自由にお使いくださいというのと同じです。教職者を献身者ということがありますが、マリアも全く自分の身をささげました。さらにマリアは自分を「はしため」といっています。普段あまり使われない言葉ですが、卑しい女、女奴隷といった意味です。ただし、それは、主人のご機嫌取りをする人ではありません。詩編123:2では「御覧ください、僕が主人の手に目を注ぎ、はしめが女主人の手に目を注ぐように、わたしたちは、神に、わたしたちの主目に目を注ぎ、憐れみを待ちます。」とあります。はしめとは神からの憐れみに生きる存在です。そして永遠の王である主イエスは、専制君主ではなく、人々に仕えてくださる王です。（杉山昌樹）

テキスト ルカによる福音書 1章26～38節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問22

〔単元のねらい〕

自分を「身分の低い、この主のはしため」(1:48)と呼ぶマリアが救い主の母として選ばれた。それは救いがある人々のところにまでもたらされること、「神にできないことは何一つない」(37)ことの証明であった。それゆえ「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる」とのあいさつはマリアひとりにとどまらず、わたしたちのひとりひとりにも語りかけられている。主イエスのみ言葉とみ霊により、わたしたちもインマヌエルの祝福を受ける。その喜びを分け合いたい。

「祝福のあいさつ」

イエスさまのお誕生を待ち望むアドベントの時を過ごしています。救い主が、約束のとおりになされたところに来てくださいます。その喜びを、今年もともにわかちあいましょう。イエスさまをお迎えるにあたって、わたしたちの心をふさわしくとのえましょう。

さて、今週はイエスさまのお母さんになったマリアのお話です。マリアはどんな人だったのでしょうか。イエスさまのお母さんになる人として神さまに選ばれた人ですから、さぞかし身分の高い人だったのだらうと思いますか。

けれどもマリアは、どこにでもいる田舎の、十五才くらいの少女でした。ほんとうにこの世にあっては目立たない、ふつうの女の人を神さまは救い主の母となさったのです。神さまのなさることは、人の目には不思議です。

けれども、神さまがマリアをイエスさまの母となさったことには、意味があったのです。それはイエスさまを通してもたらされる救いの喜びは、この世のどのような人のところにも届くということです。マリアが高貴で立派な人であったなら、イエスさまの救いはそのような人々、ごくかぎられた人々のものだけになってしまいます。けれども神さまは、救いの喜びをこの世にあって貧しい人々、身分の低い人々、苦しめられている人々にも分け与えるために、あえてマリアをイエスさまの母としてお選びになったのです。それは、わた

したちのひとりひとりのところにもクリスマスの喜びがもたらされたということです。とても素晴らしいことです。

さて、あなたがイエスさまを身ごもることになるという知らせは、前もって天使ガブリエルを通してマリアに知らされました。天使は「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる」(28)とマリアにあいさつをして、そして「あなたは身ごもって男の子を産む」(31)と告げました。この男の子とは、神の子イエスさまです。

このお告げを聞いたマリアは、はじめは恐れ、とまどいました。神さまが自分になさろうとしていることに、圧倒される思いがしたのです。

マリアは天使にこたえました。「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに。」(34)

マリアはこのとき、大工ヨセフと結婚の約束はしていましたが、まだ結婚はしていませんでした。結婚をしないのに身ごもるということはありません。それで、マリアは天使の言葉にびっくりしてしまったのです。

そしてもうひとつ、神の子の母として選ばれるのはもっと高貴なお方がふさわしい。わたしのよう貧しく、身分の低い者がそのような者となることはとても信じられない、そのように思ってマリアは気後れし、とまどったのです。

けれども天使はマリアに告げました。これは人のなすことではなく、聖霊なる神のみわざである。「神にできないことは何一つない。」(37) これを聞いて、マリアは信仰をもって言いました。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」(38)

神にできないことは何一つない。神さまは身分の高い人だけしか救うことがおできにならないのではない。ご自分を信じるすべての人を救うことがおできになる。そのことを証明するために、このわたしをあえてお選びになったのだ—そのことを教え示されて、マリアはお言葉どおりにこの身になりますようにとこたえました。そして、自分

を救い主の母としてくださる神さまの恵みのみわざを受け入れたのです。

「おめでとう、恵まれた方」——この祝福のあいさつを最初に聞いたのはマリアです。しかし、これはマリアとともにイエスさまを信じ、イエスさまに従うすべての人に向けられているあいさつです。私たちのひとりひとりにも語りかけられている祝福の言葉です。「主があなたと共におられる」——マリアがイエスさまを宿したように、神さまはわたしたちにもイエスさまのみ言葉をくださいます。そしてイエスさまのみ霊がわたしたちのうちに住んでくださるのです。(木下裕也)

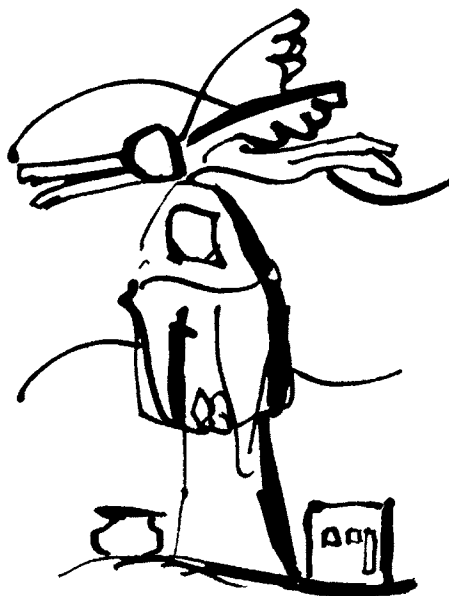
[今週の暗唱聖句] イザヤ書 7章14節

それゆえ、わたしの主が御自ら

あなたたちにしるしを与えられる。

見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み

その名をインマヌエルと呼ぶ。



お言葉どおり、この身に成りますように。

〈ねらい〉

神さまに出来ない事は何ひとつない事、それを素直に信じたマリアの姿を通して、私たちも神様を信じる心と、与えられた喜びを知る。

〈展開例〉

クリスマスが近づいて来ましたね。クリスマスは救い主イエスさまのお誕生を私たちが感謝してお祝いする日ですね。みなさんは、いつ、誰から生まれましたか？(それぞれの反応を受け止めて)そうですね。みんな、お母さんから生まれました。実は神さまのお子のイエス様も、マリアさんと言うお母さんから生まれました。今日はそのマリアさんのお話をします。

ナザレという小さな村に、マリアさんというお姉さんがいました。ある日そのマリアさんの所に突然天使が現れて言いました。「おめでとう。神さまがあなたに大きな恵みを与えてくださいます。」これを聞いたマリアさんは「何のことかしら」と不思議に思いました。そして、続けて天使が言った言葉を聞いて、とてもびっくりしました。「あなたは男の赤ちゃんを産みますよ。その子にイエスと名前を付けなさい。その子は神さまの子で、すべての人々の王となるのです」その時マリアさんはまだ結婚はしていませんでした。ですから、まだ赤ちゃんが生まれるはずなどなかったのです。それに、こんなに小さな村の小さな家に住む自分が、王になる赤ちゃんを産むなんて、とマリアさんは心の中で思いました。そして天使に「わたしはまだ結婚していません。ですからそんなことはあるはずありません」と言いました。でも天使は言いました。「神さまに出来ないことは何ひとつありません」その天使の言葉をじっと聞いていたマリアさんは「私は神さまを信じます。お言葉どおりになりますように」とこたえました。こうして、神さまのお子であるイエス様の母となりました。

た。

マリアさんがイエスさまのお母さんとなるように選ばれたのはなぜでしょう。それは大きな町や立派な家に住むお金持ち、偉い人のためではなく、マリアさんと同じように、素直に神さまのお言葉を信じる心をもった、全ての人々のためにイエス様が生まれてくださる、ということです。神さまは私たちをととても愛し大切に思ってくださいます。ですから天使がマリアさんに「主があなたと共におられる」といったように、神さまを信じる私たちといつも共にもいてくださるのです。

〈いのり〉

神さま、神さまに出来ないことはひとつありません。そのことを心から信じていつも一緒にいさせてください。イエス様を私たちに与えてくださってありがとうございます。イエスさまのお名前によってお祈りいたします。アーメン。

〈クリスマス飾りを作ろう〉**オーナメント****○用意するもの**

- ・紙粘土・クッキー抜き型（ツリー、星、ベルなど）・ビーズまたはスパンコール・クリップ・紐

○作り方

- ・紙粘土を薄く延ばし、クッキー型を使って形を抜き、ビーズやスパンコールを埋め込む。
- ・紐を通せるように、上になる部分にクリップを差し込んでおく。
- ・乾いたら、クリップに紐を通して壁やツリーに吊るして飾る。
- *乾いたあと、絵の具やペンで着色するのも良い。
- *星型のスパンコールを用意して、ツリーのトップに付けるのも良い。

〈ねらい〉

天使がマリアに告げた「おめでとう、恵まれた方、主があなたと共におられる」言葉は、マリアを困惑させた。しかし、マリアは、「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように」とすべてを神さまにおゆだねした信仰の姿に学びたい。

〈展開例〉

マリアさんは、天使ガブリエルが現れるまでは、「はしため」と言っていますように、奴隷のように身分の低い女性でした。そんな低い人のところに神の使いである天使がイエスの誕生を予告しました。それも、「あなたは、そのイエスのお母さんになるんですよ！」と。どんなにマリアさんが頭を一所懸命にめぐらしても、自分が救い主の母親になることは考えられませんでした。「それにまた、結婚もしていないのに・・・」と思いました。どんなに考えても、ありえない話です。

そこで天使は言いました。「神にできないことは何一つない」(37節)。そこでマリアさんはねすべてを神さまにゆだねることを宣言しました。

私たちも、神さまがこうしてくれたならばいいのに、と思うことはたくさんあります。でも、なかなか自分の思うようにはいきません。しかし、皆さんに覚えて欲しいのは、もっとすばらしいことをあなたを通して神さまはなさろうとしておられるということです。

クリスマスは、希望のないところに希望の光が与えられるときです。

〈お祈り〉

「合図」

神さまは
地球に住まうわたしたちすべてに
合図をなさった

愛しい子供に向かってのように
ひとりずつの名前を呼んで
そっと明かされた
「これからはわたしの独り子が
いつもあなたといっしょにいるよ」と

それから真剣な表情で
おっしゃった
「このことを世界中の子供たちに
つたえてくれないかい」と

わたしたちは力強くうなずいた
断ることはできない
神さまのお頼みなさることを

『イエスと出会う～福音書を読む～』
木崎さと子監修 原田葉子訳 (教文館)



〈御言葉の背景〉

当時イスラエルは、ローマの支配のもと、ローマと友好関係を結んだヘロデ大王の統治下にありました。敵対する者は自分の家族だろうと容赦なく殺害したほどの、残酷な王の圧制に、ユダヤ人は苦しんでいました。一日も早くメシアの誕生が待たれていました。メシア預言の成就是、「ナザレから何のよいものが出ようか」(ヨハネ1:46)と言われた、小さな田舎町の一人の娘に始まりました。

〈分級メッセージ〉

★ポイント聖句：ルカ1:38「お言葉どおりこの身になりますように。」

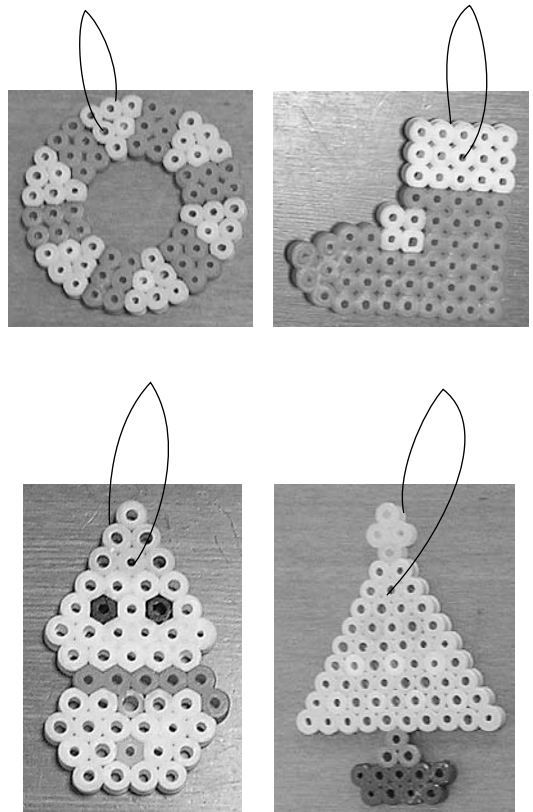
★骨子：①時代背景(ローマの属領、人々の苦しみ)②天使による受胎告知③神の言葉を受け入れるマリアの信仰

★例：マラキの預言から450年ほどたちました。人々は、ローマというつよい国にイスラエルが征服され、つらい思いをしていました。いつ救い主があらわれ、国を建て直してくださるのか期待して待っていました。そんな時代に、ガリラヤ湖に近い田舎町のナザレというところに、マリアという女性に天使が現れ、マリアがびっくりすることを告げました。「おめでとうマリア。あなたは男の赤ちゃんを生みます。その子をイエスと名付けなさい。その子は神の子とよばれ、ダビデの国を永遠に続く王国にする王となるのです。」マリアがびっくりするのも無理はありません。マリアはまだ結婚しておらず男の人を知らないからです。天使はいいました。「聖霊があなたに下り、神の力があなたを包むのです。ですから生まれる子は神の子と呼ばれるのです。神にできないことは一つもありません。」マリアはイザヤの預言書に、「おとめが身ごもって男の子を生む」と書いてあるのを思い出しました。神の言葉が自分を通して実現したことを悟り、「お言葉どおりこの身になりますように。」と言い、天使の言うことを信じました。

神さまは、イエスさまの地上の母親として、神さまの言葉をよく勉強し、素直に信じる女性を選ばれたのです。わたしたちも「あなたのお言葉のとおりになりますように。」と言えるようになりたいと思います。

〈クリスマス工作①〉

アイロンビーズでクリスマスツリーの飾りを作ろう！



人の数だけアイデアがあります。たくさん作って、教会のツリーの飾りにしたり、クリスマスプレゼントにしたりしましょう。工作用の細い針金でしたら、ビーズの穴に通りますし、ツリーに取り付けやすいです。

〈ねらい〉

神様の恵みに身を委ねたマリアの信仰に学ぶ。

〈展開例〉

1. 聖書をもう一度読む

2. 分かち合い

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

Q. 聖書は、イエス様のお母さんとなったマリアが、ダビデ王の血筋であるヨセフの婚約者であったと、私達に紹介しています。神様はその昔、ダビデ王に子孫から救い主が生まれると約束なさいました。イエス様が、神様の約束通り、ダビデの子孫から出たことは、私達に何を教えますか？

→神様の御約束への真実さ。

Q. カトリック教会がしばしばマリアのことを言いますので、何か特別な人だったように私達も錯覚してしまいそうです。しかし聖書そのものはマリアについて、どう語っているのでしょうか？ 他の人と何ら異なることを語ってはいないのではないのでしょうか？ そうだとしたら、それは何故だと思いますか？

→聖書はマリアについて先に挙げたダビデ王家のヨセフの婚約者であり、イエス様のお母さんとなった点以外、何も語っていない。それは彼女が特別な人だからイエス様を宿すように選ばれたのではないことを教えている。

Q. マリアが私達と異なる特別な条件を備えていた女性でないのなら、むしろ、身分の低い貧しい女性であったのなら、何故神様は彼女を選ばれたのでしょうか？ 普通に考えたならば、少しでも条件の良い、例えば人もうらやむお金持ちの特別な女性を選んだ方がずっといいと思

ますが？

→マリアから生まれるダビデの子である救い主イエス様は、地位の高い者やお金持ちのためだけに生まれるのではないこと、弱い人、貧しい人、身分の低い人をも含む、信じる全ての人を救う神様の救いをもたらして下さる恵みを示す。

Q. マリアは、天使ガブリエルを通して告げられた、聖霊によってイエス様を身ごもる超自然的な奇跡を受け入れました。当時、婚約中に他の男性と関係をもったことが知れば、ただではすみませんでした。その疑いがかけられ、婚約者ヨセフの愛をも失うかもしれないことを承知で、命を賭けたのです。何故ですか？

→神様が賜った真実と恵みのため。

Q. マリアは神様の真実と恵みに自身の身を委ねました。このようにして、神様の大いなる救いの歴史の中での彼女の役割を果たしたのです。そして私達にも使命と役割が備えられています。それは何でしょうか？是非、一人一人がそのことが示されるように祈り求めながら、日々を過ごして行ってほしいと思います。

4. お祈り

神様がくださった救いに感謝して。

私達の役割を教えて下さるように。



テキスト ルカによる福音書 1章39～56節

概観

全体ではマリアのエリサベト訪問と二人の応答部分と、マリアの賛歌に大きく分けることが出来ます。さらにマリアの賛歌は「わたし」が主題になっている前半と、神ご自身のご特質と一般的な恵みについて賛美を捧げる後半とに分けることが出来ます。前半でマリアに与えられていた神からの恵みは、後半部分においては、例えば、身分の低いはしため（マリア）と、僕イスラエルというような対応関係によって、マリアだけのことでなく、主を畏れるすべての人たち（霊的イスラエル）の上にも実現することとして反復されます。

喜びによって

この箇所で鍵になる言葉があるとすればそれは「喜び」です。マリアは急いでエリサベトの住む町を目指しました。それは、ガブリエルの告げたエリサベトの妊娠を確かめるためではありません。彼女は既にそれを信じていました。むしろ、マリアを突き動かしたのは、エリサベトに与えられた神からの恵みを共に喜びたいという衝動です。いわば喜びに突き動かされて急いだのです。彼女はエリサベトのもとに駆けつけ挨拶をします。この挨拶は、単なる儀礼ではありません。28節で、天使ガブリエルはマリアに向かい「おめでとう」と挨拶しました。マリアはこの「挨拶」はいつい何のことだろうかといぶかりました。このときガブリエルが使った言葉は「おはよう」とも「平安あれ」（シャローム）とも訳せますが、もともとの意味は「喜べ」です。それと同様に単なる挨拶ではなく、神からの祝福を伝え共に喜ぶという意味です。

喜ぶエリサベト

マリアによる喜びの訪問を受けたエリサベトには、すぐにその応答が現われます。それはまず胎内のヨハネが踊るということによって始まりま

す。さらに彼女は、聖霊に満たされ、大きな声で（新

共同では「声高らかに」だが直訳では「大声で叫んだ」）マリアと胎内の主イエスを褒め称えました。それは力に満ちた賛美です。このときのエリサベトの賛美のもう一つの特徴は、年老いた彼女が孫のように若いマリアを、その胎内の主イエスのゆえに敬い、彼女にへりくだっていることです。聖霊にあって喜びに包まれた人は謙虚に神のみ業をほめたたえるものとされます。

マリアの賛歌

エリサベトの賛歌に対してマリアもまた力強い賛美を歌い上げます。事実、主による逆転をほめたたえるという点で二つの賛歌は一致しています。しかし、両者はまったく同じではありません。ここでもやはり鍵となるのは「喜び」です。とりわけここでは「歓呼する、小躍りして喜ぶ」という意味の言葉が使われています。マリアの心はうれしくて仕方がないほどの喜びに満たされました。それははしためであるマリアに神が目を留めてくださった（過去形であり既に起きた事実）からです。このマリアに起きたすばらしいことは、ただ彼女にとどまるものではありません。49節後半からは、一般的なことへと広がっていきます。その際、思い上がる者、権力のある者は散らされ、引き下ろされますが、身分の低い者は、高くされ、僕（イスラエル、54節）は受け入れてもらえます。富めるものは貧しくなり、貧しい者は満たされます。このような逆転は、物理的、現実的な出来事となるとは限りません。しかし、神のみ力が現われるところでは、どこでもこの逆転が確かに起きます。それは主イエスのご生涯においてとりわけ十字架の出来事において、弟子たちやイスラエルの貧しい人々が主イエスに受け入れられる一方、指導者たちが退けられるという形で実現しました。そのような神のみ力をへりくだって信じるわたしたちにも、この逆転は既に起きています。

（杉山昌樹）

テキスト ルカによる福音書 1章39～56節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問27

〔単元のねらい〕

D・ボンヘッファーはマリアの賛歌について、ここにはこの世のあらゆる事態の完全な転換のはじまりがうたわれていると語っている。神がみずからみ腕をふるって、この世の罪の秩序をくつがえしたもうこと—それがクリスマスの出来事である。ここには神の国の秩序が示されている。そこに招かれるために、私たちもおおのの信仰をととのえたい。人が真に幸いであるとは、神のもとにあるということである。私たちがほんとうに神と出会うためには、どのような道をたどるべきなのかをもう一度確かめたい。

「神さまがなさること」

先週は天使がマリアに、イエスさまのお母さんになることを告げたところを学びました。イエスさまの母になるということは、イエスさまを信じる全世界の人々とともに、マリアも神さまのとうとい救いにあずかるということです。マリアは天使のお告げを聞くと、救いの喜びに満たされ、神さまをほめたたえる歌を歌いました。今週は、マリアのほめ歌に聞きましょう。

マリアは「わたしの魂は主をあがめ」(47)と歌いました。あがめるとは礼拝するということです。わたしたちも主の日ごとに教会に集まって、神さまを礼拝します。そしてもうひとつのことを言うなら、あがめるとい言葉のもともとの意味は、大きくするという意味です。

つまり神さまを礼拝するとは、神さまを大きくして、自分を小さくするということです。マリアは、神さまあなたは大きいなるお方で、わたしは貧しく低く、小さな者ですと歌っています。わたしたちのうちで神さまが大きくなられて、わたしたちが小さくなって神さまのみ前にひざをかがめるとき、わたしたちはほんとうに幸いに生きることができるのです。天国の幸いに身を置いて生きることができるのです。

ところでこのマリアの歌には、神さまがどのようなみわざをふるわれるのかということが鮮やか

に語られています。このときには、もちろんイエスさまはまだお生まれになっていません。けれども神さまはイエスさまの母となるマリアに、ご自分がみ子イエスさまをおしてこの世界にどのようなことをなさるのかを、イエスさまが生まれないうちにあらかじめ示してくださったのです。ここに歌われているのは、み国のすがたです。イエスさまはこの地上に神さまのみ国を来たらせてくださるのです。そのために生まれて、わたしたちのところに来てくださったのです。

神さまのみ国では、どのようなことが起こるのでしょうか。まず、思い上がっている人は散らされ、力のある人は引き降ろされ、富んでいる人は追い返されます。そして身分の低い人は高く上げられ、飢えた人はよいもので満たされます(51～53)。この世界では力のある人やお金持ちがいばっていたり、貧しい人々や弱い人々を苦しめたりしています。貧しい人や弱い人は苦しんだり、悲しんだりしています。けれども神さまのみ国では、ちょうど反対のことが起こるのです。いばっている人はいやしくされ、飢えている人は豊かに満たされます。そして、どんなに小さな、か弱い命も大切にされます。そのような世界こそが、ほんとうに幸せな世界ですね。マリアは、イエスさまが来られるなら、そういう世界が実現すると歌っています。喜びに満ちあふれて、そのように歌うの

です。

そのことを覚えてうえで、もう一步すすんで考えてみましょう。実はここで飢えている、また富んでいるということは、お金や食べ物のことにはとどまりません。力があるとか身分が低いというもの、この世で地位があるかないかということにはとどまりません。もっと深い意味があります。

つまり神さまのみ国では、神さまのもとにある人こそ幸いな人と呼ばれます。神さまの糧を求めて生きる人こそがほんとうに富んでいる人です。神さまを信じ、神さまに従って生きる人こそが高く上げられるのです。

反対にわたしは神さまなどいない、自分の知恵と力でりっぱに生きていけると思っている人は、この世でどれほど身分が高く、お金持ちであったとしても、ほんとうの豊かさ、ほんとうの

幸せを知らない人なのです。そのような人は神の国に入ることはできないのです。ほんとうの命と幸いは、イエスさまを信じることによってもたらされるからです。イエスさまは、貧しい人は幸いであると仰せになりました（マタイ5:3）。貧しい人は不幸ではないか、と思いますか。けれども、貧しい人は幸いです。なぜなら自分の力と知恵に頼って生きようとしなからず、神さまを遠ざけないからです。神さまの恵みをひたすらに求めるからです。

貧しいとは、からっぽだということです(からっぽの器を考えてみてください)。神さまはそのような人をご自分の恵みでいっぱい満たし、ご自分の糧で豊かに養ってくださるのです。そのような人こそ、神さまのみ国にふさわしいのです。

(木下裕也)

[今週の暗唱聖句] イザヤ書 55章9節

天が地を高く超えているように
わたしの道は、あなたたちの道を
わたしの思いは
あなたたちの思いを、高く超えている。



思い上がる者を打ち散らし。

〈ねらい〉

マリアのように、神さまにいただいた喜びで、自分のところをいっぱいにする。

〈展開例〉

自分では気付かないうちにうたを歌っていたりすることはありますか？ それはどのような時にそうなりますか。多分、嬉しいことがあった時や楽しい気分の時だと思います。そして、そのような気分の時には誰かに自分の気持ちを知らせたくなりますね。

マリアさんも同じでした。先週のおはなしを思い出してみましよう。マリアさんのところに天使がきて、嬉しい知らせを伝えました。神さまから、私たちの救い主になれるイエスさまを身ごもって生み、そのお母さんになると知らされたのです。はじめはびっくりしていたマリアさんでしたが、神さまの大きな恵みを知って、心は嬉しい気持ちでいっぱいになりました。そこで一緒に喜びたいと、エリサベトさんのところに会いに行きました。エリサベトさんは結婚していましたが、ずっと子どもがいないまま、もうおばあさんになっていました。でもマリアさんと同じように信じられないような神さまの恵みによって赤ちゃんが与えられたのです。

神さまに大きな喜びをいただいた二人は、一緒に神さまへの喜びの歌を歌いました。その言葉は自然と心の中から溢れてくる歌でした。でもそれは、自分たちだけが特別に幸せで嬉しい、というわけではありません。すべての人のために神さまがなさろうとしていることを知り、心がいっぱいになるほど嬉しかったのです。

私たちの心の中にはいろいろな思いがありますね。でも、マリアさんのようにどんな時も神さま

への喜びで心をいっぱいになると、顔は笑顔になり、口から歌があふれ、力が沸き出てくるのです。

神さまの恵みに感謝し、喜んでクリスマスをむかえましょう。

〈やってみよう〉

**嬉しいこと、楽しかったことを思い出し、一緒に
賛美しよう**

*「幸せなら手をたたこう」の曲のメロディで。

♪うれしいのはどんとき（手拍子2回）

うれしいのはどんとき（手拍子2回）

うれしいことあったら神さまに ころこめて
かんしゃしよう（手拍子2回）

手拍子のところに、参加している子の名前を入れて歌い、歌の後で名前を呼ばれた子が、自分の嬉しかったことを発表する。

*教師は、嬉しかったことの内容が自分だけのものだけでなく、神さまのお恵みよって人々に与えられていることに思いがいくよう導きましよう。

*喜んで賛美することの楽しさを味わいながら歌いましよう。



〈ねらい〉

小さな者、主に従うことしかできない者にも目を留めてくださる神をほめたたえています「マリアの賛歌」を学ぶことによって、ますます力強く救い主である神をほめたたえる者と変えられたい。

〈展開例〉

○. ヘンリーの短編小説に、貧しいけれど愛し合っている夫妻が、ある年のクリスマスに、それぞれ自分のいちばん大事な金時計と金髪を売って、夫は妻の金髪にさす櫛を買い、妻は夫の金時計につける鎖を買い求めて、互いに贈り物を開いたとき、ショックを受けたという話があります。

そして、○. ヘンリーは、この夫婦について、「彼らは互いに無用なものを贈る結果になり、愚か者のように一見見えるかもしれないが、実は彼らこそ最も賢明な人たちだった」と書いています。

神さまが独り子を与えるほどに世を愛し、独り子の十字架の犠牲によってよを救い、信じるも

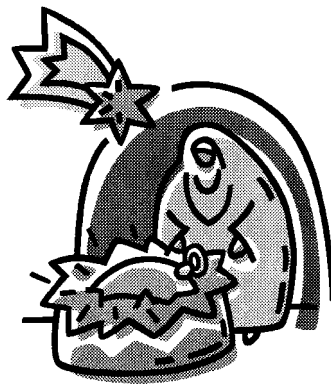
のに永遠の命を約束したというクリスマス・メッセージは、愚かに見えるかもしれませんが、私たちは一途に私たちを愛し、救うために大切なイエスさまを贈ってくださいました。

マリアさんも、どうしてわたしのようなのに神さまは目をかけてくださったのだろうと思ったことでしょう。だから、「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。身分の低い、この主のはしためにも目を留めてくださったからです」(47～48節)と歌いました。

だから、私たちにも救い主である神さまの目が届いて、必要な恵みを与えてくださいます。

〈お祈り〉

神さま、暗い世界にまことの光としてのイエスさまを贈ってくださいありがとうございます。このクリスマスの喜びを一人でも多くのお友だちに伝えることができますように助けてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



〈分級メッセージ〉

☆ポイント聖句：ルカ1：54「僕イスラエルを受け入れて、憐れみをお忘れになりません。」

☆骨子：①マリアの喜び②貧しい者、身分の低い者の祝福③全世界のクリスチャンの祝福……マリアの歌は靈感された預言歌であること。

☆例：救い主の母親になるマリアは、自分の身に起こったことの喜びを歌にしました。「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。」神さまがわたしに偉大なことをしてくださった。その神さまはなんて素晴らしいのでしょうか！という喜びであふれています。さらにマリアの思いは、身分の低い者や貧しい者に及びます。「51～53節」この世には、身分の高い人や金持ちのグループと、身分の低い者、貧しい人のグループに分かれます。みなさんはどちらになりたいですか。きっと身分が高く、金持ちになりたいことでしょう。でもイエスさまの恵みは、貧しく身分の低い者に注がれ、お金や身分があって、あわれみを必要としない人には注がれません。だから貧しいこと、身分の低いことはむしろ祝福なのです。そしてマリアは、アブラハムとその子孫全体が神さまによって永遠に祝福されると歌います。「54、55節」。この「僕イスラエル」とは、イスラエル人だけでなく、まことの神さまを信じる全世界のクリスチャンを示しています。このようにマリアは神さまへの感謝を歌ったつもりでしたが、聖霊により、未来の全世界のクリスチャンの祝福を預言する歌となったのです。この歌はこうして聖書に記録され、全世界のクリスチャンに読み継がれていくことになったのです。

〈クリスマス工作②〉

ステンドグラス

材料：①素材ボード（スチロール系、B2版1枚100円）②クリアポケット（A4L用10枚入り100円）③アルミホイル④マジック（黒、赤、青、黄、緑、紫、ピンク、水色など）⑤セロテープ⑥はさみ

（＊値段は100エンショップの値段です。）



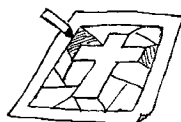
素材ボード B2版を6分割します。



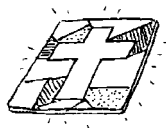
アルミホイルにしわをつけ、素材ボードにかぶせます。



クリアポケットをはさみで切って片側1枚だけ使います。黒マジックで素材ボードの輪郭とデザインを描きます。



デザインが描いたら、裏返して、色マジックで色分けして塗ります。



塗れたら、アルミホイルをかぶせた素材ボードに、クリアシートをかぶせ、余白を裏側に折込み、セロテープで止めて出来上がり。アルミホイルの照り返しでとってもきれいですよ！

〈ねらい〉

教会で神様の恵みを賛美する。

〈展開例〉**1. 聖書をもう一度読む****2. 分かち合い**

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

Q. 親類エリサベトも身ごもっていることを知らされたマリアは、急いでユダの町に行きました。このエリサベト訪問は、マリアにとってどのような意味がありましたか？

→マリアは、エリサベトが言うように、「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方」であった。だから、神様のなさることを疑って、御言葉が実現する証拠を見るためにエリサベトを訪問したわけではない。しかし、子供ができなかったエリサベト、しかも年をとっていた彼女が身ごもった事実をまのあたりに見ることは、既に天使の前で＝神様の御前で告白していた神様の御言葉へのマリアの信仰を、更に強めることとなった。エリサベトの妊娠は、救い主イエス様のお母さんとなるマリアへの神様の備えだったのである。

マリアは、彼女の信仰を強め、励ますために神様が備えて下さったエリサベトの妊娠の事実を直ちに目にゆきました。神様の御業に身を委ねていたマリアにとって、エリサベトの祝福の言葉はどれだけ大きな励ましだったことでしょうか。46節からの有名なマリアの賛歌を賛美できたのは、神様が準備して下さったこの励ましのゆえだと言えます。私達にも、この

素晴らしい神様の備えが与えられています。私達は、自分が教会学校の友達のエリサベトであり、友達が私達のエリサベトなのです。神様はイエス様を信じる私達がお互いに祝福を与え、受けるために、教会学校で出会わせて下さったのです。

Q. さて、マリアの賛歌の中で、神様がイエス様によってもたらされる神様の国の秩序が教えられています。52,53節にそれが語られています。しかし、これをそのまま読むと、神様は政治や経済をみんな否定しているようにも受け取れますが、どうでしょうか？ 私達はこの「権力ある者」と「身分の低い者」、「富める者」と「飢えた人」をどのように理解したらよいと思えますか？

→神様は政治や経済そのものを悪だとして否定なさるのではないことをまず確認したい。しかしこの世ではあまりにもしばしば神様を信じない傲慢な圧制者、暴君が神様を信じる者をしいたげることがある。神様なしの繁栄を生きている者がいる一方、神様のみに頼る者が飢えている現実がある。神様がそのようなこの世の乱れた秩序を逆転させ、御自分の国の秩序において正しい姿に回復することを教えている。神様は救い主による救いの支配を、御自分に寄り頼み、待ち望む者達に豊かにもたらされるのである。

マリアのように私達もイエス様における神様の恵みを賛美するために、神様は私達に御自分の恵みを教え、かつ、御自分に寄り頼む教会を備えて下さいませ。神様は教会学校を通して、私達の内にそのような生き方を形作って下さるのです。

4. お祈り

神様の備えて下さった教会学校を感謝して。

テキスト ルカによる福音書 2章1～20節

(1) ルカ福音書が描くイエス・キリスト誕生の次第は、この救い主の「低さ」と「高さ」を、強く印象づけます。

この救い主は、「皇帝アウグストゥス」が強大な権力を握った時代に生まれました。皇帝の勅令により、全領土で住民登録が義務づけられます。イエスの「両親」も、この勅令に従い、ナザレから「ユダのベツレヘム」への旅を強いられます。神の民イスラエルが、異邦人の皇帝による力の支配に服さねばなりません。そうした「屈辱的」ともいえる暗い時代に、キリストは人となられました。

(2) ベツレヘムには、この夫婦を迎える「宿屋」は一軒もありません。出産は急場しのぎの場所で行われます。初めての子は、布にくるまれ「飼い葉桶」に寝かされます。「布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子」(12)、「飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子」(16)と、同じ描写が三度も繰り返されています。

救い主の貧しさで低さ。それがクリスマスの情景に、決定的な意味を与えていることを、福音書は強調しています。神の子の低さは、神ご自身の低さでもあります。

「イエス・キリストは、私たちが高慢にならずに近づき、絶望せずにひれ伏すことのできる神である」(パスカル)。人は、高慢と絶望という二つの病の間で揺れています。貧しく、低くなられたキリストこそ、高慢を癒し、絶望する者に慰めを与える神です。けれども、その癒しと慰めのために、キリストが払ってくださった犠牲は、なんとという大きさ深さでしょうか！

(3)「宿屋には彼らの泊まる場所がなかった」(7)。「場所」のない悲しみと辛さ。深淺を問わず、私たちはその悲しみを知っています。神の子イエス

は、場所のない不安と無力を、私たちと分かち合うために、世に来てくださいました。「狐には穴があり、空の鳥には巢がある。だが、人の子には枕する所もない」(ルカ9章58節)。

主イエスの生涯は、誕生から死に至るまで、枕する所をもたぬへりくだりの道でした。ベツレヘムの飼い葉桶は、すでにゴルゴタの十字架の影の下にあります。このような低さと謙遜を通して、神は、失われた者たちへの激しいほどの愛を示されたのです。

(4) クリスマスの使信は、飼い葉桶の低さと共に、栄光に輝く天使たちの雄大な賛美を通して語られます。

「いと高きところには栄光、神にあれ、

地には平和、御心に適う人にあれ」(14)。

クリスマス。神の言の「愛肉」。これにまさる奇跡はなく、これにまさる過激な愛はほかにありません。ですから「神に栄光」と天使たちが歌うのを、だれも妨げることはできません。

「地に平和」。クリスマスは、失われた平和を回復する神の行動です。神の平和は、皇帝アウグストゥスによる「ローマの平和」と違い、喜び、信頼、感謝へと私たちを導きます。神を喜び、与えられた人生を喜べるようにしてくださるのです。

(5)「御心に適う人」。その最初の代表者に選ばれたのが、野宿する羊飼いたちです。貧しく、渡り歩く生活のために、卑しめられた人々でした。世の人の目には「適わない」羊飼い。彼らを御心に適うと認定するのは、神の一方向的な愛です。

へりくだる心に生きた羊飼いらは、飼い葉桶の救い主を軽んずることなく、これこそ私の救い主、と感謝をこめて礼拝しました。この低い心が救い主を見出すのです。(小野静雄)

12月23日 「降誕祭・主イエスの誕生」 説教展開例

テキスト ルカによる福音書 2章1～20節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問28

〔単元のねらい〕

「救い主」(11節) イエス・キリスト誕生の喜ばしい知らせは、「皇帝アウグストゥス」(1節)に代表される「勝ち組」の人たちではなく、マリアやヨセフ、羊飼いとといった「負け組」の人たちにこそ、真先に知らされた。この人々は、「泊まる場所がな」く(7節)、「野宿をし」(8節)ているような、この世に居場所を持たぬ人たちであったが、彼らは「飼い葉桶」(7節)に生まれた「幼子」(17節)イエスにこそ、自らの居場所を見つけたのである。子供たちに、この福音の喜びをリアルに実感させてあげたい。

「居場所なき者たち、大いに喜ぶ！」

皆さん、メリー・クリスマス！ クリスマスおめでとうございます！ 今日みんなが待ちに待ったクリスマスです。こうやって教会で、みんなと一緒にクリスマスを祝えることを、先生もとても嬉しく思っています。

さて、みんなは学校とか地区の子供会とかで、クリスマスをお祝いしていると思いますが、クリスマスって何をお祝いしているか知っているかな？ 実は、クリスマスとはイエス様の誕生日をお祝いする日なんです。クリスマスは、アルファベットで "Xmas" と書きますね。こういう文字をみんなもいろんなところで見てると思います。実は、この "Xmas" というのは、イエス様の誕生日をお祝いするっていう意味があるんですね。みんなも自分の誕生日には、家とか友達同士とかで誕生日をお祝いしてもらおうのではないのでしょうか。そういう時は、とっても嬉しいですね。

ところで、今日は世界中のみんなで、救い主イエス様のお誕生日をお祝いしています。どうして、世界中のみんなが、イエス様のお誕生日をお祝いしているのでしょうか。みんなもお誕生日をお祝いしてもらおうと思いますが、世界中のみんなに祝ってもらったりはしませんね。どんなに有名な芸能人でも、世界中で祝ってもらったりはしません。でも、イエス様の誕生日だけは、世界中でお祝いするのです。なぜでしょうか。それは、世界中には、弱さを持った人たちがいじめられてい

る子たちがたくさんいますが、そんな人たちを救い助けるために、イエス様は来て下さったからです。だから、世界中の人たちがイエス様のお誕生日をお祝いしているのです。

食べ物や飲み水がない人たちがいじめられてる子たちは、「神様は僕たち私たちのことなんか見捨ててしまったんだ。僕たち私たちのことなんかどうでもいいんだ。どうせ僕たち私たちは愛してもらえないんだ。」きっとこう思っていると思います。しかし、「そうじゃない、神様はあなたのことを心から愛しているんだよ、きみは神様にとってかけがえのない大切な存在なんだよ」ということを伝えるために、イエス様が来て下さったのです。

イエス様は実は、神様のたった一人の子供なんです。そのお方がみんなと同じ人間となって生まれてくださったのです。みんなも生まれてくる時は、赤ちゃんですね。この中で最初から、いまの状態で生まれてきた子はいらぬかな？ そんな人はいませんね。みんな、お父さんとお母さんの間に赤ちゃんとして生まれてきます。それと同じように、イエス様はヨセフというお父さんと、マリアというお母さんの間に、赤ちゃんとして生まれました。

そんな風に、イエス様は赤ちゃんとして生まれましたが、どこで生まれたかみんな知っていますか？ 答えは聖書に書いてあります。さあ、誰が

一番先に見つけるかな？ はい、じゃあ、〇〇ちゃん、答えをどうぞ！ はい、正解です。イエス様は飼い葉桶に生まれたんですね。飼い葉桶って、みんな分かるかな。飼い葉桶というのは、馬とかロバとかが食べる餌が入れてある桶のことなんです。そんなところでイエス様は生まれたのです。みんなはどこで生まれたのかな。だいたい病院だと思いますが、自分の家で生まれたという子もいるかもしれませんね。でも、この中で、馬とかロバなどの動物が食べる餌が入れる箱の中で生まれたって子はいくつあるかな？ いないよね。だけど、そんなところでイエス様は生まれたんです。ものすごいところで、イエス様は生まれたんですね。先生もびっくりです。みんなそんなところで生まれてほしいと思いますか？ 誰も、餌が入れてあった桶で生まれたくはないですね。まるで馬かロバの子供みたいですね。

どうしてそんなことになってしまったのかというと、実はその頃、アウグストゥスという王様がいたのですが、この王様が、みんな自分の故郷に帰りなさい、そしてお役所に行って住民登録をきなさいって命令したからなのです。住民登録というのは、簡単に言うと、自分の名前と住所を書きなさいということです。みんなも自分の教科書とかランドセルとかに、名前を書きますね。それと同じようなことをきなさいって、アウグストゥスという王様が命令したのです。それで、お父さんのヨセフさんとお母さんのマリアさんは、故郷のベツレヘムに帰りました。みんなもお正月とかにはおじいちゃんやおばあちゃんの家に行ったりしますね。それと似ています。みんながおじいちゃんやおばあちゃんの家に行ったりするように、ヨセフさんとマリアさんはベツレヘムの町に帰ってきました。しかし、二人の泊まる家はありませんでした。誰も二人を泊めてくれませんでした。

仕方なく、ヨセフさんとマリアさんは外に泊まって、イエス様を飼い葉桶に寝かせたのです。かわいそうですね。そんな風に、イエス様はみんなから仲間はずれにされて、生まれたのです。

でも、このイエス様の誕生を心から喜んでくれる人たちがいました。それは、羊飼いさんたちでした。羊飼いさんたちも、みんなから仲間はずれにされて、住むところがありませんでした。イエス様と同じように、野宿をしていたのです。羊飼いさんたちの場合は、羊と一緒にいつも暮らしていたのです。その頃、羊飼いさんたちはみんなから嫌われていました。いじめられていました。ですから、「どうせ僕たちなんか生きていく意味なんかないのさ。誰も僕たちのことを構ってくれない。神様も僕たちを見捨ててしまったんだ」こんな風に思っていたと思います。

でもね、実はそうじゃなかったのです。神様は、こんなみんなから嫌われいじめられている羊飼いと一緒に、イエス様のお誕生をお祝いしたいと思ったのです。羊飼いさんたちは、みんなからいじめられて、仲間はずれにされて居場所がありませんでした。みんなは楽しくワイワイやっているのに、ポツンとひとりぼっちな気分だったのです。でも、神様にとっては、そういう羊飼いさんたちこそ、とっても大切な人たちだったのです。神様はですね、こう言ってくださったのです、「羊飼いのみんな、わたしはみんなのことをとっても大切に思っているよ。心から愛しているんだよ。それを分かってもらうために、わたしの子供であるイエス様は、みんなから仲間はずれにされて、飼い葉桶で生まれたんだよ」

皆さんも、この羊飼いさんたちと同じように、神様から深く愛されているのです。そのことを一緒に祝いするのがクリスマスなんですね。メリー・クリスマス！（梶浦和城）

〔今週の暗唱聖句〕 ルカによる福音書 2章11節

今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。

この方こそ、主メシアである。

〈ねらい〉

「救い主」(ver11) 誕生の知らせは、一番最初に、「野宿」(ver8) をしているような、その社会の一番小さな者に知らされました。そしてイエスご自身も「泊まる場所」(ver7) がなく、家畜小屋に生まれて下さいました。小さな者のために生まれて下さった福音の喜びを、子供達と分かち合いたいと思います。

〈展開例〉

クリスマスおめでとう！ 皆、毎年クリスマスをお祝いしているよね。クリスマスって誰のお誕生日か知っている？ (子どもたちの話を聞く)。そう、イエス様のお誕生日だね。今日は、クリスマスのクイズをしながら、イエス様がお生まれになった時のことを一緒に考えていきましょう。1から3の内、どの答えが合っているかな？手を挙げて答えてね。

第1問 イエス様のお父さんはヨセフですね。では、おかあさんは誰でしょうか？

1. マルコさん
2. マリコさん
3. マリヤさん

答えは3番の「マリヤさん」です。

第2問 ヨセフとマリヤは、自分達が生まれた町、ベツレヘムに向かって旅をしていました。夜になりました。二人はどこに泊まったのでしょうか。

1. 宿屋
2. 馬小屋
3. お城

答えは2番の「馬小屋」です。ベツレヘムの町は、人がいっぱい、宿屋にはヨセフとマリヤの泊まる場所がなかったのです。イエス様は神様の子、救い主なのに、馬小屋で生まれました。暗くて、寂しくて、汚い所です。イエス様を宿屋に泊めてくれる人は誰もいませんでした。寂しい人、悲しい人、一人ぼっちの人、いろいろな人の友達になるために、イエス様は馬小屋で生まれたのです。

では、第3問。イエス様がお生まれになったニュースを最初に聞いたのは誰でしょうか。

1. おまわりさん
2. 羊飼
3. 牧師先生

答えは2番の「羊飼」です。羊飼いは毎日羊の世話に忙しくて、汚い服を着ていました。お金もあまり持っていないで、皆に馬鹿にされていました。この日も、夜、野原でずっと羊を見守っていたのです。羊飼いのことを気にしてくれる人は、誰もいませんでした。けれども天使が最初に現れたのは、この羊飼いの所だったのです。

天使は羊飼いに言いました。「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになりました。その方は飼葉桶の中に寝ています。」

羊飼いは、嬉しくて、急いでイエス様に会いに行きました。「救い主がお生まれだ！ 救い主がお生まれだ！ 僕達に、天使が教えてくれたんだ！ 神様が僕達に知らせてくれたんだ！」

飼葉桶は、馬のえさを入れるものです。馬のよだれやえさがついている汚い入れ物です。そんな所に、どうして救い主がお生まれになったのでしょうか。救い主なら、立派なお城のキラキラ光るベッドの方がお似合いだと思いませんか？

イエス様は、私達の心に住んで下さるために、生まれてきて下さったのです。嘘をついたり、意地悪したり、ずるいことをしてしまう私達。飼葉桶より、もっともっと汚い私達の心。それでもイエス様は私達と共にいてくださいます。「一人ぼっちでも大丈夫。悲しくても大丈夫。汚くても大丈夫。神様はあなたを愛しているよ。」

飼葉桶のイエス様は、私達に微笑んでくださいます。イエス様に感謝して、心から「クリスマスおめでとう！」とお祝いしましょうね。

〈お祈り〉

神様、飼葉桶で生まれたイエス様を感謝します。羊飼いがイエス様に会えたことも感謝します。小さな私達のことも忘れずに、いつも愛して下さいあってありがとうございます。イエス様の御名によってお祈りします。アーメン。

〈ねらい〉

まことの救い主イエス・キリストの誕生を、全世界の人々と一緒に喜び祝いましょう。

〈展開例〉

「羊飼い」は、誰からも相手されない人たちのことを象徴しています。羊飼いの言うことに誰も耳を傾けず、幸せになることが許されない人たちです。誰も望んでこのような立場に身をおくことはしません。周囲の人々の無関心が、弱い立場の人々を生み出していきます。しかし、神は、公平な父として、すべての人に幸せを、と温かく見守っておられます。

たくさんの方が弱い立場におかれています。食べるものもなく、住む家もなく、仕事もなく放り出されて、どうやって暮らしていったらいいのかわかりません。人々は、彼らのことを避けようとします。しかし、神にとってはいちばん大切な人たち。ひとりぼっちで苦しんでいる人と一緒にいるために、神はこの世に来られました。

弱い立場の人々は、待ちこがれていました。そして、ついに神は、この地上に、小さな赤ちゃんとして貧しい人々のもとにお生まれになりました。愛に飢えていた人々の心は、喜びで満たされ

ました。これからは貧しい人たちこそが大切にされ、神の姿を映して美しいものとなるのです。何とすばらしい知らせでしょうか！

〈お祈り〉

「飼い葉桶」

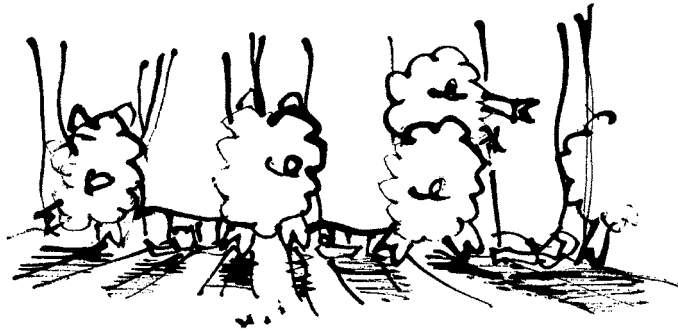
飼い葉桶の中には
生まれたばかりの
赤ちゃん

神さまの愛を
たくさん預かって
この世にやってきた

いくつもの虹を
世界中にかけて
喜びをもたらした
赤ちゃん

小さな手で
世界を変える

『イエスと出会う～福音書を読む～』
木崎さと子監修 原田葉子訳（教文館）



宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。

〈視聴覚教材〉

飼い葉桶の中のイエスさま

〈分級メッセージ〉

☆ポイント聖句：ルカ2：11,12

☆骨子：①しるしの例示②救い主誕生の事情。愛のとほしい町③神の御心

☆例：クリスマスを表すしるしは、ツリーとかリースとかサンタとかたくさんありますが、これらはお祭りとしてのしるしです。クリスマスの意味を表すしるしは“飼い葉桶の中の赤ちゃん”です。飼い葉桶とは、馬や牛や羊などの家畜のエサをいれる箱のことで、赤ちゃんを家畜のエサをいれる箱に寝かせる親がどこにいますでしょうか。イエスさまのおかあさんであるマリヤやおとうさんであるヨセフも、できることなら赤ちゃんベッドに寝かせてあげたかったにちがいありません。でも二人は旅の途中で、宿屋は満員でした。でもマリアはお腹がおおきかったのです。親切な人だったら、お腹の大きい婦人を、自分の家の部屋を一つ空けて泊めてあげることでしょう。でもこの時はそんな親切な人は一人もいなかったのです。家畜小屋は小さくて不潔ですね。あそこで一晩寝ることになったとしたら、どうでしょう。一人でも親切な人がいたらこんなことにはならなかったでしょう。人々は知らなかったとはいえ、神さまのお子様を、家畜小屋で生まれさせてしまったのです。でもこれは神さまの御心でした。イエスさまは、貧しく身分の低い者の友となるために、また自分勝手に、愛のない人間の罪とその罰をすべて引き受けて十字架につけられるために、地上に生まれてくださいました。飼い葉おけの中のイエスさまは、そのような神さまの御心を表すしるしなのです。

〈分級又はクリスマスお祝い会のプレゼント〉

パソコンとパウチ機を使って、素敵なクリスマスCS案内カードを作りましょう。

下図のようなデザインと案内を考案し、パソコ

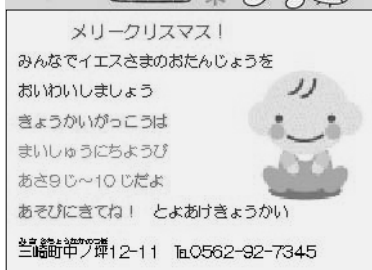
ンのワード機能を使って、両面印刷用厚手の用紙に裏・表に印刷します。位置決めはやや手間がかかります。B5用紙だと、右図のように4枚分を一度に印刷できます。うまく両面に印刷できたら、カッターと定規でいねいに切り取り、パウチ機を使ってパウチします。

分級やクリスマスお祝い会のプレゼントに添えてください。近隣の子供たちが集まりやすいこの時期、CS案内に利用できます。

また分級で、子供たち自身が作るオリジナルカードをパウチしてあげるのも面白いと思います。



表



裏

メリークリスマス！
 みんなでイエスさまのおたんじょうを
 おいづいしましょう
 きょうかいがっこうは
 まいしゅうにちようび
 あさ9じ～10じだよ
 あそびにきてね！ とよあけきょうかい
 三崎町中ノ陣12-11 TEL0562-92-7345

* B5用紙だと4枚分印刷できます。



〈ねらい〉

救い主の降誕を喜び祝う。

〈展開例〉

1. 聖書をもう一度読む

2. 分かち合い

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

Q. かつてダビデ王の時代に繁栄を誇った神様の民ユダヤ人は、イエス様が生まれた当時はローマ帝国の支配下にありました。これは彼らには屈辱に感じられたでしょう。皇帝の支配の現れとして住民登録を強られるダビデ王家の血筋を引くヨセフも、身重の妻を連れての旅の途上でそう思ったかもしれません。しかし実は、それによって救い主がベツレヘムで誕生するという旧約の預言が実現することとなるのです。これは私達に何を教えていますか？

→神様の主権。神様は人間の支配が猛威をふるっているように見える中で、救い主イエス様による救いの御業の成就に向かって全てを導かれる。最高権力者ローマ皇帝すら、その御手の中で使われる道具に過ぎない。そして今、神様はイエス様が再び来られる救いの完成の時に向かって、同様に主権をもって導いておられる。

Q. マリアはイエス様を、飼い葉桶に寝かせました。「飼い葉桶」というのは、家畜の食べる物を入れるものです。何故、マリアはこのような場所でイエス様を産むことになったのですか？

→宿屋には彼らの泊まる場所がなかったから。

Q. イエス様はローマ皇帝の子として生まれることすら可能だったはずですが。それなのに何故、みじめで貧しく生まれたのでしょうか？

→救い主イエス様がもたらして下さる救いの深みを示すため。どんなにみじめで、弱い者、貧しい者、身分が低い者、罪深い者であっても、「わたしはイエス様に救われたい」と言うことだけは出来ない。イエス様の救いは、その深みにまでも確かに届くことを「飼い葉桶」というイエス様のこの世的には最低で、ありえない生まれ方が示している。

Q. 救い主の誕生のニュースを最初に聞いたのは、貧しく、仲間はずれにされていた羊飼いたちでした。これは私達に、何を教えますか？

→イエス様の救いは、人が忌み嫌い蔑むこのような人まで含む救いであるということを教えている。イエス様の救いが届かない程に、神様から遠く隔たった人はいないのである。

Q. 「地には平和」と天使は賛美しますが、当時、ローマ帝国の武力による平和がある程度あったことを歴史から学べます。では、天使が神様を賛美する平和とは、この「ローマの平和」とどのように違うのでしょうか？

→ローマ帝国の武力による支配は、一応の平和を造り、維持していたが、結局はこの羊飼いのような人々を生み出してしまうものであった。しかし救い主がもたらす平和は、この世の平和と異なり、何よりも神様との関係を回復し、神様にふさわしい栄光と賛美が帰される。そして神様によって一人一人が大きな喜びと平安に満たされるのである。

4. お祈り

救い主イエス様の誕生を感謝して。

テキスト 使徒言行録 10章9～33節

〈福音が異邦人世界へ広まるために〉

復活の主イエスは、天の王座に昇られる直前に、使徒たちに約束して言われました。「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる」(1:8)。この主イエスの約束の通り、既に福音は、迫害によって散らされたエルサレム教会の信徒たちによって、ユダヤとサマリアの全土で宣べ伝えられていました。「こうして、教会はユダヤ、ガリラヤ、サマリアの全地方で平和を保ち、主を畏れ、聖霊の慰めを受け、基礎が固まって発展し、信者の数が増えて」(9:31) いたのです。そんな中、主は、福音が異邦人世界へと本格的に宣べ伝えられるための準備を着々と積み重ねておられました。その一環として、教会の迫害の急先鋒サウロ（パウロ）が、復活の主イエスとの出会いを通じて回心へと導かれ、さらに福音を宣べ伝える使徒の職務へと召し出されていたのです。しかし、ユダヤ人キリスト者中心の教会が、異邦人世界へと福音を宣べ伝えて行くためには、昔からの障壁を乗り越える必要がありました。その障壁とは、ユダヤ人以外の異邦人を汚れた存在と見なす心の壁でした。それで、復活の主イエスは、エルサレム教会の指導者ペトロに幻をお与えになって御心を示されたのです。

〈汚れた動物の幻〉

ペトロは、地方を巡回しながら、諸教会を訪問する旅を続けていましたが、「エルサレムの北西56キロにある地中海に臨む港町」ヤッファに滞在していた時のことです。彼は、日々の祈りの習慣で昼の十二時頃に屋上で祈っていたのですが、空腹を覚えていると、天が開いて、大きな布のような入れ物が四隅で吊されて、地上に下りて来るではありませんか。その中には、律法で食べては

ならないと命じられている汚れた動物が入っていたのです。すると、「ペトロよ、身を起こし、屠って食べなさい」(13) という声がしました。ペトロが抵抗すると、再び、「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない」(15) との声がしました。このことが三度繰り返されて、入れ物は急に天に引き上げられたのです。

〈異邦人コルネリウスへの伝道〉

ペトロは、幻を与えられて思案に暮れましたが、主は、そのようなペトロに御自身の御心を心と体で覚えさせるために、聖霊の導きを与えられて(19)、カイサリアにいる異邦人コルネリウスへの伝道に向かわせられたのです。23節後半の記述から、この伝道も、ペトロ単独の働きではなく、ヤッファ教会の信徒たちとの共同の働きであったこと、つまり、教会共同体による伝道であったことが分かります。

ペトロたちがカイサリアのコルネリウスのもとに到着すると、そこには彼の親類や親しい友人たちが集められていました。ペトロが語る福音に触れさせるためです。私たちの伝道の模範が、ここに示されています。ペトロは、幻を与えられて最初は思案に暮れましたが、聖霊の導きの下、コルネリウスがペトロを呼び寄せるために遣わした三名の使者との交わりを与えられ、さらに実際にコルネリウスとの交わりを与えられて、幻を通じての御心を心と体で覚えることができたのです。それは、かつて律法では、ユダヤ人が異邦人と交際したり、異邦人を訪問したりすることは禁じられましたが、神は、今、その障壁を取り除かれて、どんな人間をも汚れていると見なしてはならないとの御心を示されたということです。こうして、主は、福音が異邦人世界にも教会によって大胆に宣べ伝えられる準備を着々と積み重ねて行かれたのです。(長谷川潤)

テキスト 使徒言行録 10章9～33節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問28

〔単元のねらい〕

ペトロが幻の中で神による清めを悟らされるという出来事は、福音がユダヤ人の枠を越えて異邦人にも伝えられるということを教える神の特別な御業であった。旧約聖書を背景とするユダヤ人を中心とする伝道から、福音が世界に向けて宣べ伝えられるという大きな歴史の流れを導いておられる神様の御業のすばらしさを伝えたい。そしてまた、神様のすばらしい御業は、ペトロとまったく同じような仕方ではないにしても、私たち一人ひとりの歩みの中でも起こるということに子供たちの注意を向けたい。私たちの思い込みを打ち破って、福音は周りにいるすべての人に伝えられる。キーワードは、十字架、礼拝、洗礼。

「どんな人でも礼拝できる」

世界中にどれぐらいのクリスチャンの人がいるでしょうか。いろんな国に、たくさんのクリスチャンの人がいるでしょう。今では世界中の人がイエスさまのことを信じています。でも、最初から教会にいろんな国の人がいたわけではありませんでした。教会はどここの国の人たちから始まったか知っているでしょうか。アメリカでしょうか。イギリスでしょうか。昔のイスラエルという国のユダヤ人からです。旧約聖書を信じていた人たちです。彼らの中からイエスさまを信じる人たちが出てきました。そして彼らは、イエスさまを信じることができるのは自分たちユダヤ人だけだと考えていたようです。旧約聖書を昔から知っている人と、今まで全然違う神さまを信じていた人たちとは、一緒になれないと思っていたのです。しかし、それが間違いであり、イエスさまの救いは世界中の人に与えられるということを、神さまはペトロを通して教えてくださったのです。

あるとき、ペトロが空腹でいたとき、屋上で幻を見ました。動物の幻です。そして神さまはその動物を食べなさいと言われました。あまりにお腹が空いていたので、こんな幻を見たのでしょうか。そうではないようです。ペトロは「いただきます！」とは言いませんでした。実はその動物の中に、旧約聖書では食べるのを禁じられていた汚

れた動物がいたからです。ですから、神さまを信じる者として、「食べられません」と答えたのです。ところが、それに対する神さまの答えは、私が清めた物はすべて清いのだというものでした。

ペトロは、この幻の意味は一体何だろうかと考えました。すると、そこに人がやって来て、百人隊長コルネリウスという人のところへ行くことになりました。この人はペトロのようなユダヤ人ではなく、ローマの人でした。このころ、ユダヤ人は自分たちこそ清い人間と考えていたので、外国の人と付き合うということをしていませんでした。しかしペトロはさっき見た幻を覚えていたので、清いとか清くないとか言ってはならないと思い、コルネリウスのもとを訪ねることにしました。

コルネリウスは神を畏れる正しい人でしたが、ペトロがコルネリウスのもとを訪ねると、なんと彼はペトロのもとにひれ伏し、まるでペトロが神さまであるかのように拝みました。ペトロはその礼拝を拒み、「わたしもただの人間です」と答えました。そして、ペトロは、なぜ自分を招いてくれたのかをコルネリウスに尋ね、コルネリウスもまた幻の中で神さまの言葉を聞いたことを知りました。ペトロは、神さまはユダヤ人以外の人も救うのだということをはっきりと悟りました。こ

うして、コルネリウスとその家の人たちはクリスチャンになりましたが、それからユダヤ人以外の人たちにも福音が広く伝えられるようになったのです。そこには、不思議な幻を通して現された神さまご自身の大きな力がありました。

そして、このことは、私たちにとっても大切な意味を持っています。旧約聖書では確かに清いものや汚れたものについて書かれているのに、今やすべての人が清いものとされるようになったというのはなぜでしょうか。それは、十字架の力です。イエスさまはまるで汚れた者のようにして十字架にかかってくださいました。そのようにして、汚れた者の身代わりとなってくださったのです。十字架を信じる人は、ユダヤ人であっても日本人であっても、みんな清められるのです。それは罪からの清め、救いです。

そして、清められた人は、正しい礼拝へと導かれることができます。どこの国の人も清められるということは、みんなそれぞれの宗教の仕方でも礼拝すればいいということではありません。コルネリウスは最初、ペトロを拝もうとしました。人を神さまのようにして礼拝するということは、ローマや他の国の宗教では行われていたことですが、旧約聖書では禁じられていることでした。旧約聖書が教えていた清さと汚れは、十字架の力で取り去られましたが、それは旧約聖書の教えにもう意味がないということではないのです。大切なことは、清くされた者が正しい礼拝に導かれるということでした。コルネリウスも、キリストの十字架を知ることで、正しい礼拝に導かれることができました。

そして、そのことのしるしが、聖霊と洗礼でした。このあと、御言葉を聞いていた人たちの上に聖霊が降り、みんな神さまを賛美し、そして洗礼を受けたとあります。聖霊はイエスさまを信じるようにさせてくれる霊です。十字架はすべての人

を清める力を持つのですから、聖霊もまたユダヤ人だけでなくすべての人に働くのです。そして、洗礼もイエスさまを信じるすべての人が受けることができるのです。

教会にもいろいろな人がいます。外国の人もいるかもしれません。すばらしいことです。また教会学校の中にも、生まれたときから家族で教会にきている人もいれば、おうちの人はキリスト教ではないけれど自分だけ来ているという人もいます。生まれたときにもう洗礼を受けている人もいれば、まだ洗礼を受けていない人もいます。イエスさまの十字架を信じる人はみな同じように清い人なのです。そして、洗礼をまだ受けていない人も、イエスさまを信じているなら洗礼を受けることができます。それをいつにするか、それは教会の先生と相談してみましよう。早いか遅いかは関係ありません。だれでも、同じように清くされる洗礼を受けることができます。

そして、このことは、今もう教会にきている人だけでなく、まだ教会に来たことのない人にとっても大切なことです。たくさんのお友だちに、世界中の人たちに、イエスさまの十字架を伝えてあげたいと思います。この人には話してもダメかなあとか、この人には教会に来てほしくないなあとか、そのような気持ちはないでしょうか。神さまは、どんな人でも清くすることのできる力をお持ちです。その力を信じましよう。 (石原知弘)



[今週の暗唱聖句] 使徒言行録 10章34節

神は人を分け隔てなさないことが、よく分かりました。

〈ねらい〉

ペトロの見た幻を通して、福音が異邦人にも与えられる恵みであることを知る。イエスを信じる者は皆、ただお一人の神を礼拝する。私達の思いを超えて働かれる神様の御業を知り、さらに教会に導かれる人が起されるように祈る。

〈展開例〉

幼稚園に入る前、毎日、隣りの家の子と遊んでいました。私の家で遊んだり、その子の家で遊んだり、とても楽しかったのですが、お友達はその子一人だけでした。でも、幼稚園に入ると、お友達が沢山できました。今まで会ったことのない男の子、女の子、上のクラスのお姉さん、お兄さん、幼稚園バスの運転手さん、先生……いろいろな人と知り合いになりました。とても嬉しかったですよ。

イエス様を信じる人も、今は、世界中にたくさんいますね。でも、最初からそうだったわけではありません。最初、イエス様を信じていたのは、ユダヤ人だけでした。そしてユダヤ人は、イエス様を信じることができるのは、昔から旧約聖書を良く知っている自分達だけだと思っていました。皆がよく知っているペトロもユダヤ人で、同じように考えていたのです。

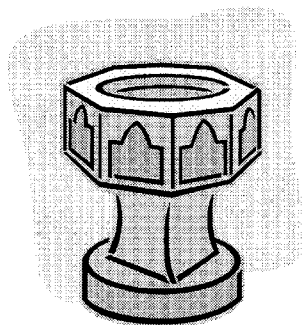
ある日のこと、ペトロはお祈りするために屋上に上がりました。お昼の12時です。お腹が空いたなあ。何か食べたいなあ。すると、天から大きな布が下りてきました。中をのぞくと、いろいろな動物が入っています。「食べなさい。」と神様は言われました。「神様、食べられません。神様が、食べてはいけないと教えてくださいました汚れた動物が入っています。」ペトロは困って答えました。すると神様は、言われました。「わたしが清めた物を、清くないなどと言ってはならない。」それからその布は天に引き上げられました。ペトロが

不思議に思っていると、そこにローマ人がやって来ました。ユダヤ人は、神様を知らない他の国の人達と話してはいけない決まりがありました。けれどもペトロはさっきの神様の言葉を思い出しました。皆も覚えていますか？(問いかけてみる)そこでペトロはローマ人と一緒に、コルネリウスという人のところに行くことにしました。コルネリウスは神様を信じる素晴らしい人で、お祈りをしていた時、神様から、ペトロを呼んで来なさいと言われたのです。ペトロもコルネリウスも神様のお言葉に従って、今日、こうして会うことができました。コルネリウスの家族もお友達も、ペトロからイエス様の十字架や復活のことを聞き、イエス様を救い主と信じて洗礼を受けました。

イエス様を信じる人は、皆、神様に喜ばれています。どの国の人でも、家族で教会に来ている人も、一人で来ている人も、ずっと来ている人も来たばかりの人もです。まだ教会に来たことのないお友達のこと、イエス様は待っていてくださいます。一緒に神様を礼拝しましょう。

〈お祈り〉

神様、イエス様を信じる人は誰でも、神様に喜ばれ、礼拝に招かれていることを感謝します。まだ教会に来たことのないお友達も導いて下さい。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

この一年の神さまの数々の恵みを思い起こしながら、それらを素直に受け入れると共に、新しい年も、ただ主に従う思いを強くしましょう。

〈展開例〉

この一年間の神さまからの恵みを思い起こしてみよう。もちろん、いいことばかりではありません。時にはつらい経験をすることもあります。それも、神さまからの恵みです。

ペトロさんは不思議な幻を見ました。それは、ユダヤ人ではないコルネリウスとその家の人たちがイエスさまを信じて、洗礼を受けるようにするために、ペトロが召されるというものでした。

ユダヤ人であるペトロさんからすると、ユダヤ人以外の人のところに行ってイエスさまのことを伝えるということは、考えられないことでした。まさに、思いも寄らない働きにペトロさんは召されたのです。神さまは、誰でも救うことができま

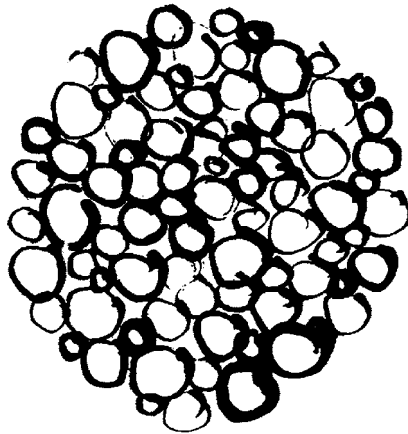
す。

来年も何が私たちに起こるのかは、誰にもわかりません。だから、神さまに従っていくようにしましょう。もしかすると、新しいお友だちが与えられるかもしれません。仲良しのお友だちと別れなければならないかもしれません。

神さまにはできないことはないのですから、そして、すべてを神さまのよい御心に従ってなしてくださいますから、新しい年もこの神さまと一緒にいていきましょう。

〈お祈り〉

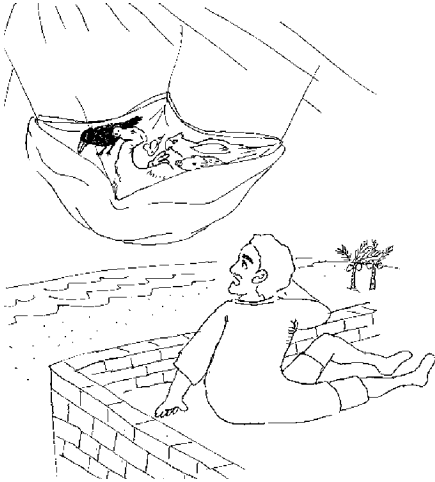
天の神さま、この一年も私たちを守ってくださってありがとうございます。いろいろなことがありましたけれども、いつも神さまは私たちと一緒にいて助けてくださいました。その神さまを新しい年も信じてついていくことができるようにしてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



どんな人をも清くない者とか、
汚れている者とか言うてはならない

〈視聴覚教材〉

不思議な幻の絵。



〈御言葉の背景〉

ステファノの殉教、サウロの回心と、着々と神による世界宣教の準備が進められてきましたが、ペトロから、異邦人に対する偏見が、取り去られなければなりません。神さまは不思議な方法でペトロを導かれます。

〈分級メッセージ〉

☆ポイント聖句：使徒10：15

☆骨子：①導入（ステファノ殉教がもたらしたもの）②ペトロの迷い③幻の意味④コルネリウス家での宣教

☆例：ステファノの殉教以来エルサレムで迫害が始まったのですが、この迫害をきっかけに、弟子達の多くが外国へ逃れ、それぞれの国で、イエスさまの福音が伝えられることになりました。世界宣教の始まりです。さて、ペトロはまだイスラエルの国の中で、迫害の追ってを逃れながら、伝道旅行を続けていました。ペトロは小さい頃から、外国人は罪人であり神さまからは救われないと教えられてきたので、本当に外国人も救われるのだろうかと思っていたからで

す。そんなペトロに神さまは幻を見せました。天が開き、大きな布のような入れ物が、四隅でつるされて、地上に下りてきました。その中にはらくだ、狸、野兔、いのしし、ねずみ、とかげ、やもり、カメレオン、ワシ、トビ、ハヤブサ、カラスなど（レビ11章）が入っていました。それらは、モーセの律法で汚れたものとされ、決して食べてはいけない動物でしたが、神さまは「これらを料理してたべなさい。わたしが清めたのだから。」と言いました。ペトロがこの幻を不思議に思っていると、外国人（ローマ人）のコルネリウスからの使者がペトロを迎えにきました。ペトロの話を知りたいというのです。ペトロはこのとき、さっきの幻が、食べてはいけない動物は、外国人をあらわしていたのだと気づきました。ペトロはコルネリウスの家へ行くと、大勢の外国人がペトロの話を知りたいために集まっていました。ペトロはイエスさまのことを伝えました。そして多くの人が洗礼を受けました。ペトロは外国人も間違いなく救われることがわかったのです。

〈展開の工夫〉

①ガラテヤ3：28をみんなで読みましょう。キリストにあって、すべての人々が一つであることを感謝し、お祈りしましょう。

②百人隊長

聖書には、信仰深い百人隊長がほかにも出てきます。調べてみましょう。

- 僕の癒しをイエスさまにお願いした百人隊長は、イエスさまから「マタイ8：10」と言われた。
- 十字架のイエスさまを見張っていた百人隊長は「マタイ27：54」と言った。
- 皇帝直属部隊の百人隊長〈名前……使徒27：1〉は、船が難破したとき、パウロの命を助けるために「使徒27：42～43」した。

〈ねらい〉

先入観を打ち破る神様の御業に生きる。

〈展開例〉

1. 聖書をもう一度読む

2. 分かち合い

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

Q. ペトロは既に1章8節で、「エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」というイエス様の御言葉を聞いていたのに、何が神様の御業の進展を阻んでいたのでしょうか？
→ユダヤ人が異邦人を汚れている者に見下げていた心の壁。

Q. そもそも神様がユダヤ人を選ばれた理由は何であったでしょうか？ 神様がユダヤ人の祖先アブラハムが召された時の御言葉を読んで、答えて下さい。創世記12章1～3節です。

→アブラハムと彼の子孫であるユダヤ人は全世界へ神様の祝福を伝える祝福の源として選ばれた。ユダヤ人はそのような目的をもった民であった。

Q. 神様はユダヤ人中心の教会の異邦人に対する差別と偏見を克服させるために、何をなさいましたか？

→初代教会のリーダーであるペトロに三度の幻を見せ、同じく幻を見たコルネリオと出会わせた。

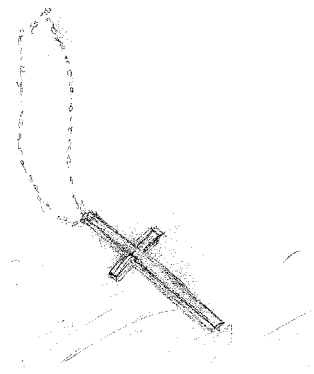
Q. 神様の導きによって初代教会の指導者であるペトロは何を悟りましたか？ 暗唱聖句である使徒10:34を読んでみましょう。

→「そこで、ペトロは口を開きこう言った。『神は人を分け隔てなさらないことが、よく分かりました。』」

ペトロは神様は人を分け隔てなさらないことを教えられました。私達はこれを単なるキリスト教会初期に起きた過去の話と受け取ることはできません。私達自身がいともたやすく人に対して心の壁を築きやすい者であるからです。そしてそれはイエス様を伝えるということに現れます。「あの人は信じないだろう。」「あの人には神様を信じて欲しくない。」そう心の中で、ひそかに思う誰かがいるでしょうか？実は神様はそのように私達が勝手に考えている思いを越えて、何らかの仕方でイエス様を伝えること、教会に誘ってあげてことを願っていらっしゃるのです。

4. お祈り

私達の思いではなく、神様の御心が行われますように。



第7課 キリストの支配 (第五戒)**序：十戒の後半 (隣人愛)**

十戒の後半は隣人との関係を規定しています。私たちの日常の様々な具体的問題と深く関わる戒めばかりです。それだけに答えを出すのが難しい複雑な問題を数多く含んでおり、原則を一律に適用できない多くの例外事項もあります。ですから、後半の学びでは各々の戒めの根本を理解することが何より大切です。

その根本とは、隣人に対する愛です。そして、隣人を愛することに例外はありません。なぜなら、愛こそは神の御心を全うするものだからです (ロマ13:8)。私たちは後半の学びを通して、より深くより具体的に「全生活にわたる感謝」の基準としての十戒の意義を見出して行くことでしょう。

第五戒

「あなたの父母を敬え。そうすればあなたは、あなたの神、主が与えられる土地に長く生きることがができる。」

父母を敬え

箴言1:8、6:20、23:22、シラ3:1-16、
出21:15-17、申命27:16、8:5、出4:22、
詩編27:10、イザヤ49:15、63:16、66:13、
ホセ11:1、マタイ6:32、7:11、ルカ2:51

人間関係において旧約聖書が最も重んじている関係は、まず親との関係です。人生経験に基づく知恵を教える書物には父母に対する多くの教えが含まれていますし、親への不敬に対しては厳罰を持って処するよう律法には規定されています。そもそも第五戒は、小さな子どもたちに対しての戒めなのではありません。小さかろうが大人になろうが、生涯、自分の父母を敬い続けることが命じられているのです。

それではなぜ聖書は親への敬意をそれほどまで重んじるのでしょうか――

第一の理由は、親への敬意は神への畏敬につな

がるからです。子どもは親を選べません。親は、言わば、神から与えられた人々です。私たちは目に見える親への敬意と服従を通して、親を与えてくださった見えない神への畏敬を学ぶのです。

第二に、親を尊ぶことは神の恵みに対する感謝の心を養います。子どもは独りで大きく育つものではありません。母胎の中で生まれお乳を飲んだりおむつを換えてもらったり、親の保護の中で育ちます。たとえ親が年老いても、自分の命を育てくれた人に対する感謝の心を失わない人は、神の恵みに対しても恩知らずとはならないでしょう。

興味深いことに聖書は、親への敬意に関しては、父と母とを全く同等に扱います。どちらかを上にするということはありません。子どもは父にも母にも等しく従わねばならないのです。おそらく、それは、父と母が等しく神の御性質を表しているからでしょう。聖書の神こそが、父の中の父、母にまさる母だからです。主は私たちの保護者であり教育者、模範であり慰め手です。主の厳しさと優しさ・訓練と励ましを、父と母が表しているのです。

別に言えば、このような父と母に等しく敬意を払うことが、“神のかたち”としての円満な人間形成に不可欠なのであり、そのことがひいては他の人間関係一般への基礎となるということです。

秩序の保持～「長く生きることが出来る」ために

ウ大127・129・131、ハイデル104、30周年、
レピ19:32、ヨブ29:16、箴言19:26、
20:20、使徒24:16、ロマ13:1-7、
エフェソ6:2-4、Iテサ2:7、Iテモ2:1-2、
5:1-2、Iペト2:13-20

父と母への尊敬と服従は、神がお与えくださるこの世の社会秩序一般に対する態度へと拡大解釈することができます。父母のみならず、私たちの生まれ育った国や環境、周りの人間関係一切は、必ずしも私たちが意図したわけではありません。私たちは、それらに現された主の深い御旨と摂理とをまずは畏れを持って受けとめるべきです。

親が子どもを養うように、国は国民を守り養う働きをします。一人一人の自由と人権を守り、皆が安心して暮らせるように保障する義務があるのです。私たちもまた上に立つ権威を尊び、為政者のために祈り、社会の平和と正義のために進んで仕えて国民としての義務を果たします。

同様に、すべて上に立つよう召された人々は、目下の人々を愛と祈りをもって守り養い、教え諭し、正当に評価し、彼らに絶えずよき模範を示さねばなりません。目上の人々に対しては、心からの敬意を払い、彼らのために祈り、その模範にならない、命令と助言には服従し、彼らの欠点をさえ忍耐し、分をわきまえて自分自身の勤めを誠実に果たすことが求められます。

こうしてこの世の秩序は保持され、神が整えられた世界で人は「長く生きることができる」ようになるのです。実際、子が親に逆らい、教師が軽んじられ、年配者が顧みられず、無政府状態のような国でどうして平和に暮らすことができるでしょう。

秩序の腐敗～「主が与えられる」権威

ウ大128・130・132、箴言7：21-25、17：25、30：11、ミカ7：6、マタイ10：34-37、23：9、マコ10：29、ルカ14：26、エフェソ6：4、Ⅱテサ2：4、黙示13、ダニエル3：17-18、使徒4：19、5：29

けれどもそれは、あくまでも第一のお方が第一として畏れ敬われる時だけです。目には見えない上なる権威への畏れを失った地上の国は、歪んだ自己愛に支配される世界へと容易に墮落します。

上に立つ者はひたすら自己の栄光・利益・快楽を追求しては安逸を貪り、目下に対しては自分の地位や立場を利用して不当な事柄を要求し、彼らをいじめ・虐待し、彼らの良心を挫いては悪事を奨励し、その他諸々の不正・軽率・無気力によって自らの名誉や権威を損ないます。目下の者も、目上に対する義務を無視し、彼らをねたみ、軽蔑・反抗し、すべて不従順な態度を示して貶めます。

他方、たといよく秩序が保たれていたとしても、この世の権威がすべて主によってゆだねられたものであり、人間自身のものではないことを忘れてはなりません。親であれ国家であれ彼ら自身が神

になってはならず、神にまさって恐れられるべきでもありません。この真理が忘れられた時、家庭は暴力と恐怖による支配の場と化し、国家は国民の自由を奪い人権を抑圧する全体主義へと傾くことでしょう。

自らを神と等しいものとして、私たちを真の神から引き離そうとする権威には、もはや服従する義務はありません。人に従うよりは、神に従うべきです。従順と隷属とは違うのです。

キリストの支配

マタイ28：18、エフェソ1：21、黙示1：5、
□マ14：17、マタイ5：9、45-48、
□コ3：22-4：1、Ⅰテモ2：1-3、テト3：1、
□マ12：16、フィリピ3：20、ウ小102

神はこの墮落した世界をなおも保持し、それを通して人を導き救うために、すべての力と権威をキリストにお与えになりました。それは救うための権威であって減ぼすためではありません。キリストの支配は、愛と恵みによる支配です。主は、私たち罪人に、御自身の聖霊を通して義と平和と喜びをもたらしてください。

ですから私たちは、恐れからではなく主に従うように喜んで隣人に仕えましょう。上に立つ人であれ下にいる人であれ、すべての人を通して働くキリストの支配を見出すことができます。主は、こうして、私たちが静かで落ち着いた生活を保つことができるようにしてください。

とは言え、私たちはこの世に属していません。私たちの国籍は天にあります。そこから私たちの王が来られるからです。私たちはどのような状況に置かれても、キリストの愛の支配を信じましょう。そして、栄光の御国の完成を望みつつ、この世の秩序の中で進んで従順に仕えると同時に、なおそこでもがき苦しむ人々のために祈り、愛の業に励みましょう。そうすれば、あなたは、主が与えたもう永遠の御国で「長く生きることができる」でありましょう。

ディスカッションのために：

1. 親子関係の祝福と難しさは？
2. キリストの支配を見出すことができる時は？
3. 従順と隷属との違いは？

第8課 キリストの命 (第六戒)**第六戒**

「殺してはならない。」

序

創世2：17、4章

命が脅かされている時代です。人間が神から離れて墮落した結果が死であり家庭内における殺人であったように、以後、地上を生きる人の命は絶えず脅かされてきました。しかし今日、命をめぐる問題は、遺伝子操作・中絶・難病・餓死・過労死・自殺・安楽死・暴力・殺人・死刑・テロ・戦争・生態系の破壊等、身近な所から地球規模に至るまでかつてない様相を呈しています。

それだけに、「殺してはならない」という極めて単純な戒めを、神の御意思に沿って学び実践することは急務です。

命は神のもの

創世9：4-6、ヨブ12：9-10、エゼ18：31-32、
ヨナ4：11、使徒15：29

十戒後半の戒めは、第五戒を前提としています。とりわけ、第六戒は、最も自然に第五戒から導き出される戒めであると言えます。なぜなら父母に対する敬意は、究極的には、私たちに命を与えてくださった方への畏れと感謝に基づくものだからです。

すべての命は神のものである。したがって、命を勝手に殺すことは何者にも許されない。これが、聖書の大前提です。第六戒は、殺さない方がよいとか殺すのは倫理的・道徳的に善くないとかではなく、創造者の命令として「殺してはならない」のです。創造者が命を与えたものは創造者の意思によって存在しているのですから、人であれ動物であれ、それらから身勝手に命を奪うことは許されません。

逆に言えば、神はお造りになったものすべてが生きることを欲しておられるのであって、それが創造者の意思であり愛なのです。ですから私たち

は、この方を畏れその恵みに感謝するところからすべてを考えて行かねばなりません。神を畏れることが、命を畏れることの根拠です。

神のかたち

創世1：27、2：7-17、4：15、6：5-7、
9：4-6、レビ19：17-18、マタイ5：21-22、
Iヨハネ3：15、ハイデル106

人は、造られたものすべての中にあって、特別な位置を占めています。神のかたちを帯びる者として、神の命を吹き入れられて造られたからです。人の命は神の愛が詰まった命なのです。ですから、人は、神と離れて生きては行けません。

ところが人は、神よりも自分、命よりも死を選びました。死の危険を冒してまで、自分を愛する道を選んだのです。神への畏れと愛を失った人間が、被造世界に対しても隣人に対しても、そして自分自身に対してさえ暴力的かつ破壊的になったとしても、不思議はないでしょう。それは何より内面において壊れてしまった結果です。肉体的に死ぬ前に、心において死んでしまったのでした。

それでもなお、人は神のかたちを帯びています。ですから、私たちは、すべての人を（それがどのような人であれ）畏れ敬わねばなりません。逆に、憎しみやねたみ等、すべて人を生かそうとしない思いは殺人の根に他ならないのです。

命の回復

創世9：15、エゼキ47：1-12、ヨハネ1：4、
マタイ11：5-6、IIテモテ1：10、
Iコリ15：45、ヨハネ3：5、ロマ6：11

殺伐とした命なき世界を、なおも神は生かす道をお選びになりました。万物を再生するために、神の命そのものであるお方をこの世にお遣わしになったからです。このお方が、「命」の何たるかを私たちに現されました。この方に現された命こそ、人の光なのです。それは神とともに生きる命です。主イエスが病める者をいやし、貧しい者を助け、死人を生かしたのは、そのためでした。

ところが、その命の主をさえ、人は暴力によって死に至らしめました。にもかかわらず、全能の神の救いは人の罪をはるかに超えて余りあるものでした。御子の死が人の救いとなったからです。人間の暴力のただ中に十字架は立ったからです。その上御子は、死の力そのものを打ち破って不滅の命を現されました。この世界をもうひとたび神の命の世界として回復させるためです。

主は、命を与える霊です。かつて神の愛の息吹を吹き入れられて生きる者とされたように、人は聖霊の息吹によって生まれ変わります。私たちは、罪に染まった古い自分に死に、キリストと結び合わされた新しい命に生きることによって造り変えられて行くのです。

平和を実現する

マタイ5：9、ロマ8：14、14：17、ウ大135、
ハイデル105、エフエ2：14、ルカ10：29 - 37、
60周年、イザヤ2：4-5、11：6-10、
黙示21：3-4

神の霊によって導かれる者は皆、神の子です。そして、この神の子たちによって実現される平和こそ、神の命が満ちている世界です。キリストと結び合わされた私たちは、すべてを生かそうとなさる神の御業に様々な仕方で参与します。

何より自分自身の中に心の平静や快活さを保ち、怒りや憎しみなどの激情を抑え、食べ物・飲み物・睡眠・労働・娯楽を適度に用い、命を損なうような機会・誘惑・習慣を避けることです。

隣人に対しては、思いやり・愛・同情・柔和・温和・親切・礼儀正しさをもって接し、互いに赦し合い、とりわけ弱い人や苦しむ人を助けることです。

また、個人のレベルでも社会・国家のレベルでも、暴力を誘引するようなあらゆる思想や企てに抵抗し、絶えず和解と平和を希求し、争いを回避するためのあらゆる手立てを講ずること、敵をも愛する愛によって悪に打ち勝つこと、です。

さらに、今日、被造世界を保全し命を育む環境を整えるためのあらゆる工夫や努力を重ねることも無くてはならない重要な使命でしょう。

死の陰の谷

詩編23：4、サム下24：13、Ⅱコリ12：7、

マタイ10：34-39

神の国の完成に至るまで、この世は危険や脅威、混乱や矛盾に満ちた「死の陰」を免れません。

戒めにあからさまに違反する事柄があります。一度に大量の人命を殺戮する兵器の開発や使用、自己中心的な目的に基づいた戦争や紛争、身勝手な肉体的・精神的暴力、安易な墮胎や安楽死、等。

私たちが間接的に罪に手を貸す場合があります。貧困や病や飢餓に苦しむ人々への無関心、命を損なう危険のある状態の放置、大量消費などによる地球環境の破壊、等。

判断が分かれる事も多々あります。多くの国民を守るための防衛、危険に陥った母親と胎児の救命の選択、脳死状態の家族に対する延命措置、等。

時に、神御自身によって、戦いや病や死が与えられることさえあると聖書は教えています。そもそもキリストに従うこと自体が十字架の道であると、主は明言しておられるのです。ですから、この世界に絶対平和や無病息災を求めることは、残念ながらできません。それはただ、神によってのみもたらされる終末の姿なのです。

生きるのはキリスト

マタイ7：14、ヨハネ3：16、ハイデル1、
フィリピ4：4

多くの悲惨が世界を覆っています。私たち自身、何度となく過ちを犯します。命を生き・生かすことは、それほどに困難なことです。命に至る門は狭いのです。

けれども、死の暗黒のただ中に十字架が立っていることを思い起こしましょう。復活の主は、今も生きておられます。神はこの世を愛されました。私たちのような者がなお生きることを肯定なさいました。私たちは生きるにも死ぬにも主のものなのです。ですから、私たちは喜んで生きましょう。「御国を来らせたまえ」と祈りながら。

ディスカッションのために：

1. 命にまつわる様々な思いを語ろう。
2. 命の軽視の背景にあることは何か。
3. この世とキリスト者の生死観との違いは？

第9課 キリスト者と性 (第七戒)

第七戒

「姦淫してはならない。」

序

「姦淫」という言葉自体がすでに死語になっているほど、今日、性にまつわる情報は巷にあふれ倫理などはあっても無きが如しです。しかし、そうであればあるだけ、この戒めの正しさと重要性はいっそう高まってきていると信じます。私たちが安心して聞かねばならない戒めです。

第六戒は神によって与えられた命の尊厳を教えました。第七戒は、個々人の尊厳を踏まえた上で、神がお造りになった二つの性について、とりわけ夫婦関係・結婚関係の重要性を教えます。

そもそも命は結婚関係の中で生み出され育まれるものです。その意味でも第六戒と第七戒が密接に結びついていることがわかるでしょう。

男と女

創世1：27-31、2：18-25、箴言5：18-19、雅歌

神は人を御自分にかたどって男と女とに創造されました。男だけでも女だけでもない。男と女と二つの性を持つ者たちがいて初めて、神のかたちは完全に現されます。ですから、人は、男であろうと女であろうと、結婚するしないにかかわらず、それぞれの性を尊んで共に生き共に助け合うことによって神の栄光を現すものなのです。

結婚は、そのような男女の共生・協働における一つのかたちです。とりわけ、男女の性が一体となるのはこの関係においてのみです。二つの性は、結婚において、魂と心と体の調和の中で人格的に結合します。神はこのような性の交わりを豊かに祝福されました。

ですから、二つの性が互いに惹かれあうことも交わることも、それ自体は罪ではありません。神から与えられた性は喜びであり祝福です。問題は、それをどのように正しく用いるかということです。

結婚の意義

マラキ2：13-16、マタイ5：27-32、19：3-6、
エフェソ5：32、ヘブライ13：4、
Iコリ13：1-13

聖書は、結婚関係を損なうあらゆる言動を厳しく禁じます。イエスもまた、「心の中」の姦淫や安易な離婚を姦淫と同罪であるとおっしゃり、神が結び合わせたものを人が離してはならないとお命じになりました。

結婚は、なぜそれほど大切なのでしょうか。それは第一に、結婚関係が隣人愛の最も基本的な表現の場であるからです。子供がいるかどうかは、必ずしも結婚生活の本質ではありません。何よりそれは、隣人愛が実際かつ具体的に学ばれて行く場なのです。私たちは、結婚関係を通して、神から与えられた(何人でもではない)一人の人を身も心も長所も短所も丸ごと受け入れることを学びます。また、互いに忍耐し合い赦し合いながら、人間としての成長を学びます。そうして私たちは、一時の恋愛感情や肉のな愛とは違う愛を学んで行くのです。

だからこそ、聖書はしばしば、神と信仰者との契約関係を結婚になぞらえるわけです。これが、結婚が重要視されることの第二の理由です。誓いに基づく人格関係、互いに対する誠実さ、生涯にわたる忠実さ、全人格的な愛、赦す愛、忍耐する愛、献身愛。それらはすべて神が御自分の民に対してお示しくださる聖なる愛のかたちだからです。

人間の堕落・結婚の崩壊・性の倒錯

創世1：27-31、3：12-16、サム下11章、
13：1-22、エゼ23章、レビ20：10-21、
Iコリ6：18、ロマ1：26-27

「これこそわたしの骨の骨、肉の肉！」と感嘆の声を上げて最高の幸福を手にしたはずのアダムが墮落後どのように豹変したか、私たちは知っています。アダムにとって自分の妻は「あの女」に過ぎなくなりました。男と女の調和によって表されるはずの神のかたちはもろくも崩れました。男

は女を支配し、命を生み出す出産さえもはや苦痛に過ぎない。一つの家庭の崩壊が世界の崩壊につながって行きます。人間の墮落と悲惨が、まさにこの結婚関係のただ中で起こったことの意味を深く思いめぐらすべきでしょう。

1. 結婚関係が神によって定められた恵み深く麗しい制度であればあるほど、そこに現われる人間の罪深さも際立ちます。結婚関係がいつも簡単に崩れ去る社会と隣人愛からは程遠い自己中心的な社会とは、表裏一体です。

姦淫の罪は、結婚関係に対する裏切り行為です。自分の一時の感情や欲望にほだされて、簡単に結婚相手を裏切る者にどうして隣人を愛することができるのでしょうか。また、自分の好き嫌いで相手を簡単に変える人に、どうして人格的な成長を期待できでしょうか。自分の目の前にいる人を愛することができなくて、どうして見えない神を愛することができるのでしょうか。

2. 健全な性が祝福であるのとは反対に、歪んだ性は多くの悲惨をもたらします。それは神の私たちを損ない、人はただ獣や物のように扱われます。性の商品化や物質化とはそのことです。そこには心や魂はなく人格を重んじることありません。あるのはただ、肉の欲のみです。倒錯した性は、隣人のみならず自分自身の人格をも深く傷つけ、その力が強いほど魂や心を蝕みます。

他方で私たちは、性の倒錯と障害とを混同してはなりません。生まれながらに心と体の性が調和しない人たちがいます。同性愛の行為そのものは性の倒錯として退けねばなりませんが、障害を持つ人々に対して教会は深い理解を示し特別な配慮をしなければなりません。

聖霊の宮

ルカ7：36-50、ヨハネ8：11、Iヨハネ4：10、ハイデル1・108-109、Iコリ6：19-20、エフエ5：3-5

この破れた世界において、結婚関係や性の倒錯の罪は重く深刻です。けれども、それがこの世の腐敗のすべてではありません。何より、キリストの十字架の下で赦されない罪などないことを覚え

ましょう。

第七戒が持つ意味は、年を経るごとによって行くかもしれません。若い体の欲をコントロールすることの難しさ、若気の至りに対する後悔の念、結婚生活の現実への失望、この世の誘惑との戦い、そして夫婦関係の危機。人間の弱さも罪もありのままに出してしまう夫婦の間に、家庭のただ中に、十字架が立たねばなりません。この十字架の前で私たちは絶えず悔い改め、主の赦しを請うのです。そうして何とか、主がお求めになる愛の高みへ成長して行けるように努めましょう。

私たちはそのためにこそ、主の尊い血によって買い取られたのでした。私たちが真の愛によって育まれる、健全な人間になるためです。私たちの体も魂も、もはや自分のものではなくキリストの霊の宿る神殿です。私たちはこれらを汚すことのないように、自分の体と魂を貶めるような思いや会話や振る舞いから遠ざかるようにしましょう。

小羊の婚宴

Iコリ7章、マタイ19：12、22：30、コロ3：5、ガラ3：28、黙示19：6-8

キリスト者になったからといって、性が無くなるわけでも男女の関係が無くなるわけでもありません。性は、キリスト者の生の一部です。私たちは性を持つ存在として、これを本来の喜びに満ちたものとして生かして行くことが求められます。大切なことは、結婚関係の有無にかかわらず、男性また女性として、互いに助け合い尊重し合って、ひたすら主に仕えることです。

神の祝福としての性と結婚は、しかし、地上に属するものです。それは、永遠に至るキリストとの交わりにまさるものではありません。キリストにあっては男も女もない。人は皆、天使のように主に仕える者とされるでしょう。私たちは、小羊キリストとの婚宴の日を望みつつ、聖なる行いによって花嫁の装いを整えてまいりましょう。

ディスカッションのために：

1. 結婚関係以外の性的交わりの問題は何か？
2. 性の倒錯と芸術との違いは何か？
3. 結婚関係の誘惑や危機を避けるためには？

いのちのパン

「イエスは言われた。」



「私が命のパンである。わたしのもとに来る者は決して

餓えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。」



(ヨハネによる福音書 第6章35節)

愛する日曜学校のお友達へ！「いのちのパン」を読んでいるかな。

「子どもカテキスム」と「聖書」を開いて、毎日、「いのちのパン」してくれるとうれしいな。

読んだあとには、お祈りしてね。心は元気もりもりになるよ。

時間のあるお友達は、書いてある御言葉の前と後ろもあわせて読むと、かんペキです。

生まれてはじめてお祈りするお友達がいたら、こんなにうれしいことはありません。

お祈りはひとごと なんかではありません。

神さまは、あなたの名前を呼んでおられます。

イエスさまはあなたのために お祈りしていただきます。

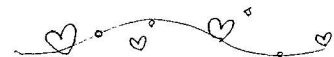
だからあなたも、神さまを「天のお父さま」と呼んでみてください！

まちがいなく、天のお父さまはあなたの小さな声、小さなお祈りを聴いていてくだ

さいます！！ お友達と、先生といっしょに、「いのちのパン」でお祈りしてゆこうね！！



今週も、イエスさまの祝福が愛するお友達の上にゆたかにありますように！



いのちのばん

10月1日（月）問30 ガラテヤ3章5節
福音を聞いて信じたから

神さまの恵みは、イエスさまの教えやイエスさまが私たちのために何をしてくださったのかを聞いて、信じたから与えられました。昨日の礼拝のお話を思い出して、十字架のイエスさまに感謝しましょう。そして、今週、あなたのお友達にイエスさまや教会のことを教えてあげてね。



10月4日（木）問31 ローマ8章15節
霊によって～「アッバ、父よ」と

天のお父さま、神さまのことをこのようにお呼びできることをありがとうございます。御子イエスさまの十字架のおかげです。イエスさまを信じているから呼べるのです。どんなときでも「天のお父さま」と素直にお呼びできるように、聖霊なる神さまを与え続けてください。アーメン。



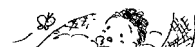
10月2日（火）問30 ガラテヤ2章20節
キリストがわたしの内に生きて

イエスさまを信じている人は誰でもイエスさまと一緒に生きているのです。イエスさまがあなたの内に住んで、生きていてくださるのです。それが恵みを受けているということそのものです。今日もあなたと一緒にです。



10月5日（金）問31 ガラテヤ4章6節
「アッバ、父よ」と叫ぶ御子の霊

「アッバ」って、赤ちゃんが最初に出す声に似ていますね。神さまを信じることは当たり前のこと。だって、僕たち私たちは神さまによって命を与えられたのですから。なによりも信仰によってイエスさまと一緒に結ばれて、神さまの子どもにさせていただいたのですから。



10月3日（水）問30 エフェソ2章8節
神の賜物です

お祈りするとき、手をあわせるでしょう。イエスさまを信じている人人は誰でもイエスさまとぴったりあわさっているのです。イエスさまがあなたをギュッとつかまえて、あわせられているのです。神さまの力が一方的に働いて、まったく不思議ですが、そうなっているのです。神の賜物です。



10月6日（土）問131 ローマ5章11節
わたしたちは神を誇りとして

君はイエスさまを信じていますね。それは神さまの御子のイエスさまの霊、聖霊を心に注がれているからです。だから、神さまのことが大好きでしょう。神さまのことを喜び、誇りにできるでしょう。すごいね。嬉しいね。



いのちのばん

10月8日(月) 問32 ローマ6章4節
新しい命に生きるためなのです

人間の命には二つあります。一つは目に見える体の命です。心臓が動いているってことです。もう一つはイエスさまを信じて与えられた、目に見えない新しい命です。永遠の命です。いちばん大切な命です。イエスさまを信じているあなたは、この命で生かされているのです。



10月11日(木) 問33 エフェソ4章24節
正しく清い生活を送るよう

イエスさまを信じる生活はどんな生活でしょうか。「正しく清い生活」です。それはイエスさまに見ることが出来るものです。イエスさまを見つづけてごらん。イエスさまに似てきます。太陽を追いかけて咲くひまわりの花のように。



10月9日(火) 問33 ローマ8章29節
御子の姿に似たものにしよう

天のお父さま、わたしはときどきよい子でいれますが、意地悪な心や汚い思いをもったり、悪いことをするときも多いです。それでも神さまはわたしのことを愛し続けて、イエスさまに似せようとしてくださることを感謝します。



10月12日(金) 問34 ヨハネ1章7節
わたしたちが光の中を歩むなら

イエスさまを信じる僕たち私たちはイエスさまと一緒に歩いて行きます。ですから、ひとりぼっちではありません。日曜学校のお友達、先生たちも一緒です。神さまは、僕たち私たちが教会の中で、教会と一緒に歩めるようにしてくださっています。



10月10日(水) 問33 エフェソ4章22節
古い人を脱ぎ捨て、心の底から新た

汚れた服や下着を着ていると気持ち悪いよね。洗濯してもらった真っ白なパンツをはくと気持ちいいね。イエスさまを信じているお友達は、汚れた心を毎日脱ぎ捨てて、イエスさまの心を着せられて、今日の日を新しく過ごせるのです。気持ちいいね。




10月13日(土) 問34 ヘブライ2章12節
兄弟たちに知らせ、集会の中で賛美


天のお父さま、明日は教会に行つて礼拝をささげます。どうぞみんながそろって集れるようにしてください。新しいお友達が来れますように。イエスさまを信じるお友達が与えられ、声をそろえ、大きな声で神さまのお名前を賛美できるようにしてください。



いのちのばん

10月15日（月）問35 黙示録22章20節
わたしはすぐに来る 

イエスさまのお約束の中で、まだ実現していないことが一つだけあります。もう一度、この地上に来てくださるのです。「また明日遊ぼうね。約束だよ、あの場所で絶対待ってるからね」って言って、忘れちゃえますか？ イエスさまは、絶対忘れず楽しみにして戻って来られます。

10月18日（木）問36 コリント二5章1節
天にある永遠の住みかです 

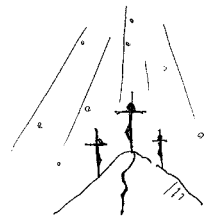
わたしたちの体は大人になるまで少しずつ大きくなります。でも、やがて止まります。それどころか、いつか死んでしまいます。でも、イエスさまを信じる人は、それで終わりません。天にある永遠の住みかに生きるのです。夢のように美しい場所でイエスさまと一緒にいられます。

10月16日（火）問35 ヨハネ8章14節
どこから来て、どこへ行くのか

「よーい、どん」と走り始めても、ゴールが分からなかったら、途中でいやになっちゃうでしょうね。イエスさまを信じている人生のゴールは天国です。イエスさまが来られ、今戻っておられる場所です。そこに僕たち私たちも必ず行けるのです。天国へ行進するのがイエスさまの教会です。

10月19日（金）問36 ルカ23章43節
今日わたしと一緒に樂園にいる


イエスさまの十字架の隣にいた犯罪人の一人は、十字架の上でイエスさまを信じることができました。そのときイエスさまは、死んだらただちに一緒に天国に行けると約束してくださいました。



10月17日（水）問35 テトス2章13節
栄光の現われを待ち望むように

イエスさまが再びこの地上に来られる（再臨）日は、天の父なる神さまだけがご存知です。「その日を待ち望みなさい」と言われた御言葉をありがとうございます。この希望をもって、今日の一日を喜んで過ごせるようにしてください。



10月20日（土）問36 テサロー4章16節
まず最初に復活し 

死んだら天国、その通り。でもその先があります。イエスさまは人間の中で最初に復活されたお方です。イエスさまだけでなく、イエスさまと一つにつながっている僕たち私たちも、イエスさまがもう一度来られる日にガバガバと、「芋づる式」に体が復活させられるのです。楽しみだね。

いのちのばん

10月22日 (月) 問37 テサロー5章18節
どんなことにも感謝しなさい

イエスさまを信じた人は、ただイエスさまのために生きる人になります。聖霊なる神さまのお働きによってイエスさまに似せられるからです。ただ感謝することだけが、わたしたちの責任なのです。



10月25日 (木) 問38 ローマ3章31節
律法を確立するのです



「心から」ありがとうございます！とイエスさまに言えたら、嬉しくなります。それだけでなく、従いたくなります。神さまがそのような心を与えてくださるのです。どのように従ったらよいのかも、聖書や十戒によって前もって教えてくださっています。読めば御心が分かるのです。♥♥♥

10月23日 (火) 問37 テサロー5章16節
喜び・祈り・感謝しなさい ☆

どんなことにも感謝できたら、すばらしいよね。でもすぐに「無理！」って思う？ イエスさまに救われたことを喜びることならできるでしょ？ その喜びは、お祈りすればするほど深くなります。感謝はイエスさまがくださった救いの御業を思うところから生まれます。だから祈りましょう。

10月26日 (金) 問38 ミカ6章8節
へりくだって神と共に歩むこと

どうしたら神さまに喜ばれるでしょう。それをいつも考えることが信仰です。そして、聖書には神さまが何を求めておられるのか、ちゃんと書いてあります。自分を楽ませるのではなく、相手が喜びを考える人が、本当に感謝する人の姿です。正義、愛、そして神に従うことです。

10月24日 (水) 問37 エフェソ2章10節
善い業を行って歩むのです

イエスさまが十字架で血を流してくださいのおかげで、神の子として救われたわたしたち。そのイエスさまにあなたが言うべきこと、いちばん言いたいことを一緒に言いましょ。心をこめてひと言、「ありがとうございます！」



10月27日 (土) 問38 サム上15章22節
聞き従うことはいけにえにまさり

旧約聖書の時代の礼拝は、自分の罪の身代わりに動物を殺してお祈りすることが必要でした。罪とはそれほど恐ろしいことなのです。しかし、もっともっと大切なことがあります。御言葉に従うことです。



いのちのばん

10月29日（月）問39 出エジ31章18節
神の指で記された石の板

十戒、じっかい、ジッカイ！ これから学ぶ十の言葉は特別！ です。この御言葉だけは、人間ではなく神さまが直接に、紙にではなく石の板に刻みつけられたからです。この中にあなたがどのように神さまに感謝をあらわしたらよいのかが書いてあります。覚えられたら、すごいな。うれしいな。

11月1日（木）問40 マルコ12章30節
心～精神～思い～力～主を愛し

神さまは唯一の主です。比べることができない、ただお一人の真の神さま、王さまという意味です。そんなえらい神さまだから「愛しなさい」と一方的にお命じになられるのでしょうか。いいえ、この神さまこそ、そのすべての力を注いであなたを愛しておられます。だから、愛するのです。

10月30日（火）問39 申命記4章13節
主はそれを二枚の石の板に書き記され

「子どもカテキズム」に書かれています。ことを教理と言います。真の神さまを人間の空想で「作り出す」ことはできません。人間の頭で「わかる」ものでもありません。だから、神さまは石の板に、それもご自分で書いてくださったのです。だから御言葉には間違いがありません。

11月2日（金）問40 マルコ12章30節
愛は律法を全うするものです

神さまが求めておられることは、ただ感謝すること。感謝は神さまの御心に従うこと。その御心は十戒に記された掟、つまり律法です。神さまと人を愛するとき、律法は守られるのです。今日の一日、優しい心と行いで過ごせますように。



10月31日（水）問39 コリント二3章3節
石の板ではなく人の心の板に

天のお父さま、わたしの心の板に神さまの御言葉を、聖霊によってどんどん書き込んでください。神さまに感謝する心であふれて、それを行うことができるようにしてください。



11月3日（土）問40 コロサイ3章14節
愛は、すべてを完成させるきずなです

天のお父さま、あしたは日曜学校です。世界中で礼拝がさげられます。世界中の人たちがイエスさまの愛を信じて、感謝して、お互いを愛しあえるようにしてください。日曜学校のお友達が休まず来れますように。新しいお友達が来れますように。先生がたの準備をお守りください。

いのちのばん

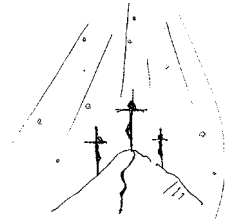
11月5日（月）問40 マルコ12章31節
隣人を自分のように愛しなさい

あなたは自分のこと、好きですか。神さまはあなたのことが大好きです。きっと神さまも自分も好きになるでしょう。あなたは神さまが大好きですか。神さまはあなたのお友達のことが大好きです。きっとあなたも大好きになるでしょう。



11月8日（木）問41 出エジプト20章2節
わたしは主、あなたの神

天の神さま、わたしは神さまが大好きです。わたしのすべては神さまのもので、いつまでもわたしの神さまでいつづけてください。そうすれば、わたしはいつまでも神さまの子どもでいられます。



11月6日（火）問41 出エジプト20章2節
わたしは主、あなたの神

十戒の「前書き」はとても大切です。この言葉を語ってくださる神さまの自己紹介だからです。神さまご自身が「わたしは主」と高らかに宣言されます。だから間違いありません。僕たち私たちの神さまだけが、唯一の本当の「あるじ」「王さま」なのです。

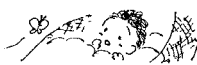


11月9日（金）問42 出エジプト3章10節
イスラエルの人々をエジプトから

イスラエルの人たちはエジプトで奴隷とされ、つらい仕事をさせられていました。神さまは、そんな彼らを見、その悲鳴を聞いていてくださいました。ついにモーセを選んで、エジプトの国、奴隷の家から脱出させてくださったのです。こうして彼らは神さまの民になりました。

11月7日（水）問41 出エジプト20章2節
わたしは主、あなたの神

きれいなドレスを着た花嫁さんに泥だらけのかわいさで近づいたら叱られますね。それなら、美しくきれいな神さまのところに、あなたは近づいて行けますか？ 大丈夫。「わたしはあなたの神さまだよ」と、神さまの方から近づいてくださったからです。



11月10日（土）問42 出エジプト2章10節
彼をモーセと名づけて

モーセさんが生まれた頃、エジプトの王さまがイスラエルの男の赤ちゃんをナイル川に放り込めと命じました。川に流されたモーセは、エジプトの王女さまによって引き上げられました。実は、神さまが拾ってくださったのです。私たちが神さまに拾われ、今、神さまの皇太子になったのです。

いのちのパン

11月12日（月）問42 ヨハネ6章32節
モーセが～パンを～与えたのではなく

エジプトから荒れ野に連れ出されたイスラエルは、食べるものがなく、死にそうでした。しかし神さまは天からパンを与えられました。今では、いのちのパンである御言葉を与えてください。今週も「いのちのパン」を読んで、天からのまことのパンそのもののイエスさまを礼拝しよう。

11月15日（木）問42 ヨハネ10章1節
羊の囲いに入る

羊たちは羊飼いと一緒にいるかぎり、また羊の囲いの中にいる限り、何の心配もなく草を食べ、歩き回って遊べます。十戒は、青草の原に設けられた囲いです。十戒を聞き、それに従うとき、安心して過ごせます。



11月13日（火）問42 ヨハネ3章14節
モーセが荒れ野で蛇を上げたように

荒れ野で神さまに文句を言ったイスラエルの人々は、毒蛇にかまれました。神さまはモーセが作った青銅の蛇を仰ぎ見れば死なないとおっしゃいました。それはやがて十字架につけられるイエスさまのことで、イエスさまこそ、私たちが罪の奴隷から解放してください。救い主です。

11月16日（金）問42 ヨハネ14章6節
わたしは道であり、真理であり、命

羊たちは十メートル先もかすんで見えないほど目が悪いのだそうです。だから道に迷ってしまうのです。わたしたちが天国に行くためには、道とさせていただいたイエスさまを信じることです。信じて生きる人のための、天国への道しるべが十戒です。皆で通って行こう。

11月14日（水）問42 ルカ1章74節
こうして我らは敵の手から救われ



十戒は、わたしたちを命がけで愛してください。神さまの、まるでやけどするくらいの熱い愛であふれています。この言葉が聞こえるところで生きるなら、あなたはいつまでも神さまの愛の真ん中で過ごせます。



11月17日（土）問16 ヨハネ8章32節
真理はあなたたちを自由にする

小さな金魚蜂の中ですいすい泳いでいる金魚を見て、「水の中で泳いでばかりいないで、出ておいでよ」と金魚を取り出したら……すぐに死んでしまいますね。金魚は水槽の中でだけ自由に楽しく泳げるのです。人間は、神さまと十戒の中でだけ、幸せに自由に生きられるのです。

いのちのばん

<p>11月19日（月）問44 マタイ4章10節 神である主を拝み、ただ主に仕えよ</p> <p>イエスさまがいよいよ伝道のご生涯を始められるとき、悪魔は荒野で地上の宝物を見せて、「わたしを礼拝すれば全部をあげるよ」と誘惑しました。第一戒を破らせようとしたのです。もっとも大切に、すべての土台、出発点となる戒めです。イエスさまによって神さまを礼拝しよう。</p>	<p>11月22日（木）問46 ローマ1章20節 目に見えない神の性質</p> <p>「神さまがいるなら目に見せて」なんて言われても大丈夫。真の神さまは、手で触ったり目で見ることにはできません。いちばん大切なものは目に見えないのです。あなたの心や愛も目に見えません。神さまこそ目に見えません。決して見えるカミを拝んではなりません。</p>
<p>11月20日（火）問44 出エジプト20章3節 他に神があってはならない</p> <p>あなたはいつでも神さまのみ顔の前にいます。反対から言うと、あなたの目の前にはいつも神さまがおられるのです。ですから、神さまでないものを拝んだりするなら、あなたの目の前におられる神さまに対してどんなに愚かで失礼で恐ろしい罪を犯しているかが分かるでしょう。</p>	<p>11月23日（金）問46 ローマ1章23節 人間や鳥や獣や〜に似せた像と</p> <p>目に見えない真の神さまを信じようとしなない人たちは、自分の願いを實現させようとして目に見える像を造って拝むことが大好きです。でも、木や石や鉄でつくられたカミは動くこともできません。運んでもらうだけです。救えるはずがありません。</p> 
<p>11月21日（水）問44 詩編81編10節 異教の神にひれ伏してはならない</p> <p>世の中には数々のカミがいます。「八百万の神」！というほどです。すべて人間が自分たちの都合にあわせてつくりあげたものです。ばかばかしいものです。真の神さまを知ることができたわたしたちは最高に幸せです！</p> 	<p>11月24日（土）問46 ヨハネ4章24節 神は霊である。霊と真理をもって</p> <p>明日はいよいよ礼拝です。礼拝のためにいちばん真剣になっているのは誰ですか？ 牧師先生ですか？ いいえ、神さまご自身です。礼拝こそ人生の目的です。天のお父さま、自分を喜ばせるためではなく、神さまに喜んでいただける正しい礼拝をささげさせてください。アーメン。</p>

いのちのばん

11月26日(月) 問48 詩編124編8節
わたしたちの助けは～主の御名に
 聖書の中にいったいどれくらい「御名」という文字が記されているでしょうか。数え切れないほどです。神さまのお名前。それは神さまそのものことです。信仰をもってお名前をお呼びすれば、神さまは必ずそこに共にいてくださいます。わたしたちの助けは主の御名にあるのです。

11月29日(木) 問50 創世記2章2節
神は、～仕事を離れ、安息なされた
 神さまは、天地を創造された後、第七日目に安息されました。ですから第七日目の土曜日を安息日、礼拝する日と定められました。そして、イエスマがお墓の中から甦られたときから、日曜日が新しい安息日、僕たち私たちの救いと永遠の命の「お祭り」、つまり礼拝する日となりました。

11月27日(火) 問48 マタイ6章9節
御名が崇められますように
 イエスマが教えてくださった主の祈りの最初のお祈りです。神さまのお名前をあげた最大の人はイエスマです。わたしも私のすべてで「神さまを神さまにする」、このいちばん大切なことを毎日祈り求めます。



11月30日(金) 問50 ヨハネ4章12節
神を見たものはいません
 神さまと神さまを信じる心は目に見えません。でも信じている人は見えます。神さまを神さまとする人は、日曜日に教会で礼拝をささげる人です。そうやって神さまは自らをあらわしてください、私たちは神さまを証しするのです。



11月28日(水) 問48 ローマ10章13節
主の名を呼び求める者は～救われる
 神さまの御名を崇めるためにいちばん大切なことは、愛するイエスマの御名を心から信じてお呼びすることです。そうすれば、お名前の意味どおり「罪から救われ」ます。けれども、命がけで恵みを注いでくださる神さまは、ふざけたり、わざとまちがえて御名を唱える人を罰しなさいます。

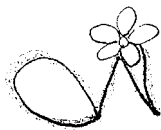
12月1日(土) 問50 ヘブライ11章16節
天の故郷を熱望していた
 神さまの安息はもともと天国にあるものです。しかし、礼拝式のなかでも味わえます。主の日の礼拝式は天国の礼拝への窓です。そこから命と喜びの光が射し込みます。天国を自指して歩む私たちは、主の日の礼拝式を自指して歩みます。その人は必ず天国へと到着させられます。

いのちのばん

12月3日（月）問52 エフェソ6章1節
両親に従いなさい
 「お誕生日おめでとう！」と言われたとき、お父さんお母さんに「生んでくれ、育ててくれてありがとう！」って言ったことありますか？ 神さまの深い愛のご計画であなたに両親が与えられたことを感謝しましょう。「こうしなさい」と言われたら、神さまを信じるゆえに従ってくださいね。

12月6日（木）問54 マタイ5章21節
兄弟に「ばか」と言う者は
 僕たち私たちの中で人を殺したことがある人は一人もいません。でも、心の中で、言葉で、お友達のことを憎んで「ばか」って言ったことはありませんか？ イエスさまは、「神さまの前ではそれも『人殺し』になります」と教えてくださいました。私たちは人殺しですか？ 赦しを祈り求めましょう。

12月4日（火）問52 ペトロ2章17節
すべての人を敬い
 「父と母を敬いなさい」という神さまの厳かな命令には、「長く生きることができると祝福の約束が添えられています。神さまと人の間では、神さまを第一にすること。人と人との間では、両親をはじめ先生方やお友達を大切にすることが大切です。



12月7日（金）問54 ヨハネ10章11節
良い羊飼いは、羊のために命を捨てる
 九十九匹を野原に残して、迷子の一匹の羊を探しに出て行かれたイエスさま。その一匹とはぼくのこと。十字架の上で命をお捨てになられたイエスさま、僕の命はそんなに大切ですか？ 僕の命も友達の命も、どれだけ大切なのか、わかりました。



12月5日（水）問52 ローマ12章5節
人は皆、上に立つ権威に従うべき
 天のお父さま、神さまが世界をおつくりになられ、国々を建てられました。人間が平和に、幸福に暮らせるようにと政治家たちをお立てになりました。どうぞ政治家や専門家、神さまからの権威を受けた人たちを祝福し、その大切なお仕事を正しくできるようにしてください。

12月8日（土）問54 ヨハネ20章28節
あなたがたは～人を殺します
 今も世界中で人と人が殺しあっています。日本でも毎日殺人事件が起こります。何かを手に入れようとして人を殺します。間違った動機で願うからです。神さま、何を神さまに願えばよいのかを教えてください。人を殺さない世界になるように、わたしから始めさせてください。

いのちのばん

12月10日(月) 問56 創世記2章18節
彼に合う助けける者を造ろう

アダムは最初、独りでした。神さまはアダムのためにエバを与えてくださいました。初めてエバをみたアダムは、大好きになって、「わたしの骨の骨、肉にくの肉」と言いました。神さまは、二人が愛し合うことをとても喜んでくださいます。神さまに喜ばれる二人でいることが大切です。

12月13日(木) 問58 ペトロー2章9節
聖なる国民、神のものとなった民

「人のものを盗んではいけない。」常識かもしれないですが、これは神さまの戒めです。「すべてのものは神さまのもの」ということです。あなたの「もの」は「あずかっている」ものなのです。ですから、自分のものも人のものも大切にすることと、神さまのために用いることが必要なのです。

12月11日(火) 問56 マルコ10章9節
神が結び合わせてくださったもの

動物にもとても仲の良いオスとメスがあります。でも、結婚は人間だけがするものです。結婚とは神さまによって結び合わされた一人の男の人と一人の女の人とです。どちらかが自分勝手にその関係を壊すことを「姦淫」と言います。神さまを悲しませることです。

12月14日(金) 問58 エフェソ4章28節
困っている人々に分け与えるように

パウロ先生は、どろぼうをしていた人に「もうイエスさまを信じて神さまの子どもにしてもらったのだから、二度とどろぼうしてはいけないぞ」と言いました。それだけではなく、「これからは自分で働いて、ためたお金を困っている人に分け与えるのだ」と言いました。

12月12日(水) 問56 コリナー6章19節
体は～聖霊が宿ってくださる神殿

イエスさまを信じているわたしたちの体は、神さまの霊が宿ってくださる神殿です。確かに体はやがて死にますが、なくなってしまうのではなく復活します。体を鍛え、健康に気をつけることも信じられる生活です。





12月15日(土) 問58 マラキ3章10節
十分の一の献げ物を～祝福を注ぐ

天のお父さま、明日は礼拝です。おこづかいの中から献金します。もらったお金ですが、神さまのお働きのためにおさげします。私自身も神さまのためにおさげします。神さまのためにお使いください。



いのちのばん

<p>12月17日（月）問60 エフェソ4章25節 隣人に対して真実を語りなさい</p> <p>「うそについてはダメ。」これは神さまの戒めです。神さまは教会を「キリストの体」として、わたしたちをその一部分としてくださいました。教会の交わりは、本当の言葉、本物の言葉によってつくれます。友達にうそをついたら、本当の友情は壊れます。教会でこそ、そうなのです。</p>	<p>12月20日（木）問62 テモテ6章10節 金銭の欲は、すべての悪の根です</p> <p>天のお父さま、「お金持ちになりたい」という思いがすべての悪の根っこだと教えられました。「もっともっと欲しい」という思いからお守りください。神さまが必要なものを与えてくださることを信じさせてください。</p>  <p>Soli Deo Gloria!</p>
<p>12月18日（火）問60 コリニ1章20節 この方を通して「アーメン」と唱え</p> <p>「お祈りしていても、本当に神さまに聴かれているのか分かりません。そんなお祈りなら、しない方がよいでしょうか？」いいえ、自分の真実ではなく、イエスさまの真実が祈りの決め手です。「アーメン」(=真実)と唱えられたら十分です。</p> 	<p>12月21日（金）問62 コロサイ3章5節 貪欲は偶像礼拝にほかならない</p> <p>神さまがもっとも嫌われることが偶像礼拝です。その根っこにあるのは、自分を喜ばせるために「もっと欲しい」というむさぼりの心です。他人のものを奪ってでもそうする人もいます。一つのビスケットを半分にすれば、二つのビスケットになって、お友達と一緒に食べて楽しめるのです。</p>
<p>12月19日（水）問60 ローマ9章1節 真実を語り、偽りは言わない</p> <p>うそ発見器で「神さまを心から信じています」と言う人をためしました。「うそをついている」と出ました。次に「心から信じていない」と言ってみました。「うそをついている」と出ました。自分が心から信じているかどうか、自分で決めないで、神さまにお任せしてください。「アーメン」。</p>	<p>12月22日（土）問62 ローマ12章16節 喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣き</p> <p>お友達と仲良くなりたいたいなら、このような心を神さまに与えていただくようにお祈りしましょう。お友達と比べて多いとか少ないとか、勝ったとか負けたとか、こだわることが、第十戒から離れることです。イエスさまと一緒に喜び、泣いてくださいます。だからお友達が多いのですね。</p>

いのちのばん

12月24日(月) 降誕 マタイ1章16節
マリアからメシアと呼ばれるイエスが

昨日はご降誕をお祝いしました。あらためてクリスマスおめでとう！ 神さまは、一人の若い女の人マリアさんを御子なる神さまのお母さんにされました。イエスさまは本物の人間となってお生まれくださったのです。そして僕たち私たちを罪から救ってくださったのです。感謝！

12月27日(木) 問63 詩編119編127節
わたしはあなたの戒めを愛します

僕たち私たちを愛するからこそ、神さまは戒めや掟を与えてくださいました。ですから、神さまを愛する人は、神さまの御言葉、掟を感謝し、喜び、愛するのです。このような新しい心は、聖霊なる神さまが、イエスさまを信じる信仰のゆえに、与えてくださったのです。うれしいね。

12月25日(火) 降誕日 ルカ3章38節
そして神に至る

イエスさまをお父さんとして育てたのはヨセフさんでした。そのヨセフさんのお父さんの、お父さんの、そのまたお父さん……。最後にたどりつくのは最初の人アダムさんです。最初の人間もイエスさまも、そればかりかあなたも、神さまに至ります。



12月28日(金) 問64 ヨハネー1章10節
神を偽り者とする

十戒を唱え、たったの一つさえも、神さまの前に胸をはって、守っていませんと言えないことがわかります。あなたは本当に罪人なのです。でも、それを認めるなら、神さまはイエスさまの十字架に、よって赦してください。さるのです。



12月26日(水) 問63 詩編119編103節
わたしの口に蜜よりも甘い

十戒は神さまからの「愛の手紙」。正しく読めば読むほど神さまの僕たち私たちへの愛が込められた言葉だとわかり、やさしいみ声が聞こえます。御言葉を蜜よりも甘く感じることで、信じる信仰の舌が与えられますように！



12月29日(土) 問64 ペトローー2章22節
この方は、罪を犯したことがなく

イエスさまだけが罪を犯さなかった、ただひとり人間です。十戒の全部を完璧に守られたのです。あなたが0点であっても、イエスさまは100点満点です。イエスさまのおかげで、あなたは神さまに、100点満点の人間として見られています。だから、安心して十戒を生きて行こう！

2008年1～3月カリキュラム（第28号）

—救済史に基づく二年サイクルカリキュラムの二年目—

月日 教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句	対 応 表
	単 元 の 目 標			
1月6日 新年	エルサレム会議	使徒15:1-21	使徒15:11	63
	教会は聖霊に導かれて「恵のみ」の真理を確認した。教会の交わりを大切に			
1月13日	異邦人への伝道	使徒16:6-15	テモテニ4:2a	64 65
	聖霊に押し出されて、異邦人伝道に向かうパウロ。その姿に学ぼう			
1月20日	看守の救い	使徒16:16-34	コロサイ1:13	75
	迫害を用いてさえ成し遂げられる救いのみわざ。神のご計画に信頼しよう			
1月27日	アレオパゴス説教	使徒17:16-34	使徒17:24b	66
	パウロの異邦人向け説教。偶像の神々を捨てて、まことの神に立ち帰ろう			
2月3日	「土の器なれど	コリントニ4:1-15	コリントニ12:10b	(76)
	死すべき土の器にキリストの復活の命が現れる。宝の器であることを喜ぼう			
2月10日 レント（信教）	競争を走り抜くパウロ	フィリピ3:12-21	コロサイ3:1	(76)
	再臨のキリストを待ち望みつつ、ひたすら走り抜く信仰の姿にならおう			
2月17日 レント	喜びへと励ますペトロ	ペトロ一1:3-9	ペトロ一1:8	(76)
	生き生きとした希望をいただき、言葉では言い尽くせない喜びに生きよう			
2月24日 レント	天上のキリスト	黙示録1:9-20	イザヤ55:11	77
	天上にあって教会をご支配しておられるキリストの御姿を仰ごう			
3月2日 レント	天上の礼拝	黙示録4章	黙示録4:8c	
	地上の礼拝は天上の礼拝に連なっている。礼拝の恵みを喜ぼう			
3月9日 レント	新しい天と新しい地	黙示録21:1-8	黙示録21:4b	77
	神人と共に住みたもう礼拝の完成。新しい天と新しい地を待ち望もう			
3月16日 受難週	受難・十字架のキリスト	マタイ27:45-56	マタイ27:54b	66
	わたしたちのために捨てられた神の御子の恵みにあずかる			
3月23日 イースター	復活祭・復活のキリスト	マタイ28:1-10	マタイ28:7b	67
	「恐れるな」との復活のキリストの御声に耳を傾け、復活を喜ぼう			
3月30日	再臨を待ち望む	黙示録22:6-21	黙示録22:20b	
	わたしたちの希望はキリストの再臨にかかっている。キリストを待ち望もう			

※「対応表」欄の上段は、『教会学校教師指導書（旧約編・新約編）』（日本基督改革派教会大会教育委員会発行）の該当する単元を示しています。「対応表」欄の下段は、『神の救いの歴史』（日本基督改革派教会教育委員会発行、1999年）の該当する単元を示しています。

2007年度 年間カリキュラム

(2007年4月～2008年3月)

二年サイクルの聖書物語（救済史）と教会暦の併用カリキュラム

年・号	月 日	教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所
2007年 25号	4月1日	受難週・進級式	キリストの受難	ルカ23:13－25
	4月8日	復活祭	復活のキリスト	ルカ24:36－49
	4月15日		ヨルダン川を渡る	ヨシュア3章
	4月22日		エリコの攻略	ヨシュア6章
	4月29日		ギデオンの精鋭	士師記7章
	5月6日		サムソン	士師記16章
	5月13日	母の日	ナオミとルツ	ルツ記1章
	5月20日		ルツとボアズ	ルツ記2章（～4章）
	5月27日	聖霊降臨祭	新約の教会の誕生	使徒言行録2:1－13
	6月3日		ダビデとゴリアト	サムエル上17章
	6月10日	花の日	ダビデとヨナタン	サムエル上20章
	6月17日	父の日	ダビデへの契約	サムエル下7章
	6月24日		ソロモンの神殿建築と祈り	列王記上8:22－53
26号	7月1日		王国の分裂	列王記上12章
	7月8日		バアルとの対決	列王記上18章
	7月15日		残りの者	列王記上19:1－18
	7月22日		裁きの預言	エゼキエル6章
	7月29日		回復の預言	エゼキエル34章
	8月5日		燃え盛る炉	ダニエル3:1－30
	8月12日	(平和)	ライオンの洞窟	ダニエル6章
	8月19日		城壁再建	ネヘミヤ2章
	8月26日		主を喜び祝う	ネヘミヤ8:1－12
	9月2日		役人の息子のいやし	ヨハネ4:43－54
	9月9日		ベトザタの池でのいやし	ヨハネ5:1－18
	9月16日	(17敬老の日)	生まれつきの盲人のいやし	ヨハネ9:1－12
	9月23日		ラザロを生き返らせる	ヨハネ11:1－44
9月30日		キリストの十字架	ヨハネ19:28－30	

年・号	月 日	教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所
2007年 27号	10月7日		復活の主イエスとペトロ	ヨハネ21:15－19
	10月14日		主イエスの昇天	使徒1:6－11
	10月21日		聖霊の降臨	使徒2:1－13
	10月28日	宗教改革記念日	ペトロの説教	使徒2:14－42
	11月4日		美しの門でのいやし	使徒3:1－10
	11月11日		アナニアとサフィラ	使徒5:1－11
	11月18日		ステファノの殉教	使徒7:54－60
	11月25日		サウロの回心	使徒9:1－19a
	12月2日	アドベント	待降節・義の太陽	マラキ3:19－24
	12月9日	アドベント	待降節・マリアへの告知	ルカ1:26－38
	12月16日	アドベント	待降節・マリアの賛歌	ルカ1:39－56
	12月23日	クリスマス	降誕祭・主イエスの誕生	ルカ2:1－20
	12月30日		ペトロに示された幻	使徒10:9－33
2008年 28号	1月6日	新年	エルサレム会議	使徒15:1－21
	1月13日		異邦人への伝道	使徒16:6－15
	1月20日		看守の救い	使徒16:16－34
	1月27日		アレオパゴス説教	使徒17:16－34
	2月3日		土の器なれど	コリント二4:1－15
	2月10日	レント (信教の自由)	競争を走り抜くパウロ	フィリピ3:12－21
	2月17日	レント	喜びへと励ますペトロ	ペトロ一1:3－9
	2月24日	レント	天上のキリスト	黙示録1:9－20
	3月2日	レント	天上の礼拝	黙示録4章
	3月9日	レント	新しい天と新しい地	黙示録21:1－8
	3月16日	受難週	受難・十字架のキリスト	マタイ27:45－56
	3月23日	復活祭	復活祭・復活のキリスト	マタイ28:1－10
	3月30日		再臨を待ち望む	黙示録22:6－21

〈執筆者よりひとこと〉

- 初めて分級を担当しました。子供たちの顔を思い浮かべながら執筆しました（勝田台教会日曜学校教師会）。
- 楽しく、わかりやすく、聖書に親しめる展開をめざしました（豊明教会日曜学校教師会）。
- 各教会の教会学校教師の尊い働きを主に感謝いたします（岡本告）。
- 主の日ごとの日曜学校を通して、子供たちがすこやかに成長していきますように（木下裕也）。
- 中高生キャンプで出会った子どもたちの成長を主に感謝しつつ、日頃の教会学校の積み重ねを実感しました（辻幸宏）。

〈あしがき〉

- 先の4月に、中部中会の教育関連の諸委員会が再編され、新しい体制でスタートしました。教育委員会は、中会全体の教育に視野を広げ、教育ビジョンとプログラムを立案することに取り組むこととなりました。また、日曜学校と子どもの信仰教育の営みを担う「日曜学校委員会」が新設されました。日曜学校教師の研修プログラムを企画するなど、意欲的に取り組んでいるところです。

- 弊誌の発行は、この日曜学校委員会のもとで継続されます。今後ともよろしく願いたします。
- 千里摂理教会の教会学校教師、辻泰男兄がクリスマス工作例をお寄せくださいました。心から感謝申し上げます。実際に分級でなされた工作ということ。皆さんの教会でもいろいろな実践例があるでしょう。ぜひそれらをお寄せいただければと願います。皆さんのお力で、誌面を豊かなものにしていただけるとたいへん幸いです。
- クリスマスを迎えます。いろいろな営みが計画されるでしょう。多くのお友だちが御子イエス・キリストの降誕を喜び祝い、まことの救い主を知ることができますように。

〈購読の申し込み〉

- 『教会学校教案誌』をぜひご購読ください。また、別冊『子どもカテキズム』（300円）をぜひお買い求めください。バックナンバーもあります。第20号までは一部500円で販売しています（品切れの号もあり）。

名古屋岩の上传道所 相馬伸郎まで

〒458-0021 名古屋市緑区滝の水2-2012

Tel/Fax. 052-895-6701

☆ 執筆者一覧 ☆

まえがき	望月信 (高蔵寺教会牧師)
木下裕也 (名古屋教会牧師)	三川栄二 (稲毛海岸教会牧師)
巻頭説教	辻幸宏 (大垣伝道所協力牧師)
久保浩文 (高知教会牧師)	石原知弘 (北神戸キリスト伝道所宣教教師)
教会学校・日曜学校訪問	梶浦和城 (豊明教会牧師)
貫洞賢次 (札幌伝道所宣教教師)	木下裕也 (名古屋教会牧師)
特別寄稿	分級展開例
吉田謙 (千里摂理教会牧師)	幼稚科 小堀昇 (いずみ伝道所協力教師)
クリスマス工作	小学科下級 勝田台教会日曜学校教師会
辻泰男 (千里摂理教会教会学校教師)	小学科上級 豊明教会日曜学校教師会
聖書研究	中学科 岡本告 (秩父教会牧師)
望月信 (高蔵寺教会牧師)	成人科 吉田隆 (仙台教会牧師)
辻幸宏 (大垣伝道所協力牧師)	いのちのパン (子ども聖書日課)
梶浦和城 (豊明教会牧師)	相馬伸郎 (名古屋岩の上伝道所宣教教師)
芦田高之 (新浦安伝道所宣教教師)	弓矢容子 (名古屋岩の上伝道所日曜学校教師)
赤石純也 (西神伝道所協力牧師)	表紙イラスト
長谷川潤 (四日市教会牧師)	吉田恵美子 (千里摂理教会)
小野静雄 (多治見教会牧師)	本文イラスト
杉山昌樹 (瑞浪伝道所宣教教師)	新海敬造 (名古屋岩の上伝道所)
説教展開例	岡田雅絵、千紘 (大垣伝道所教会学校生徒)
相馬伸郎 (名古屋岩の上伝道所宣教教師)	

☆ 編集部 ☆

相馬伸郎 (長)	名古屋岩の上伝道所宣教教師
木下裕也	名古屋教会牧師
辻 幸宏	大垣伝道所協力牧師
望月 信	高蔵寺教会牧師
梶浦和城	豊明教会牧師

日本キリスト改革派教会 中部中会 『教会学校教案誌』
2007年10・11・12月号 (季刊)
第27号
2007年8月26日発行

発行	日本キリスト改革派教会 中部中会 日曜学校委員会
発行所	日本キリスト改革派教会 中部中会 教会学校教案誌編集部 名古屋岩の上伝道所 宣教教師 相馬伸郎 〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012 Tel/Fax. 052-895-6701
郵便振替口座	00890-2-148183 「伊藤治郎」
編集・印刷	株式会社あるむ 〒460-0012 愛知県名古屋市中区千代田3-1-12 第三記念橋ビル3F
頒価	900円 (本体価格)
